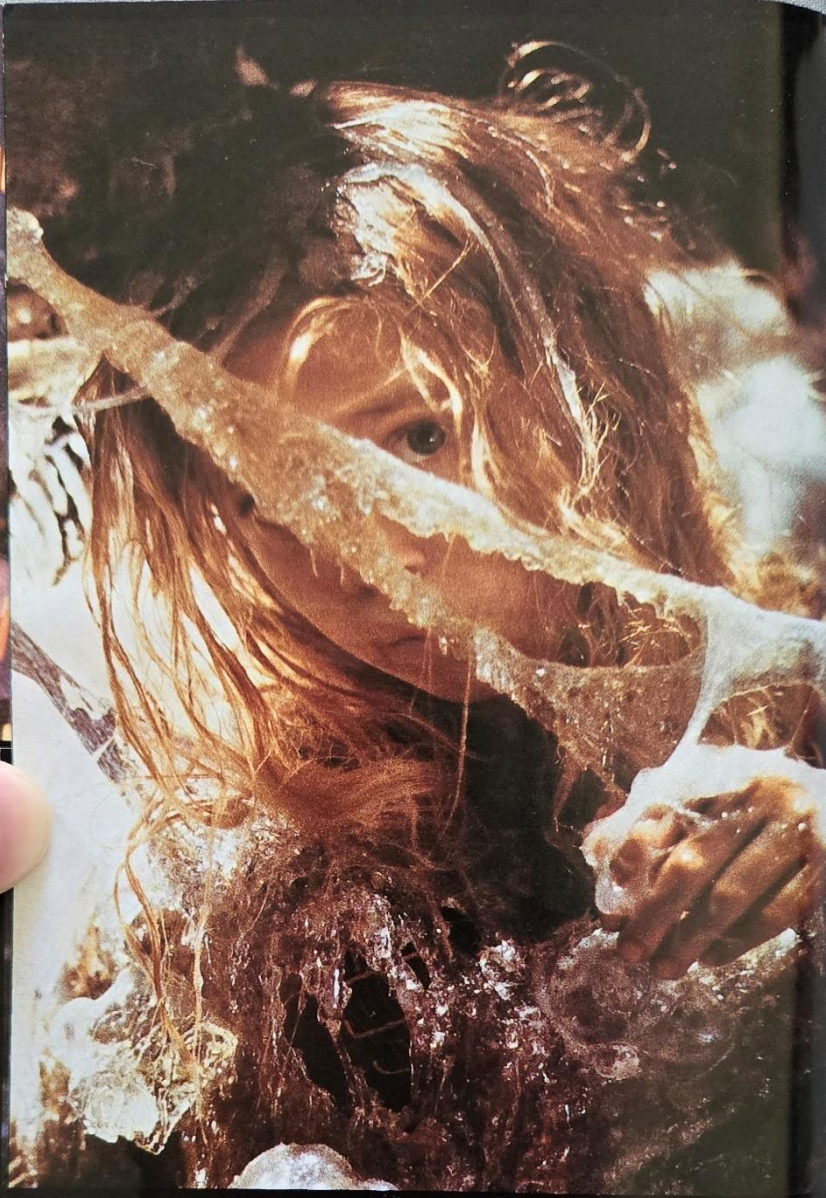
アドベンチャーノベルス

ADVENTURE NOVELS

# ALIENS

## エイリアン2

JICC出版局　佐々木隆



1 エイリアンに捕われたニュート ……⇨162へ

**5** 「キャーッ」エイリアンはニュートに襲いかかる ……⇨55へ

**6** 少女は“ニュート”と名乗った ……⇨130へ

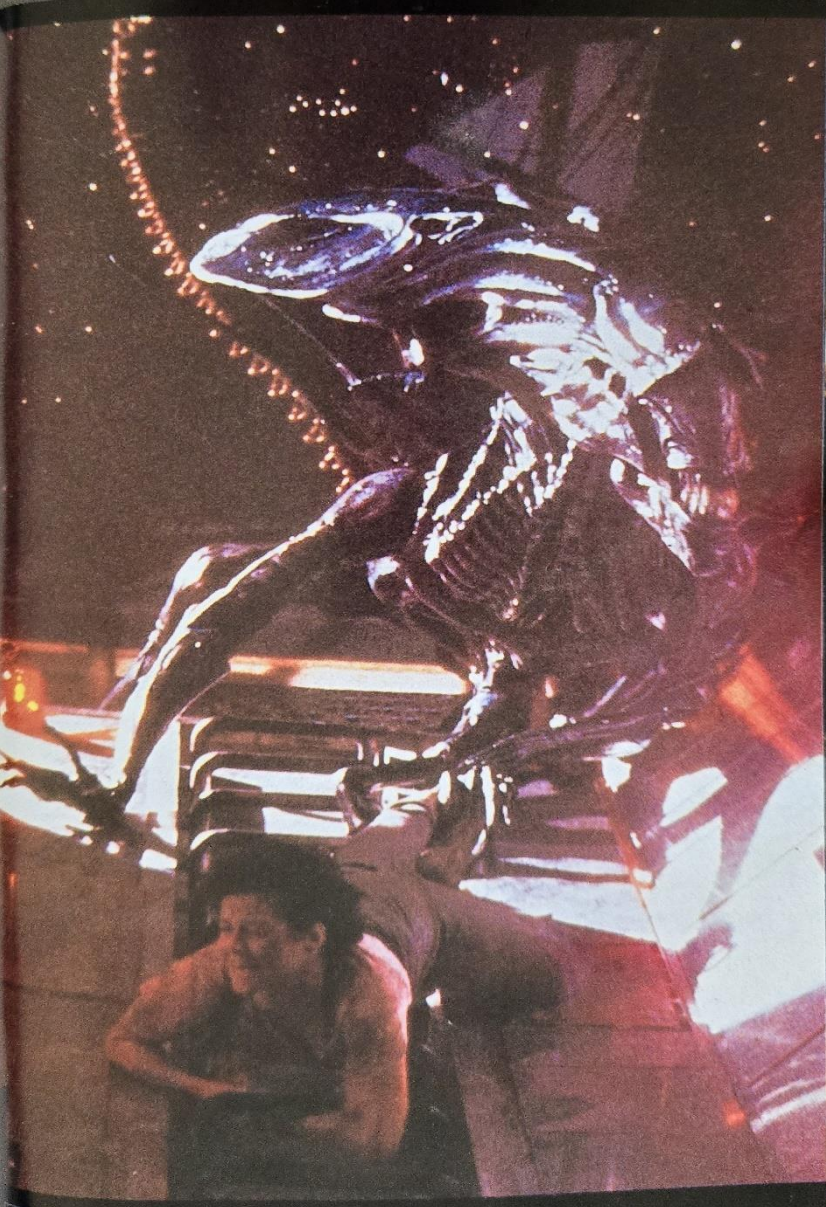
**3** そこには、巨大な女王エイリアンがいた ……⇨163へ

**2** 隊員たちはスマートガンを先頭に戦闘体勢で進む ……⇨212へ

**4** 襲いかかるエイリアン ……⇨83へ

7 パワーローダーを服使、女王と対決するリプリー ……⇨160へ

10 二人は炎と爆風の中を逃げる…
11 兵士たちは異様な光景に遭遇し…
73へ
8
9
「生きているわ」だが、その女の胸が異常に膨れあがり――
194へ
205へ
13 ようやく生存者を発見
20へ
12 リプリーは無数の卵を焼きつくす
AIRWAY



14 リプリーは懸命に船内へとステップを上るが ……⇨232へ

アドベンチャーノベルス

# エイリアン2

## ALIENS™

JICC出版局・佐々木隆

JICC出版局

Adventure Novels

"ALIENS"™.

Based on Activision's computer game of the movie

"ALIENS"

™designate a trademark

of Twentieth Century Fox Film Corporation.

©1986 by Twentieth Century Fox Film Corporation.

Published by JICC Publishing Division

# エイリアン2

# はじめに

本書は、二〇世紀フォックス社製作・配給、ジェームス・キャメロン監督の映画『エイリアンズ（邦題、エイリアン2）』を基にしたアドベンチャーノベルスです。映画の面白さにゲームの手法をプラスした、新しい形のエンターテイメントになっています。メインストーリーは映画そのものと同じですが、本書は、既に映画を御覧になった方にも、またそうでない方にもお楽しみいただけるよう作成しております。

ゲームブックファン、映画ファンの如何を問わず、本書を通じ、エイリアンとの戦闘におけるタクティカルな選択、臨場感あふれるアクションの満喫を、またスクリーンの豊かなディテールと興奮の再現をしていただけることでしょう。

なお、本書を読み進めていただくにあたっては、あらかじめ次のことをふまえておいてくだ

さい。

●1のシーンよりはじめ、各シーンの文末の指示に従い選択等を行い、示された後続シーンへと進めること。

●各シーンの文末に、**Aをチェックすること**等の指示があった場合は、シオリに書かれたアルファベットに印を付けるなどして、後になってそれがチェックしてあるのか、ないのかが判るようにしておくこと。

アドベンチャーノベルス編集部

# 1

宇宙は闇の中にあった。すべてを吸い込んでいるような闇の空間は、全くの虚無の空間でもある。例え一匹の羽虫が迷い込んだとしても、その羽音は、砂の中に浸み込む水のように吸い込まれ、漠としたその世界は何の狂いもなく佇んでいることだろう。

そんな無限の世界――。そこに、これから恐怖の戦闘シーンがくり拡げられることになるとは、誰が予想しえただろうか。

そして、いま。宇宙空間を滑る一隻の船があった。その名は、スラコ号。目的地はLV426惑星。いまは、アケロン、と呼ばれている星。その星からの通信が途絶え、原因を調べに行くところなのだ。が、まだ、船内は、眠りの中にいる。静けさの中にいる。いわば、嵐の前の静けさ……。

静けさはやがて破られるときがくる。スラコの船内で微音が周辺の空気を震わせた。それまで虚無の世界にあったスラコが目を覚ましたのだ。

時間制御の人工睡眠カプセルのカバーが次々と開き始める。それがきっかけとなり、中に眠っていた人間――戦士たちも、深い眠りからたたき起こされる。

彼らは、ロッカールームへと進む。

「さあ、起きろ、起きるんだよ。いつまでもネボケているんじゃねーぞ」

あっという間の変化だ。叫んでいるのは誰なのだろうか……。リプリーは、長い間の眠りから覚め、背のびをする代わりに、腕を揉む。そして、脚のマッサージを始める。彼女からは、戦士たちの顔がよく窺えた。それぞれ、海兵隊員らしく、りりしい身体つきをしている。ヴァスケスという女性兵士は、女ながら逞しい身体つきを見せて、懸垂をしている。横にドレイク。二人は握手をして、視線を交し合っている。それはまさに、兵士の表情だ。が、リプリーは心の中で呟いていた。彼らのうち、どれだけの人数が、これから遭遇するであろう本当の怖さを、あの、生命体、エイリアンの身も凍るような正体を想像しているのだろうか。エイリアンがいること自体、想像していないだろう。多分、一人としていないだろう。それを知っているのは、私、一人……。

⇩240へ

## 2

兵士の数は、男子九人、女子三人。そして、会社代表としてバーク。作戦のテクニカル・アドバイザーとしてビショップが。加えてリプリーの十五人がスラコに乗り込んでいる。彼らは、よりすぐられた兵士たちなのだろう。それを思うと、これから始まるかもしれない戦いにもわずかな安堵を覚える。しかし、と、リプリーは再度、反すうした。

彼らは、エイリアンの存在も信じず、しかも本当の姿を見たこともない。それを思うとリプリーは戦慄すら覚える。だからこそ何が何でも彼らの頭の中に、エイリアンの恐ろしさ、自分

が体験した恐怖を伝えねばならないのだ。

⇩226へ

**3** ヒックスの後からフロストが追いついてきた。身をかがめ続けていたせいだろう。フロストは腰を揉むような動作をしながら訊いた。

「彼女は？」

「戻るんだ！」

「えっ……」

そのひと言で意味が判ったようだ。フロストは、彼の後ろから来ているドレイクを追い返しながら、通路の方へと戻り始めた。

通路では、ハドソンが騒いでいる。彼の動体センサーが、忙しく鳴っているのだ。

「化物はどうした」

興奮した声をあげる。その目はつりあがり冷静さを欠いているようだ。

「化物ではない。子どもだった」

「子ども？」

ヴァスケスが、スマートガンの銃身を上に向けて尋ねた。彼女には動体センサーの警報音からは、子どもとは思えなかったのだ。

「何だ、子どもか……」
ゴーマンが、呟いた。その表情には、安堵感が漂っていた。バークも、肩の力を抜く、が、ヴァスケスからは緊張の表情が消えない。その眼が鋭く光った。
「子どもじゃない！　もっと大きい！」
スマートガンの銃口を通路の奥、天井、などに向け、射撃体勢をとり始めた。
「何言ってるんだ。子どもだったら、怖がることないだろう」
ゴーマンがヴァスケスに言った。その目には、バカなことを言うな、という嘲りの匂いがこもっている。そして、大きな声で、
「よーし、前進するぞ！」
ヴァスケスの言葉も無視して叫んだ。指揮官としての威厳を示したつもりだった。⇩38へ

## 4

ヴァスケスはイラだっていた。オリの中の熊のようにウロついている。
「えーい、どうしようってのよ。これだけの人数じゃ、あそこに下りていって戦うこともできない。そうだ、神経ガスをブチ込んでやろうよ」
「神経ガスは効果がないでしょう。だからここから離陸し、衛星軌道から核爆弾を射ち込むのよ。それが一番、確実だと思うわ」

ハドソンがカン高い声を上げた。
「俺はリプリーの案に両手あげて賛成するぜ」
「ちょ、ちょっと待ってくれ」
バークが、リプリーの言葉に慌てた。
「ぼくにはそんな行動を許すことはできない」
「まだ、ここでやつらとダンスでもやろうと思ってんのか」
ハドソンが、酸で傷んだ腕をさすりながら、いかにも会社代表という顔をして言うバークに詰め寄った。
「何も、そんな」
「じゃー、どうして反対するの？」
リプリーがさらに追い詰める。
「き、き、君！　君らはよく分かってないからそんなことを言うんだ。この施設をつくるのにどれだけの……巨額な投資が行われているか知ってるのか」
「それじゃ、私につけておいて！」
「ヒックス」リプリーはバークを正視したまま、「あなたが指揮官でしょ。あなたが決めて」

ヒックスが一瞬、戸惑いの表情を浮かべた　⇩18へ

**5**　ゴーマンは、いつもの彼らしくなかった。何も言わずに宙を見つめている少女の心を何とか開こうと必死だ。何はともあれ、少女はアケロンにおけるただ一人の生き残りらしい。彼女の持っている情報は、彼らにとって今後の軍事行動を決定づけるうえでなくてはならないものであるはずだ。

「お嬢ちゃん、何か食べたいものは？　お腹、すいてるでしょう」

側で見ていても涙ぐましい努力である。彼を見ていたリプリーが、心の中で呟いた。

〝こういう我慢強さもあるのかしら〟

少女の髪を撫で、手を握り、擦って暖めてやる。だが、普段やりつけないことをやっているためか、額に脂汗を浮かべている。仕草もどことなくドギマギして、落ち着かない。

その仕草がおかしかったのか、少女の瞳がわずかだがチラッと動いた。ゴーマンは、自分の額の汗を拭いているために、彼女の表情は見えない。はっと気がついたときには、彼女の視線はまた元に戻り、以前の無表情な少女に戻っていた。

ゴーマンは、苛立ち始めていた。

**●もう少し根気よく、少女への質問を続ける**　……⇩14へ

**●少女はそっとしておいて、他の方法を考える**　……⇩31へ

●これ以上は時間のムダだ。少女はそっとしておいて、他の方法を考える ……⇨51へ

**6** 「あと、時間はどのくらい残ってるの？」

「二六分。充分ある」

「まだ出発しないわ」

「まだ!?」

操縦席（コックピット）にいるビショップは、驚いて尋ねた。リプリーは答える。

「大気改造ステーションの離着フロアで待っていて。必ず時間内に戻ってくるわ。ヒックスをお願いね！」

リプリーは、武器倉庫へ飛び込んだ。銃架床からパルスライフルを一挺（ちょう）抜き取る。続いて火炎放射器を一台。粘着テープで、パルスライフルに火炎放射器を合体させる。銃床部分と、銃身部分、そしてもう一箇所、入念にテープで固定した。弾倉棚（マガジン）から、百連弾倉（マガジン）を取り出し、パルスライフルに装塡（そうてん）する。

トリッガーガードのすぐ脇の残弾表示板に赤いデジタル文字が浮かびあがった。

手榴弾（しゅりゅうだん）の収納ケースを開ける。30ミリの散弾型手榴弾が整然と並んでいる。それらの一つ一つを慎重に弾帯（ガンベルト）に装着する。

「あと、一七分でここは粉々になる」
ビショップの声が艇内のスピーカーから響いた。
「一七分……それだけあれば充分だわ」
リプリーは自分を励ますようにいい聞かせた。
着陸艇（ドロップシップ）は、大気改造ステーションの十階にある離着フロアに到着した。

●もう一度、装備を点検する ……⇨13へ
●時間がない。このまま、飛びだす ……⇨36へ

**7** ヒックスを制して、リプリーは穴の中に身を乗り入れていった。暗い。どうやらそこは、以前、ゴミ収容所のようだった。目をこらすと、部屋の隅に、子どもが壁にへばりつくように怯（おび）えているのだ。少女は見るからにやつれ果てた様子で右手に頭だけで胴体のちぎれた人形を大事そうに持っている。左手で、食べかけの食料を持っているのが痛々しい。ブロンドの髪の毛はすすけたように元の色を失っている。ダンボールや、ぬいぐるみの散らばっている中にいるために、ますます痛ましさがリプリーの心に宿った。そこは少女の逃げ場であり、隠れ家だったに違いない。居住区から、食料やらぬいぐるみなどを集めて、ここに隠れ続けて生きのびることができたのだろう。

## 7

少女は、リプリーの前から身を翻そうとした。その瞬間、リプリーは彼女に飛びつき、抱きしめた。少女は、身体全体で抵抗する。しかも、無言のままだ。

「大丈夫。もう大丈夫、助かったのよ。安全なのよ」

リプリーは、力いっぱい抱きしめながら少女に語り続けた。やがてリプリーの腕の中で少女の抵抗は弱まり、全身の力が抜けた。少女の目はうつろに宙を見ているようだった。そんな少女を抱きしめながら周囲に目を配ると一枚の写真が目に入った。その中にいるのはまぎれもなく、目の前にいる少女だ。ドレスアップし、しなやかな髪の毛にはリボンがアクセントの華をそえている。肌は水々しく健康で、平和だった頃の彼女を伝えていた。写真の下に名前がある。そこには、

第一級市民賞
レベッカ・ジョーダン

と、金文字で刻まれていた。

「リプリー！」

ヒックスの心配気な声が聞こえる。

「大丈夫。二人とも大丈夫」
リプリーは少女を抱いたまま、彼女の隠れ家から脱け出した。

⇩口絵13へ

## 8

温かいココアの入ったカップを持って、少女の方へと歩いていくリプリーを、ゴーマンは不安気に見つめている。彼の目にはどこか祈るような思いがあった。
リプリーはゴーマンのそんな視線を痛いほど感じていた。が、彼女は、自信があった。
〝自分にも、あの娘と同じくらいの娘がいた。あの娘を自分の娘だと思えば、必ず、あの娘も心を開いてくれるだろう〟
そう思っていたのだ。
彼女の娘は十一歳であった。しかし、リプリーが、宇宙をさまよっている間に、娘は死んだ。ガンだったという。バークが、調べ出してくれたのだ。その事実を聞かされたとき、彼女は深い絶望感に襲われた。この作戦に加わったのも一つには、気持ちの奥の方に、そんな悲しみを忘れたいという心理が働いていたからかもしれない。
リプリーは、自分の娘に接するのと同じ気持ちで少女に接した。子どもに接するときに大切なのは、スキンシップだ。
「あなたの髪、本当はもっとサラサラしているんでしょう」

語りかけながら、少女の髪の毛を手で揉みながら汚れを落とす。ボロボロとこぼれる汚れを見て、ゴーマンはやはり自分は男だ、と思った。女というものは十歳だろうが、四十歳だろうが、いつでも自分は美しくいたいものなのだ。

「身体をきれいにしましょう。そうするとあなたもきっとレディーになれるわよ。可愛い顔してるもの」

汚れた髪から今度は、指に移り、一本一本ていねいに爪の先までリプリーは水を含んだ布で拭き、彼女を立ちあがらせた。顔を拭かれたり、指をきれいにされたりが気持ち良かったのだろう。少女の表情に生気が戻ってきたように思えた。

⇩16へ

**9** リプリーは、先に走って行った少女の後を追っていく。後から誰かが従いてくると思ったのに、振り向くと、自分一人だけになっているようだ。おまけに、少女を追いかけているうち、ダクトを何回も曲がった。そのせいで自分の現在位置が判らなくなっていた。

帰るにも位置が判らなくてはどうにもならない。途方にくれたリプリーは、一瞬、判断に困った。が、いつまでも、そこでためらっているわけにはいかない。

「少女を探そう」

決心したリプリーは、少女が走って行った方向を見る。いない。それでも見当をつけながら、

リプリーは、前進する。

数歩行くと、三差路に出た。右に行くか、左に行くか、そこでまた、迷ってしまった。

〝カタッ〟

右側の方からかすかな物音が聞こえた。先程の少女かもしれない。リプリーは一瞬、思考を巡らせた。

●あの少女かもしれない。物音のした方向へ進む……⇨3へ

●あの少女とは限らない。ここに止まって様子をみる……⇨7へ

## 10

リプリーの隣にビショップが来た。どこか冷たそうな表情が不気味に見える。

「失敗してしまったか」

彼は、呟いた。

その指から、ミルク色の液体が流れているのだ。

リプリーは思わず、目を疑った。その指の傷から流れ出ているものは、そう、人間の血とはまるで異質の物質なのだ。

「アンドロイド！」

リプリーは叫んだ。彼女にとってアンドロイドは憎むべき存在以外の何者でもない。彼女た

ちがエイリアンに襲われ、苦労するはめになったのは、アンドロイドがエイリアンを連れて帰ろうとしたからなのだ。宇宙を滑る、ノストロモ号。そして、エイリアンを極秘に地球に持ち込もうと、プログラムされたアンドロイドのアッシュ。死んだ仲間たち。などがフラッシュ・バックする。そのときの恐怖の想い出が彼女の脳裡にまざまざと甦った。

「誰がこんなロボットを乗せたの！」

リプリーは、嫌がる自分を説得し、乗船させるきっかけをつくった、バークの顔を見た。

「私はアンドロイドのために仲間を殺され、ひどい目にあってるのよ」

ビショップがリプリーを怪訝そうに見る。

「悪かった、黙っていて。だがビショップは違うんだ。確か以前君と同行したのは、サイバディーン・システム社の１２０—Ａ／２型だったはずだ」

バークが答える。

「それなら分かる。それは古いモデルだ。私は人間を傷つけるようなプログラムはされてないんだ」

ビショップが言いながら視線を元に戻した。

「彼は心配ない。優秀なんだ」

バークはそう言うと、そそくさと、食べかけている食器に手を伸ばす。

「ロボットではない、合成人間（シンセティック）といって欲しい」
声はビショップだった。その横顔は、いかにも合成人間（シンセティック）らしく、表情に乏しい。そのせいだろうか、冷徹そうに見える。そんな無表情の顔を見ていると余計、リプリーの気持ちは冷静さを失うのだった。
ビショップが、スクランブル・エッグの皿を出す。
「おかわりはどうかね」
「冗談じゃないわ、こんな人と一緒に食事したり、LV426へ行くなんて」
リプリーは激昂（げっこう）しながら、皿をはねとばした。
リプリーの態度に、兵士の間から小声で、しかも聞こえよがしに皮肉がもれた。
「アンドロイド・アレルギーって奴か」
「そのうえ、俺たちみたいな兵隊とは、一緒にメシを食うのも、お気に召さないらしいぜ」
リプリーは完全に連中から浮いていた。
**●完全に頭にきた。不愉快だ。食事などする気にはなれない。決然と席を立つ** ⇨65へ
**●カリカリしても大人気（おとなげ）ない。連中のことは気にせず、おとなしく食事を摂（と）る** ⇨78へ

## 11

リプリーは炎と爆風の中を走った。ニュートに渡したロケーターが、彼女の居場所を特定してくれる。センサーの距離メーターが、どんどん、ゼロに近づく。

「近い。すぐそこにいる」

リプリーは、メーターを見ながら走る。

と、メーターがゼロを示した。ここだ。見回す。が、ニュートの姿はない。そこには、ブレスレット状のロケーターが落ちているだけだった。

「ニュート！」

リプリーは絶叫した。リプリーは背筋が寒くなった。ニュートは死んだのだろうか。いや、そんなことはない。あるはずがない。心の中で叫びながら、銃を握りしめる手に力が入った。彼女は、半狂乱になっていた。センサーが落ちていたということは、その近辺にいることだろう。それにまだ、死んではいないはずだ。

⇩175へ

## 12

ハドソンがわめき散らす。

「どうしたってことだ。何であいつら、逃げ出したんだ。モニターはどうして作動しなかったんだ。こんなことが起こるわけがない。一体、どうなってるんだ！」

リプリーは疲労の極地という声で呟いた。
「バークのプレゼントよ」
リプリーは険しい表情でバークを振り返った。ハドソンが感きわまったように、ライフルを向け、
「あんた、地獄よりの使者か？　えー、それとも、エイリアンの生まれ代わりかい？　どっちにしたって、生かしちゃおけねー」
さらにヒックスが後を続けた。
「俺は家柄を大事にするんでな。これも家宝なんだ」
例のショットガンをバークの鼻先へ突きつけた。
「こういうときの家訓がある。家訓第九条の三項、こういうやつは平和の敵だ。すぐ殺すべし、とな。それにしてもなんでこんなことをしたんだ。えー？」
「エイリアンが欲しかったんでしょう。そして生物兵器をつくる。兵器産業は金になるものらしいわね」
リプリーが怒りの表情を浮かべる。横にいたヴァスケスが首を捻った。
「なぜ、あんたたちをあいつらで殺そうとしたのかしら」
「私とニュートの身体に卵を産みつけさせようとしたのよ。そして地球に連れていく。あとは

分かるでしょう」
「あたしたちがいるのに？」
「ハイパースリープカプセルの時間を自分だけ早めておくのよ。自分だけ早く目覚めて、あなたたちは、船外へ放出するなり、何でもできるわ」
「やっぱり死んでもらうしかねーな。えっ、バークのおっさんよ」
ハドソンが唾をとばしながら叫んだ。

●皆でバークを処刑する……⇨28へ
●とりあえず生かしておく……⇨161へ

## 13

リプリーは再度、武器倉庫へと引き返した。中に入り、信号弾をポケットに突っ込んだ。
ビショップがものものしい装備をして降りようとするリプリーに訊いた。
「リプリー、ちゃんと帰ってこれるかい？」
「大丈夫。じゃー、ビショップ、頼むわね」
「OK」
リプリーは、着陸艇から降り、再度、強風の中、大気改造ステーションの地下C階へと向かうエレベーターに乗り込んだ。

※Eをチェックして……⇩50へ

## 14

リプリーはゴーマンの言動にどこか捨て身の匂いを感じた。どう見ても、中尉としては頼りがいはない。表情を見ても、どこかヌケているようなタレた目。反応の鈍さ。そんな彼の態度が、兵士たちにバカにされていることも知っている。

「でも、いまの彼は違うみたい」

リプリーは、少女の心を開こうと格闘しているゴーマンの姿に、いままでにはない親近感を覚えた。

少女に飲ませようとして、ココアを温めているゴーマンの側にリプリーが寄っていった。

ゴーマンは、ぎこちない手つきで、皮膚センサー自動湯沸器に手を触れようとしていた。

「私がやるわ」

「……?」

振り向いてリプリーの顔を凝視したゴーマンは、おもむろに口を開いた。

「これは、軍事行動だ」

あっけに取られてリプリーはゴーマンの目を見つめる。どうやら真剣で、本心から出た言葉らしい。本来なら、あきれるところだがリプリーは苦笑しただけで、諭すように答えた。

「軍事行動は分かります、中尉。でも、こういう仕事は、女性の方がいいと思います。中尉、命令してください」

できるだけ〝中尉〟という部分に力を入れた。ゴーマンの目を見ると、リプリーが何をいわんとしているのかが、よく把握できてはいないように見える。

リプリーは、再度、言った。

「命令を」

「……何の命令だ」

「少女から、情報を訊き出すこと」

チラッとゴーマンの目が動いた。そして、また、元の表情に戻ると、

「これは軍事行動だ。また、あの娘から仕入れる情報は軍の機密でもある。したがって民間人である君に命令を下すことはできない。が、一つだけ、頼めることはある」

「何ですか」

リプリーは、わざと無表情で訊く。

「このココアをあの娘に飲ませることだ。これは命令ではない。依頼だ。実は私は、ネコ手で熱いものを掴めないのだ」

思わず吹き出しそうになったが、リプリーは、姿勢を正し、靴のかかとをパチンとぶつけて、

答えた。
「了解！」

⇩8へ

## 15

スラコは、目的地へ向かうために、最後の軌道修正をし、進入し始めていた。コンピュータにコマンドを送りながらビショップは軌道をはずれることのないように監視を続けている。数多くある入力キーは、一つでも叩き誤るとその先には悲惨な未来が待っているのだ。それだけに、正確さの要求される仕事なのだ。

船内では、貨物の積み替え作業が行われていた。リプリーはそんな中、何か手伝うことはないかと見回す。

「ほら、そんなところにいても邪魔だよ」

ガチャ、ゴトン、という音がして、そんな声が聞こえた。その大きな金属音は、パワーローダーの音だ。鉄骨だけで中身のないロボットのような形をしている。見ためはゴツいが、そのパワーは強力だった。二本の鉤のような腕が、巨大なコンテナをガッチリ掴み、軽々と運搬する。その中に人間が入り、操縦桿を握って操作する。操作する人間の動作はそのまま、巨大な手足に伝えられるというわけだ。

パワーローダーを操作する者、他に牽引車やローディングアームを操作する兵士、人間もま

るで機械の一部になったように、流れている。

兵器庫では、ヴァスケスは、スマートガンを手にとり、愛しいもののように調整をする。

スマートガンは、コンピュータが狙いを定め、ビデオが標的を絞る。側面に弾倉をつけて、これが火を吐くのだ。構え、腰をおとして引きがねを絞る動作をくり返す。それは、ヴァスケスにとって、このうえもない幸せな瞬間なのだ。いや、彼女だけではない、ドレイクにしても同じことであったろう。二人にはスマートガンを操作すること。それだけが使命なのだ。運搬作業をする必要はない。なぜなら、死をかけて戦うことだけが彼らの仕事なのだから……。

フロストは、パルスライフルの点検をしている。

リプリーは、兵士たちの一糸乱れぬ動きに触発され、現場を指揮しているエーポンに向かって言った。

⇩52へ

## 16

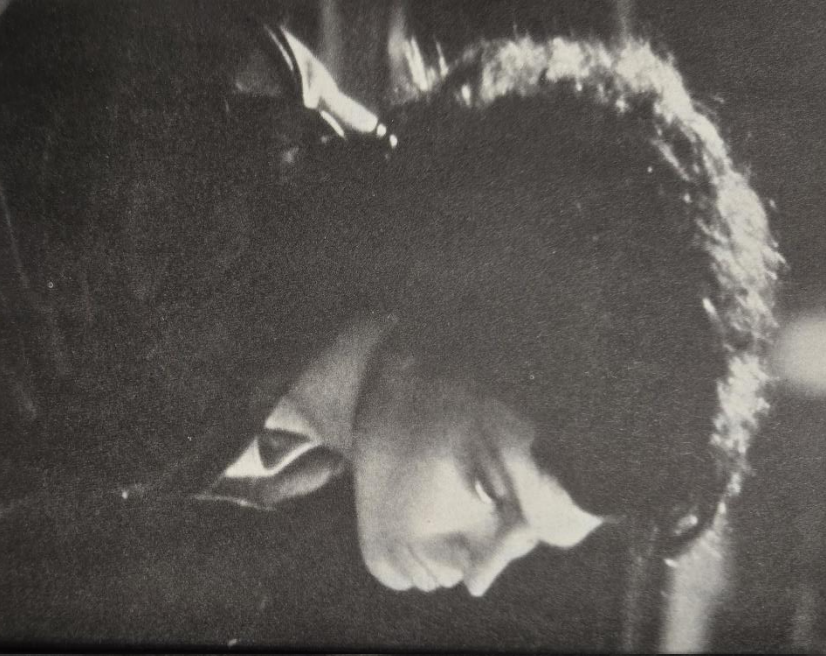
「レベッカ？　だったわね。偉いわ、たった一人で生き延びたのね」

「ニュー……ニュート」

少女の口元が微かに動いた。

「えっ!?」

「ニュートっていうの。レベッカと呼ぶのはお兄ちゃんだけ」



「そう、ニュートね。ニュート、怖い目に遭ったのね」
リプリーはこの幼い娘に、ある共通意識を抱き始めていた。そう、この二人は共に〝生き残り〟なのだ。あの忌わしい恐怖の体験の……。
そして、現在、この建物にいる人間の中で二人だけがあいつらを知っているのだ。
リプリーは、今度の航海で初めて同志とも呼べる相手に出会った、という感動にひたっていた。悲惨な感動ではあったが……。
その時、コンピュータルームで歓声が上がった。
「住民の居場所が判ったぞ。大気改造ステーション南棟、地下C階だ」
ハドソンが上機嫌で叫んでいる。
全員が慌ただしく活動を再開した。
「ゴーマン中尉、住民の居所が判りました。皆、すぐ出発する気です。リプリー、その娘も連れて行こう」
バークが息を弾ませながら言った。
リプリーは、ニュートの手を握ったまま、バークとゴーマンを見比べた。

●もう少し、この娘の話を訊くためにここにとどまる……35へ
●少女を置いてはいけない。一緒に連れて行く……87へ

## 17

「と、とにかく、そこに止まって、次の指令を待て」

と、マイクに向かって叫んでから、ゴーマンは額の汗を拭った。彼は事態を把握しようと懸命になっていた。

⇩181へ

## 18

リプリーの言葉にバークがかみついた。

「誰が指揮権を持ってるって？　いつからヒックスが指揮をとることになったんだ」

リプリーが、諭すように答える。

「これは軍事行動なの。エーポンは死んだ。ゴーマンは気絶したまま。とすれば伍長のヒックスが指揮をとるのは当然でしょう」

「いいかいリプリー、これは数百万という金が動いている作戦なんだ。それをたかだか伍長ごときの……いや、ヒックス、悪く思わんでくれ……決断で無駄にすることはできない。それに、あのエイリアンを連れて帰れることができれば、そして、こいつらの研究を発表することができれば、その儲けの何パーセントかはリプリー、君の手に入るんだ。そういう名誉を得るということを君は全く判ってないんだ！」

ヒックスはバークの言葉を無視するように、

「フェロロ！　核攻撃だ。離陸の準備！」
「了解！」
フェロロの声にバークの罵声がかぶさった。
「バカげてる。君たちこそ狂ってる！」
「うるさいな！　ヒックス、こいつをここで射ち殺してやろうか」
ヴァスケスが睨みつけた。
「やめろ。全員でここから撤退するんだ」

⇩202へ

## 19

「時間は後どのくらい！」
「二六分だ」
「まだ出発しないわよ」
リプリーが叫ぶ。
「まだ!?」
ビショップは操縦席で着陸艇を離陸させながら、尋ねた。
「大気改造ステーションの離着フロアに向うのよ。そこで待機して。必ず時間内に戻るから。ヒックスを、お願い！」

リプリーは艇内の武器倉庫へと飛びこんだ。パルスライフルの並ぶ棚から、一挺を取り出した。遊底を引いてみる。状態は良好だ。次に五十発弾倉を数個掴み上げ、その一つをパルスライフルに装塡する。銃身右脇の小さな窓に50のデジタル表示が赤く点る。弾倉をズボンの両側のポケットにつめ込む。次にパルスライフルの銃身に火炎放射器をテープで装着した。離脱することのないよう、テープを幾重にも巻きつける。準備はできた。

「後一七分でここは粉々になってしまうぞ」

ビショップの声が艇内スピーカーから響いた。

「後一七分、それだけあれば充分だわ」

リプリーは、自らに言い聞かせた。まるで自分自身を励ますように……。

着陸艇は大気改造ステーションの十階にある、離着フロアに到着した。

リプリーは、再度、エレベーターに向かって走っていった。

⇩50へ

## 20

少女が膝を抱えて椅子にうずくまっている姿はまるで浮浪児だった。しかも、瞳に光はなかった。ただ一点を凝視しているようだ。だからといって視線の先に目標があるとは思えない。衛生兵であるディートリックが、ニュートに注射をしている。

「この子の名前は何だっけ」

ゴーマンが尋ねた。
その傍らにリプリーが来て、
「レベッカ、だと思います」
「そうか。じゃ、レベッカ、よーく考えるんだよ。そして力を貸してくれ。そうすると君を助けてあげることができるからね。覚えていることを全部、初めから話してくれないかな」
ゴーマンの質問にも、少女は反応を示さない。両親の名、その他、いろいろ質問するがまるで石のように押し黙っている。
「少し休ませた方がいいわ」
「ダメか。こりゃ」
「肉体的には全く異常ありません。ちょっと栄養失調ですが」
ディートリックが言った。
「精神的には？」
リプリーが訊いた。
「ショックで、自分の心をなかなか開こうとしない状態だと思います」
「治るみこみは、あるのね。彼女から情報を訊く方がいいわ」
リプリーの提案にゴーマンは、腕を組んだ。

●ゴーマン、これ以上、訊いてもムダなので質問をやめる ……⇨51へ
●リプリーの言葉に、ゴーマン、再度質問を続けてみる ……⇨5へ

## 21

リプリーは、ニュートを背後にかばいながら、ゆっくりと後退した。粘液にまみれた床面を後退しながら、背後のニュートがその部屋の出口に到達するのを、全神経を集中して確かめようとする。

ようやく、部屋の出口に辿り着いた時、リプリーは狂ったようにパルスライフルを乱射し、グレネードランチャーを部屋中に叩きつけた。無数の卵が粉々になり、破片が床に飛び散った。護衛のエイリアンが姿を現した。その機を逃さず、リプリーは、ライフルの引きがねを絞った。左、右とライフルを振る。護衛たちは粉々に砕け散った。

硝煙と炎の中、リプリーはニュートの手を引き、やつらの巣窟から通路へと飛び出した。そして、たすきがけにした弾帯を、炎の中へ放り込んだ。弾帯に装着した手榴弾が次々と爆発する。

リプリーとニュートは爆風を背に受けながら走った。走り出してすぐの曲がり角に信号弾を発見した。

「こっちよ」

二人は、火花の舞い散る通路を一路、エレベーターの発着フロアへと向かった ⇩口絵12へ

## 22

彼女の目にとびこんできたのは、ところ狭しと並んでいる、人間の子どもくらいの大きさもあろうかと思われる、卵の群であった。傍らには、とてつもなく大きなエイリアン。黒いビルの鉄柱を思わせる肢はどんな堅固な建物をも踏みつぶしてしまうだろう。厚い胸板は、野太い骨が露になって包み込んでいる。それよりも、恐ろしげなのは、顔であった。牙は顔の半分も占めているようにみえ、しかも、二重にあごを取り囲んでいる。

ヨダレを垂らしながら、呼吸するその様はあらゆる爬虫類が集まってできたような顔に見えた。その大きな口で呼吸する音が、部屋に充満し、リプリーの鼓膜を震わせるのではないかと思えた。

「これが女王……」

リプリーは呟き、ビショップの言葉を思い出した。

女王は、腹部が異常に腫れていた。そして巨大な心臓が心拍するような動きを見せ、その蠢きは、ヘビのぜん動運動に似ていた。そして、驚いたのは、巨大な卵管であった。その卵管の先端から、ニブい音を立てながら卵を産み落としているのである。

その卵を見て初めて、リプリーは、ここがエイリアンの巣の中心だということに気がついた。

ニュートを下ろしたリプリーは、火炎放射器を構え、少し、後ろに下がった。そうしなければ、自分たちも炎の中に巻き込まれてしまう危険があるからだ。そして、見回すと、女王の両側に護衛のエイリアンが潜んでいるのが見えた。

リプリーたちの姿を認めたのだろう。二匹の護衛が、こちらに進んで来そうになった。リプリーが威嚇する。二匹の動きが止まる。そこで、思いっきり、彼女は、炎を浴びせた。卵がいっせいに炎上し始めた。

リプリーは、肩から弾帯(ガンベルト)をはずし、炎の中に投げた。弾帯(ガンベルト)に挟みこまれてある手榴弾(しゅりゅうだん)が炎の中で弾けた。二匹の護衛がその爆発で吹っ飛ぶ。

女王に怒りの表情が現れたように見えた。自分の子どもを殺されて怒ったのだろうか。それを見て、リプリーは叫んだ。

「親の愛なら負けないよ！」

叫びながら逃げるが、武器はすでになく、道も判らなくなった。後ろからそびえたつ女王が追いかけてきた。周囲の邪魔物を蹴散らしながら迫ってくる。とうとうリプリーは袋小路に入ってしまった。もう逃げ場はない。リプリーはニュートに重々しく告げた。

「目をつぶるのよ」

二人の身体が天井に持ちあげられ、一瞬、身体が軽くなった。

DEAD END

# 23

「さあ、早くやれよ、終ったら整列だ。さあ並べ、行くぞ！」

エーポンの指示に従い、男九人、女三人の兵士たちは、その命令に忠実に従いながらも、どこかダラけムードであった。いままで各地で転戦してきた自信がそうさせるのだろう。また、それだけの力を持つ兵士たちなのだ。エーポンが、その厳しい口調とは裏腹に、彼らの雑談や隊列の乱れを放っておくところでも判ることだ。

それだけではない。彼らにとって、今回の作戦が特別な出動ではないことをハドソンとヴァスケスの会話が如実に現していた。

「虫の一匹や二匹、捻(ひね)りつぶしてやるぜ」

「フン。害虫退治なら、ハドソン、あんたが一番先に殺(や)られちまうよ」

「バカ言うな」

ハドソンは高笑いをする。

緊張の中にリラックスムードを保ちながら、兵士十三人とバーク、リプリーの十五人はLV426、アケロンへ向かう着陸艇(ドロップシップ)へと向かった。しかし、リプリーだけは、彼らの冗談に笑うことができずにいた。

⇩66へ

## 24

医療区画にある実験室。

ビショップが、保存されてあった、エイリアンのフェイスハッガーの解剖を行っている。それは見るからに奇怪な生物であった。カニとエビの肢を骨だらけにしたような伸びた肢は、一度ひっついたら雷が落ちても離れはしないだろう。バネがそのまま発達したような尻尾は、ひとハネ三〇〇メートルは跳ぼうかという強力さだ。その体内はいわゆるフツーの生物の内臓とはまるで異なっている。

コトリと音がし、ビショップがその音の方を振り向くと、スパンクマイヤーが機材を運んできたところだった。

「何か、他に用は？」

「うん、充分だろう。すぐ艇に帰るから用があったら無線で連絡してくれ」

ビショップは相変わらず無表情で答えた。

ヘンなやつ、と思いながらも、スパンクマイヤーは彼が嫌いではなかった。

⇩111へ

## 25

「コノヤロー！　クソッタレ！　死にやがれ、鼻たれ、小便、水虫、ガニ股、短足、ハゲ、こら、近よるな！　シッ！　シッ！　あっち行け！」

ハドソンが、あらぬことを叫びながらライフルを射ち続ける。
「医療センターだ！」
ヒックスが叫ぶ。
「このやろ！　右だ、左だ、前から後ろから、えーい面倒だ。まとめてかかっ……ウッ……」
元気なハドソンの声もそこで途切れた。
「ハドソン！」
ヒックスが叫んだ。床下から鋭い爪がハドソンを捉え、ひきずりこもうとしていた。ヒックスとヴァスケスは懸命にハドソンの両腕を掴んだ。だが、その甲斐もなく、ハドソンは強大な力で床下にひきずりこまれてしまった。

⇩62へ

## 26

ヒックスが気がついたときには、リプリーより、すでに数メートルも遅れをとっていた。二人が前方で角を曲がるのが見えた。ヒックスは大急ぎでその地点へ向かった。だが、そこから先には暗黒がどこまでも続いているだけだった。
換気ダクトの中に、入口でワメいているハドソンの声が、かすかにこだましている。それを聞きながら、ヒックスは、身をかがめ、溜息をついた。
「フー、はぐれてしまった……」

●はぐれたままではまずい。皆を呼び、全員でダクトの中を捜す……⇨49へ
●一度、入口へ戻り、どうするか検討する……⇨3へ

## 27

女王はその鋭い爪でビショップを両断した。ピンク色した内臓のようなものがむき出しになった。瞬間、リプリーは女王を睨(にら)みつける。決して目を外してはならない。

「逃げて！」

ニュートに向かって叫んだ。

●Aがチェックしてあれば……⇨139へ
●Aがチェックしてなければ……⇨158へ

## 28

皆の意見は一致した。

「統制を乱すようなやつは生かしておくことはできない」

そういう結論に達したのだ。

「やれ、やれ！　こんなやつ、関節、全部、逆さまにへし折って、宇宙に捨ててやれ！」

金属性の粘着テープで体をグルグル巻きにされ、転がっているバークにハドソンが唾(つば)を吐きかける。

「やめなさい」
リプリーがハドソンを制しながら、バークに向かって告げる。
「あなたは処刑されることに決まったわ」
「なぜだ！」
「人の命を尊重しない人は、そうなるのよ」
「俺は会社の利益を追求しただけだ。処刑するなら、地球に帰ってから上司を処刑すればいいんだ。俺は無罪だ。仕事に忠実なのに、なぜ、殺されるんだ！」
「あいつらのエジキになってもらおうかね」
ヴァスケスが凄みのある笑いを浮かべた。
「そ、それだけは勘弁してくれ」
バークの顔がひきつった。
「その方法は、俺たちの方にも危険がありすぎるぜ。だから、いっそひと思いに始末してやるよ」
ハドソンがパルスライフルの遊底を絞った。
「その方が親切ってもんだ。ありがたく思ってもらいてーな」
そう言って、ハドソンがバークの顔面に蹴りを入れた。唇が切れ、血が流れる。

「ま、ま、待ってくれ。リプリー、君に、特別手当てを出そう。そうだ。地球に帰ったら関連会社の顧問にしてあげよう。何もしなくていいんだ。顧問料だけもらってればいい。ヴァスケス、君は、私のダミー会社の副社長だ。どうだ、いいだろう。な、な、な。ハドソン、君は、営業部長だ。どうだ、皆。だから助けてくれ……う……頼むよ」

とうとう泣き出した。そんな彼を、皆は冷ややかな目で見下ろしている。

「な、頼む……う……うちには……可愛い子どもが……う……ヒ……ヒク、ヒク」

「うーん、そ、そうか……」

ゴーマンが、同情したようにバークの前に跪(ひざまず)いた。後ろでせき払いがする。その音にはっと立ちあがった。

そして、ハドソンが叫んだ。

「これも自業自得だ。じゃ、あばよ、バーク」

「助けてくれ、俺が悪かった。頼む、皆に百万、いや、一人に五百万ずつだ……」

ヴァスケスの銃口が火を吹いた。次はハドソンだった。ヴァスケスの弾丸は、眉間(みけん)に一発。ハドソンの弾丸は、身体中に穴をあけていた。

⇩42へ

## 29

彼女の目にとびこんできたのは、とてつもなく大きなエイリアンであった。黒いビルの

鉄柱を思わせる肢はどんな堅固な建物をも踏みつぶしてしまうだろう。厚い胸板は、野太い骨が露になって包み込んでいる。それよりも、恐ろしげなのは、顔であった。牙は顔の半分も占めているように見え、しかも、二重にあごを取り囲んでいる。

ヨダレを垂らしながら、呼吸するその様はあらゆる爬虫類が集まってできたような顔に見えた。その大きな口で呼吸する音が、部屋に充満し、リプリーの鼓膜を震わせるのではないかと思えた。

「これが女王……」

リプリーは呟き、ビショップの言葉を思い出した。

女王は、腹部が異常に腫れていた。そして巨大な心臓が心拍するような動きを見せ、その蠢きは、ヘビのぜん動運動に似ていた。そして、驚いたのは、巨大な卵管であった。その卵管の先端から、ニブい音を立てながら卵を産み落としているのである。

その卵を見て初めて、リプリーは、ここが、エイリアンの巣の中心だということに気がついた。見回すと、人間の子どもくらいはあると思われる卵が、ところ狭しと並んでいる。その様を見てリプリーは呆然と立ちつくしていた。

ニュートを下ろしたリプリーは、火炎放射器を構え、少し、後ろに下がった。そうしなければ、自分たちも炎の中に巻き込まれてしまう危険があるからだ。そして、見回すと、女王の両

側に護衛のエイリアンが潜んでいるのが見えた。
リプリーたちの姿を認めたのだろう。二匹の護衛が、こちらに進んで来そうになった。リプリーは威嚇する。二匹の動きが止まる。そこで、思いっきり、彼女は、炎を浴びせた。卵がいっせいに炎上し始めた。
女王は、卵管をはずし、いきなり迫ってきた。護衛役の二匹も迫ってくる。リプリーは必死で火炎放射器を発射する。が、やがて、エネルギーが切れた。
「ニュート、目をつぶって！」
大きな強い力が二人を包み込んだ。

DEAD END

## 30

各所にバリケードを築き、ドアというドアを溶接した。そして、コンソール・ルームを橋頭堡（ほ）に設定した。ここが、彼らが立てこもる最後の砦（とりで）というわけだ。リプリーはニュートを医療センターへ連れていく。ニュートをベッドに横たえ、
「お休みなさい。私は皆の手伝いに行くけど、すぐ戻ってくるから」
「私、眠りたくない。怖い夢を見るから」
「怖い夢は誰でも見るものなのよ」
リプリーはケーシーを自分の耳にくっつけた。

「ケーシーは見ないって言っているわよ。頭の中をカラッポにするんだって」
「ケーシーが怖い夢を見ないのは人形だからだわ」
「じゃ、あなたも人形だって考えてみればいいんじゃない」
「やってみる……」
少女は小さく頷いた。それでも少女の可愛さあふれる大きな瞼は、閉じようとはしない。見開いた瞳がリプリーに訴えていた。
「行かないでね」
ニュートが呟いた。
「約束するわ」
「絶対に？　命をかけても？」
「命をかけても……ね」
少女の瞳に安堵の表情が浮かぶ。
「大丈夫よ。これ、お守り」
そう言ってリプリーは、ヒックスからもらったロケーターを渡した。
「これがあれば怖い夢も見ないし、あなたを見守ってくれてるのよ、だからお休み……」
「分かった、やってみる……」

少女はシーツの中に身を潜りこませながら、リプリーの胸をチョンと触れるような仕草をした。リプリーは苦笑しながら彼女の呼吸が一定のリズムを刻み始めたのを確め、そっと、その場を離れた。

※Fをチェックして ……⇨118へ

## 31

ビデオカメラに向かって懸命に手を振ったが何の反応もない。

クソッ、バークの奴……。悪態をついている暇はない。その間にも、シュッ、シュシュッ、不快な音が部屋中を走り回る。あいつらの足音だ。

「リプリー！」

ニュートが叫び声を上げる。リプリーはニュートを抱きしめ、壁際に後退りした。

突然、長い尻尾を持った黒い影が、彼女の顔に躍りかかってきた。すんでのところで、フェイスハッガーの攻撃を避けたリプリーは、はずみで傍らの机にしたたか腰を打ち、もんどりうって転がった。

フェイスハッガーの第二次攻撃は素早かった。息つく間もなく、そいつはリプリーの顔面にはりついた。

「キャーッ！ リプリー」

ニュートの一段と高い悲鳴が上がった。やがてその悲鳴も、シュバッという不気味な音にかき消されてしまった。

DEAD END

## 32

「エーポン、ドレイク、フロスト、ウィルツボウスキー、クロウ、それにヴァスケス、地下C階に潜入しろ。ケガ人がいるかもしれん。ディートリックも連れて行け」

ゴーマン中尉は、意外にテキパキと指示を出した。

「ヒックス、ハドソンは地下へ通じる階段の上で待機しろ」

⇩155へ

## 33

右に曲がると、壁に何かネバついた液体がやたらとはりついている所に出た。ダクトの下側は腐蝕して、ところどころ穴があいている。リプリーの背中に冷たいものが走った。

「エイリアンの通り道だ」

ここで、住民の誰かが、戦ったに違いない。

と、思って右側の壁を見て一瞬、息が止まりそうになった。死体が転がっていたのだ。その死体も尋常な状態ではなかった。首はねじ曲がり、腕や足の関節は逆さまにひん曲げられている。

何よりも異常だったのは、死体の胸部にポッカリと穴があいていたことだ。裂けた胸部には、血がこびりついている。

「エイリアンだ！」

リプリーは引き返そうと、踵を返した。と、同時だった。リプリーは、自分の首に、黒いゴツゴツとした腕と、鉤のような爪のついた長い指が巻きつくのに気がついた。強い力だった。もがいても取れそうにない。苦しくなり、目の玉がとび出しそうになる。自分の喉がちぎられるような音がした。

目の前が真白になりながら、リプリーは考えていた。

〝私は何のためにここまで来たのだろうか……〟

腕がねじ曲げられ……胴体が引きちぎられ……思考が止まり……。

DEAD END

## 34

梯子を見ると、炎が左右に迫っている。あの炎の中を歩くのは危険だ。とリプリーは思った。エレベーターの動きは遅いが、梯子を昇るよりは安全だろう。

エレベーターが昇っていく下の方で、小さな爆発が起きたようだ。グラリと、揺れる。が、エレベーターが故障するほどの爆発ではなかったようだ。ニュートがリプリーを見上げた。不安そうな顔をしている。

〝大丈夫よ〟

リプリーは、目で答える。

エレベーターが止まった。下ろしていたニュートを再度、抱きあげ、外に飛び出し思わず、叫んだ。

「ビショップ！　あのバカヤロー」

そこで待機しているはずの着陸艇（ドロップシップ）がいなかったのだ。隣の27番ゲートのエレベーターの昇降ランプを見ると、一階、一階、と上がってくる。やつだ。

「ビショップ！　ビショップ！」

強風にあおられながら、リプリーは叫ぶ。後方で、エレベーターが止まる。

⇩135へ

## 35

リプリーはゴーマンに、この少女ともう少しだけ話をさせてくれるよう頼んでみた。

「仕方ない。5分間だけ待つ。何か参考になるかもしれないからな。バーク、君は先に行っていてくれ」

バークが部屋を飛び出して行った。

「ありがとう、ゴーマン中尉」

リプリーはニュートの肩を抱きしめながら訊いた。

「お母さんたちは？」

その質問にようやく開かれ始めた彼女の心がまた閉じてしまったようだ。子どもっぽく揺す

っていた身体に硬さが戻った。手の動きも止まった。が、言葉にまで固さが戻ったわけではなかった。

「お母さんは死んだの。お父さんも、そしてお兄ちゃんも。皆、死んだ……」

そうやって、ニュートはポツリポツリと話し始めたのである。彼女の話し始めた内容の凄絶さは、傍らで聞いていたゴーマンに震えが襲ってくるほどであった。

⇩117へ

## 36

武器倉庫から出てきた重装備のリプリーに、ビショップは驚いた。

「重そうだな。でもよく似合ってるよ」

「ありがとう」

「気をつけて」

「きっと戻ってくるから待っててね」

「OK」

時間がない。リプリーは飛ぶような勢いで大気改造ステーション地下C階に向かうため、再度、エレベーターに乗り込んだのであった。

⇩50へ

## 37

エレベーターは、負傷したヒックスを抱えたリプリーを乗せて上昇し続ける。ようやく

エレベーターが止まる。

二人は転がり出た。管制塔の方に走っていくと、ビショップが、着陸艇（ドロップシップ）を遠隔操作（リモート）で操作し、ちょうど、降下してくるところであった。

●Dがチェックしてあれば……⇨6へ

●Cがチェックしてあれば……⇨19へ

## 38

ゴーマンは、一人でスタスタと歩き始めた。自分でもどこへ行けばいいのか判らないままだった。とにかく命令を発した限りは、全員が後から従（つ）いてくるものだと思っているのだ。まさか、誰も来ないとは想像もしてはいない。

「ハップ、トゥー、スリ、フォー！」

一人でゴキゲンである。そのとき、壁から大きな黒い手がニョキリと伸びてきた。が、ゴーマンの視界には何も入らない。

「危ない！」

誰かが叫んだ。

ゴーマンが振り向く。同時にヴァスケスのスマートガンが火を吹いた。ゴーマンは恐怖に判断を失った。

「な、な、なに、を、す、す……ギャー！」
言葉を最後まで言う時間はなかった。壁から伸びてきた、デコボコだらけの大きな黒い腕に首を締められていたのである。

⇩88へ

## 39

前に進むにつれ、周囲はますます奇怪な様相を呈してきた。ドロドロとした分泌物が固まったようなものが、壁面にボコ、ボコ、とへばりついている。もちろん人間の骨や内臓ではない。巨大な人工胎内を歩いているような妙な気分だ。
「わっ、何だこれは」
ドレイクが思わず叫んだ。
今度の壁はいままでのものとはまるで異なっていた。均一されたものがへばりついているのではない。ガラクタがまるで美観とは関係のないところでレリーフのように埋め込まれているのだ。家具、電線、機械のカケラ、衣服、人骨、頭蓋骨など、とにかく、ありとあらゆるものが透明な物質の中に埋め込まれているのだ。
ハドソンが、それに触った。指の間で粘液のようなモノが糸を引いていた。
「こんなもの見たことない……」

⇩79へ

## 40

後方にヒックスの制止する声を聞きながらヴァスケスはリプリーがはぐれたというダクトの方へと這っていった。一匹狼的な心情を持つヴァスケスだからこそできた行動であったろう。本来なら命令違反である。

前方に進むうちに、また後方で声がした。ダクトの穴の入口の前で何かが起こったらしい。銃弾のとびかう音がする。それに混じって、誰かの悲鳴も聞こえてきた。入口で異常事態の発生したことはどうやら間違いないようだ。

「これじゃ、前進するしかない」

戻ろうと一瞬の間考えてはみたのだが、上で異常が起こっていたとすれば、いまさら行っても仕方はない。それより、リプリーを見つける方がいいだろう。

ヴァスケスはそう判断を下した。

⇩113へ

## 41

リプリーは、ここが、エイリアンの巣の中心だということに気がついた。次に、彼女の目にとびこんできたのは、とてつもなく大きなエイリアンであった。黒いビルの鉄柱を思わせる肢はどんな堅固な建物をも踏みつぶしてしまうだろう。厚い胸板は、野太い骨が露になって包み込んでいる。それよりも、恐ろしげなのは、顔であった。牙は顔の半分も占めているよう

に見え、しかも、二重にあごを取り囲んでいる。
ヨダレを垂らしながら、呼吸するその様はあらゆる爬虫類が集まってできたような顔に見えた。その大きな口で呼吸する音が、部屋に充満し、リプリーの鼓膜を震わせるのではないかと思えた。
「これが女王……」
リプリーは呟き、ビショップの言葉を思い出した。
女王は、腹部が異常に腫れていた。そして巨大な心臓が心拍するような動きを見せ、その蠕きは、ヘビのぜん動運動に似ていた。そして、驚いたのは、巨大な卵管であった。その卵管の先端から、ニブい音を立てながら卵を産み落としているのである。
見回すと、人間の子どもくらいはあると思われる卵が、ところ狭しと並んでいる。
ニュートを下ろしたリプリーは、火炎放射器を構え、少し、後ろに下がった。そうしなければ、自分たちも炎の中に巻き込まれてしまう危険があるからだ。そして、見回すと、女王の両側に護衛のエイリアンが潜んでいるのが見えた。

⇩口絵 3 へ

## 42

医療センターの砦にたてこもり、作戦会議を開いているときにハドソンが叫んだ。
「何か来るぞ！」

動体センサーが高く鳴り響き始めている。出入口は溶接してある。そうそう簡単に打ち破ることはできないだろう。

「大きいぞ！」

ハドソンが額に汗をかき始める。

「八メートル……七メートル……五、五、五メートル、そんなバカな！」

五メートルということは、すでにこの部屋の中に潜入しているはずだ。一瞬、混乱した全員の考えが、同時に一致した。

「上だ！」

ヴァスケスが動体センサーを天井に向ける。すると、接近を報せる音が異常に高鳴った。

ヒックスが机に上り、天井板をあけて、中を見た。

「ヴァスケス！　射て！」

一匹だけでばなかった。二匹、三匹、四匹、五匹、数えているヒマはない。

ハドソンは、目尻を吊りあげ、わけの判らぬ言葉で、罵声を浴びせかけながら、乱射する。

やがて、足をとられた彼は、手榴弾を手に取り、大きく開いた化物の口の中に手を突っ込む。

爆発でとび散った血の酸にハドソンの身体は、音をたてて腐蝕され始めた。

⇩ 63 へ

## 43

「ありがとう。きっと何か役に立つことがあると思うわ」
リプリーは、発光ダイオードが光っているロケーターを右手にはめた。
「婚約指輪じゃないんだがな」
珍しいヒックスのジョークに、リプリーは微笑んだ。

⇩30へ

## 44

「着陸準備が整ったよ」
バークが呼びに来た。いまのところ、リプリーに唯一、味方にしてくれそうなのは彼だけだ。
「着陸艇(ドロップシップ)に乗り込むんだ」
リプリーがバークに手を取られ、貨物フロアへ行くと、相変わらずエーポンが隊員たちの尻を叩(たた)いていた。

⇩23へ

## 45

エレベーターは、ガタガタ、音を立てながら上昇するが、その遅々とした動きは、リプリーの神経を苛(いら)立たせた。頼りは、上で待っているビショップが操縦する着陸艇(ドロップシップ)だけだ。そして、ニュートの手のぬくもり。自分を信じて、隣に立っているニュートのあどけない顔とニュートの小さな手のぬくもりが、リプリーにとっては、一番大きな支えなのだ。

外側を見ると点検整備用の梯子（ステップ）が目に入った。
梯子（ステップ）の方が早いかしら……リプリーは再度考えた。

●このままエレベーターで行く……34へ
●梯子（ステップ）の方が早そうだ。梯子（ステップ）を昇る……124へ

## 46

「俺の恋人を紹介するよ」
ヒックスの声に、リプリーはハッと我に返った。
口元を微かにほころばせたヒックスの表情には自信に近い何かが感じられた。
「いつも一緒だから女房と呼んでもいいかな。M41Aパルスライフルだ。口径は十ミリ。昔流に言うと44口径だな。頼りになる奴だ。使い方を覚えとくといい」
「あのショットガンは？」
「あれは、ひい婆さんだな」
リプリーは思わず吹き出した。
「教えて」
リプリーの表情に光が戻った。
リプリーは、手渡されたパルスライフルを構えてみた。ズッシリと重い。この重さが、彼女

自身だけでなく、全員の生命を支えるのだ。

「ちょっと重いが、あんたなら大丈夫さ、いい体格してるしな。弾倉は二種類、五十連と百連だ。残弾数はここにデジタルで表示されるから、0になったら、マガジンストッパー、そう、このボタンを押すんだ。そうすれば空弾倉が飛び出す。わかるだろう？」

ヒックスが銃身右脇の小さな窓を示す。赤いデジタル文字が浮かんでいる。

「新しい弾倉を装填する。カチッという音がするまで押し込むんだ。これが安全装置だ。普段はロックにしておくんだ。それから、フルオートで射つよりも、セミオートの方が弾着が正確だ。弾丸の威力がすごいから、フルオートだとどうしても銃身がブレるんだ。無論、衝激吸収装置は万全だが、セミオートの方が正確に射てる」

ヒックスの説明を聞きながら、リプリーは何度も、銃床を肩にあて照準を定めてみる。

反復していくうち、次第に銃が身体になじんでくるのが判る。

「そう、その調子だ。さすがに覚えがいいぞ」

「これは？」

リプリーは銃口の下にもう一つ管が口を開けている箇所をさし示した。

「グレネードランチャーだ。三十ミリ弾丸型手榴弾の発射装置さ。でも、これの扱いまで覚える必要はないと思うがな」

●銃の射ち方を知ってればいい。グレネードランチャーのことは聞いても混乱するだけだ。……⇩213へ

●とりあえず、全て扱い方を知りたい。全部教えてくれるように頼む……⇩68へ

## 47

艇が何度か揺れ、離着脚が音をたててはずれた。グーンとスピードを増し、艇は、大気改造ステーションから離れる。

着陸艇（ドロップシップ）は、闇の空めがけて駆け抜ける。スピードが増す度に身体にかかる重力に耐えながら、

「いいわよ、ビショップ」

リプリーがニュートを力強く抱きしめた。それに応えるように、

「リプリー、きっと来てくれると思ったわ」

ニュートが微笑んだ。

大きな爆発音がして、ハドレイ市が揺れた。火柱がたつまきのように闇をこがす。その様子を背後に感じながら、リプリーは大きく身震いするのだった。⇩153へ

## 48

「何てーこと言うんだ。頭、プッツンしてんじゃないのか」

ウィルツボウスキーがライフルを抱きしめる。
「代わりに何を使えってんだ。敵が来たらゴメンナサイって謝れってのか」
「他の武器を使え！　火炎放射器があるだろ」
全員が不平を言いつのる中、エーポンはテキパキと行動した。
「手榴弾も回収する。オラ、オラ早くしろ」
全員から弾倉と手榴弾を集め終ると、
「フロスト、お前が保管しろ」
フロストは苦笑いを浮かべながら、強面の曹長から手渡されたそれらを雑のうに納いこんだ。
ヴァスケスとドレイクも、フン、といった顔つきでスマートガンから電源パックを外し、エーポンにあずける。が、その後の二人の行動はエーポンも、モニターを見ているゴーマンにも分からなかった。ヴァスケスは隠し持っていた予備のパックを取り出し、誰にも気づかれぬように一個はドレイクに渡し、もう一個は自分のスマートガンに取り付けたのだ。
ヒックスは、野戦用ハーネスの裏側にくっつけてある円筒状の鞘を開けた。そこからは何と、12ゲージのポンプアクション・ショットガンが顔を出した。銃身を切り詰めてある。
「えらい年代ものを持ってるもんだぜ」
フロストがそれを見てあきれた。

「うちに伝わる家宝さ。いいだろう、接近戦にはもってこいだぜ」
「フーン、お前って伝統を大事にするんだな」
「なあに、それが愛ってもんよ」
「なーに言ってやがんだ」
フロストがひやかすと、エーポンの声がとんだ。
「前進するぞ。ヒックス！　しんがりから来い」
「了解」
ヒックスは家宝とかいうシロモノを構えた。フロストはヒックスの尻をポーンとひと叩きして自分の持ち場に戻った。

⇩口絵11へ

## 49

ヒックスは、暗闇の先を見つめた。リプリーの姿は見えない。どこかの角を曲がってしまったのだろう。後ろから、人の気配がした。明りを向けるとヴァスケスだ。
「どうしたの？」
「リプリーとはぐれた」
ヒックスが沈うつな表情で言う。と、ヴァスケスの身体がわずかに動いた。同時に、彼女が

抱えているスマートガンも方向を変える。それを見てヒックスは一瞬、たじろいだ。自分に銃口を向けたと思ったからだ。

が、ヴァスケスが身体の方向を変えたのはヒックスを撃つためではない。

「どっちに行ったの？」

「……？」

「リプリーよ」

ヒックスは彼女の問いに、反射的に応えた。

「あっちだ」

その指先を見たヴァスケスは、彼と身体を入れ替えようとする。が、ようやく一人が通れるようなダクトだ。なかなか、ヒックスの横をすり抜けることはできない。身体をひねりながら強引にすり抜けた彼女は、ヒックスの指さした方向のダクトへと這っていく。

「どうするんだ！」

ヒックスが叫ぶ。

「探すのよ。リプリーを」

そう言って、暗闇の中に姿を消していった。

⇩40へ

## 50

搬送用エレベーターのスピードは遅々たるものだった。ただでさえ、遅いというのに、今のリプリーには余計にそう思えた。

途中の階で小爆発が起こり、火災を吹き上げる。リプリーは、ジャケットを脱ぎ捨てた。

- **Eがチェックしてあれば** ……191へ
- **Dがチェックしてあれば** ……176へ
- **Cがチェックしてあれば** ……210へ

## 51

数秒間、ゴーマンは考えているようだった。が、溜息まじりに告げた。

「もうやめた！　これ以上、訊いたところで、この娘が教えてくれるとは思えない。この娘は、きっと自閉症なんだ。あー、後は時間のムダだ。やめだ。やめだ」

ゴーマンは、そう言うと、運用センターで中央コンピュータ端末機を動かしているハドソンたちの処へと戻っていった。リプリーは少女を見つめた。慈愛のこもったまなざしが少女の心を動かしたのかもしれない。髪をやさしく撫で、温かいココアを渡すと、ぎこちなさは残っているものの、少しずつ飲み始めたのだ。

「ちょっときれいにしましょうか」

リプリーは消毒水を含ませた布で汚れたままの顔を拭き始めた。

⇩72へ

## 52

「何かお手伝いできません？」

リプリーの申し出にエーポンはヒニクッぽく答えた。

「ここにあるものは、どれも玩具じゃないんだ」

「パワーローダーの運転はできますわ、二級の免許を持ってますの」

リプリーは、エーポンの半分バカにした視線に、微笑んで答えながらパワーローダーが置かれている所へと向かった。色は、はげているが使用不能ということはなさそうだ。リプリーは素早く乗り込み、手元の操縦桿に手、足をグイと差し込む。

「地球の宇宙港のローダーとあまり変わりなさそう」

彼女は呟くと、スイッチを入れた。ウィーン、ウィーンとモーターが音をたてる。その唸りがリプリーの全身に伝わり、緊張感がみなぎった。一点を睨むように彼女はローダーに命を吹き込んだ。ローダーは動き出し、その手がクルリ、クルリと動き、器用にコンテナを掴んだ。リプリーはニコッと笑い、

「どこへ運ぶの？」

次の瞬間、ヒックスとエーポンは、ニヤリと笑い、満足と感嘆の混じった視線を交しあった。

「O・K。あっちだよ」
エーポンが上機嫌で指示をした。
そんな彼らのやりとりの中、戦闘機材搭載作業と、個人装備の準備が進められる。装甲服にひび割れや歪(ゆが)みはないか。戦闘用ブーツ、バックパック、身体を守るハーネス、ヘルメット、赤外線バイザー、通信機など、など。彼らの指はそれらを素早くチェックし続ける。

**※Aをチェックして** ……⇩ **23**へ

## 53

ヴァスケス、ゴーマンがヒックスの後を追う。ときおり、ヴァスケスが、後ろ向きになってパルスライフルを射つ。リプリーはどうにかしてドアを開けようと焦るが、ビクともしない。そこに、ヒックスたちが合流した。
「バークが、ドアをロックしたの」
「やっぱり生かしておくべきじゃなかったのよ」
ヴァスケスが頭のバンダナを直しながらいまいましそうに言った。
「来たぞ」
ユラユラと、化物の進軍が見える。ヒックスは、携帯用のレーザーカッターを取り出し、ドアのロックされた部分をそれで破壊した。ロックがはずれる。全員、中に飛び込んだ。

しんがりのヴァスケスが、ドアを閉め、素早く溶接する。

⇩201へ

## 54

強風の中、全員がしばらく呆然としていた。至る所で金属片が炎を上げている。ヒックスは、気絶したままのゴーマンの側に飛んだ炎のカケラを放り投げた。ゴーマンは何も知らずに、担架の上で眠ったままである。

「早く引き返さないと——。夜になるとあいつらがやって来るわ」

ニュートのこの言葉にリプリーとヒックスは顔を見合わせた。

「よし、運用センターに戻ろう、火が消え次第、使えそうな武器を探しだすんだ」

ヒックスは指揮官らしく、テキパキと部下たちに指示した。

⇩105へ

## 55

「まだ死んではいないんだから」

「とにかく、ビショップの所へ行こう」

二人はひとまず、そこを離れた。

「あっちにエレベーターがある。あれに乗ろう！」

ヒックスがリプリーの手を引く。二人はエレベーターに乗り込んだ。スイッチを何度も押すがなかなか動かない。ようやくドアが閉まりかけた。いきなり、エイリアンの腕が割り込んで

きた。ヒックスがパルスライフルを射つ。酸がヒックスの身体に飛び散った。
ブスブスとヒックスのアーマーを腐蝕する。ヒックスが苦痛に呻く。リプリーは、アーマーを懸命に彼の身体から引きはがした。
鋼鉄製のアーマーが白い煙をあげ、大きな穴をあけていた。

⇩37へ

## 56

「何言ってんだ？　上のウスラトンカチは」
ハドソンは相変わらずの毒舌を吐く。
「エーポン曹長、何と言ってるんです？」
兵士たちは口々に、ふてくされた態度で言い合っている。
「アーッ、良く聞こえん。中尉殿、もう一度お願いします」
普段、中尉をたてているエーポンが知らぬ顔を決めこんだ。
こうなっては、兵隊たちの誰一人として、ゴーマンの命令を聞くはずがない。
「ヨーシ。前進しろ」
エーポンの号令がとぶ。
兵隊たちは粘液が壁に固まって、前衛彫刻の様になっている通路を前進して行った。
「うす気味悪い壁だなあ」

フロストが叫んだ。
「変だぜ。俺たち以外に誰かいるみたいだ」
「動体センサーは反応してないぞ」
「おい、死体だ」
先頭を進んでいたドレイクが叫んだ。
それは、クリスタルガラスを溶かしたような中に包まれ、天井や壁にはりついていた。
「ウワッ、こりゃひでえや」
ハドソンは吐気をこらえた。
「生きてるわよ、こっちは」
ディートリックが叫んだ。
やはり、身体全体を半透明のガラス状の膜に覆われ、壁にはりついていた。女だった。
助けなくちゃ……と、ディートリックが半透明の膜を引きはがそうと手をかけた。
その時、中の女は弱々しく目を開き、小さな声で、懇願するように言った。
「お願い、殺して」
次の瞬間、女の顔は苦痛に歪(ゆが)み、その胸のあたりが異様に膨らみ始めた。
ディートリックの目に赤い膜が走った。女の胸から血しぶきがほとばしり、そこから鋭い牙(きば)

をもったグロテスクな頭がのぞいているではないか。
ディートリックは思わず、飛びのいた。怪物は女の胸を食い破り、身体半分程、姿を現している。細く、鉤の様な手がギクシャクと動く。
「どいてな」
ヴァスケスがうろたえるディートリックを押しのけ、スマートガンを一連射した。怪物は叫び声を上げながら、粉々に砕け散った。
それをキッカケに、周囲の壁がゆっくりと波の様に動き始めた。そのうねりは次第に大きくなって行く。
兵隊たちは全員、異常を感じて、各々身構えた。
「おい、何かいっぱいいるぞ」
「方向は？」
「前後、左右、上下。どうなってるんだ」

⇩181へ

## 57

ヒックスからの講習をすませたリプリーはパルスライフルを右肩にかけたまま、廊下をニュートが眠っているはずのM・Cへと歩き出した。その時、左手M・Cの入口のドアが開き、頭に包帯をしたゴーマンが姿を現した。リプリーを認めた彼は、一瞬言葉を失ったようだ。

「あ、あのリプリー。ぼ、ぼくは」
「いいのよ。忘れたわ、みんな」
それよりも、彼女の神経を逆なでしたのは、ゴーマンの後ろから現れたバークの存在であった。廊下で見張りに立っていたヴァスケスも、ゴーマンに向かって見下したような視線を送った。
「チキン・シット！」
とヴァスケスの口唇が動いた。ゴーマンの置かれた立場は、もはや決定的だった。

●このままではあんまりだ。ゴーマンに一声かけてやる……⇨216へ
●こうなったのも成り行きだ。無視して、M・Cへ急ぐ……⇨115へ

## 58

「こっちよ！」
リプリーが皆に告げる。医療センターの方を指さす。彼女はニュートを抱きながら通路を走った。センターのドアに辿りつき、実験室に入ろうとしたとき、ドアがロックされる音が聞こえた。また、バークだ。
「バーク！　何してるの、開けなさい！」
ドアをドンドン叩く。が、そのぶ厚いドアはビクともしない。

「リプリー！」
ニュートが叫んだ。バカでかいエイリアンが、戦車みたいな巨体を揺らしながら近づいて来るところだった。いまこそ、ヒックスから教わった銃の扱い方の本番だ。
「ジュルルル、ジュルルル」
わけのわからない音を出しながら近づいてくる。口をぱっくりと開け、そこからは、白くネバついたヨダレをボタボタと床に垂らしている。
「ジュルリ！」
その巨体とは似合わぬ素早い動きだった。獲物を狙うヒョウのように、跳びかかってきたのだ。ヒックスの教えを思い出しながら引きがねを絞る。敵を見る余裕などない。目をつぶりながらの発砲だった。弾丸は、見事、顔面に命中し、顔のないエイリアンが目の前で、ドウと後ろに倒れた。

⇩25へ

## 59

「シュ！」
彼女の顔を目掛けフェイスハッガーが飛び掛かってきた。尻モチをつく。それを引っぱがして壁に投げつける。が、その動きはまるで忍者の空中飛びだった。壁を支点にはね返り、次には医療箱、そして天井、ベッドの枠、一瞬たりとも止まらずに動き、飛んだ。ついにはリプリ

ーのブーツに爪を引っかけ、その勢いで顔まではね上がり、長い尻尾が素早くリプリーの首にからみついた。

「キャー！」

ニュートが恐怖の叫びをあげる。リプリーは渾身の力をこめて忌わしいこの怪物を引っぱがそうとしたが、ジリジリと首を締めつけてくる。

「キャー！　助けて！」

二匹目がニュートを襲った。瞬間、ニュートは、デスクを壁におしつけ、動きを封じ込めながら助けを呼んだ。

――「リプリー！　ニュート！　ハドソン、窓ガラスを射て！」

ハドソンが、医務室の窓ガラス目がけ、パルスライフルを横にひとなでした。すかさずヒックスは身体ごと、窓に飛びこんだ――。

素早くリプリーに取りついたエイリアンを力まかせに引きはがしにかかる。ハドソンはニュートがおさえつけていた二匹目にライフルを射ちこんだ。二匹目は指の骨だけが飛び散ったように砕け、その血はジュージューと音をたてて床や金属製の机を腐蝕した。

一人奮闘するヒックスに力を貸したのはヴァスケスとゴーマンだった。

「ワン、ツー、スリーで投げる。ハドソン、それを射て！　いいか！」

「分かった！」
「いくぞ。ワン、ツー、スリー、それ！」
「このー、ハナクソメ！　死にやがれ！」
放り投げられたフェイスハッガーはまたしても強靱（きょうじん）なバネを使って躍りかかる。ハドソンの銃が火を吹き、空中で命中した。それは仕掛け花火のようにパッと飛び散った。

⇩12へ

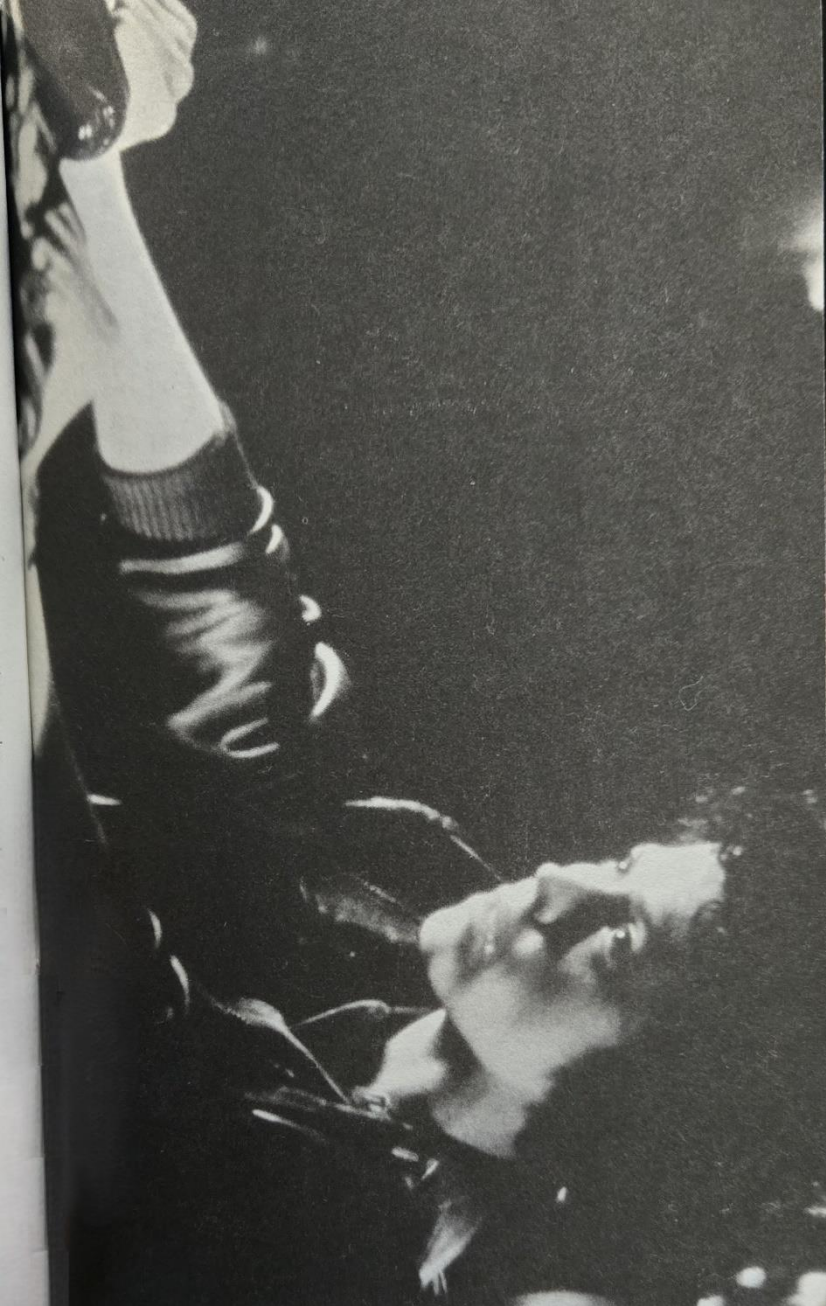
## 60

APCには、ゴーマン、リプリー、バーク、そしてニュートの四人が残っている。四人は操縦席（コックピット）のすぐ傍らのコンソールに陣取っていた。モニターを見ながら指令を出すのだ。ゴーマンがエーポンに指示を与える。
「右にあるコンクリートの傾斜を行け。その先が地下C階に続く通路だ」

⇩182へ

## 61

このままでは全員、戦死する。リプリーは、身を引きしめ、ニュートに言った。
「シートベルトをしめなさい」
「あそこに行くの？」
「助けなければいけないの。分かるでしょ」
少女は、コクンと頷（うなず）いた。リプリーは操縦席（コックピット）に坐るとハーネスで身体を固定する。カチンカ



チンという金属音がリプリーに緊張感と武者震いを与える。モニターからは、怒声だけしか聞こえず、見えるのは閃光だけだ。リプリーは、グイとアクセルを踏んだ。APCは唸りをあげて動き始める。目的地に行くための障害はすべて蹴ちらした。

「何をするつもりだ！」

ゴーマンが叫んで這いずりながら操縦席に来ようとするのをバークがおさえた。

「君は下がっていろ」

バークが決めつけるように言った。

APCは猛烈なスピードで走り始めた。

⇩185へ

## 62

「ヴァスケス！　従いてこい！」

ヒックスが叫んだ。その声に応えながら、ヴァスケスは、攻めてくる敵に、ランチャーを射ち込んだ。たて続けに化物たちが粉々になる。

⇩53へ

## 63

「リプリー！　リプリー！」

ニュートがリプリーの名前を呼んで、奥の室の方を指さす。

「分かったわ」

リプリーはニュートの手を取り、通路に出るドアを開けた。ゴーマンもヨタヨタと、くっついてくる。ヴァスケスは、そびえたつような敵を倒したところだ。リプリーは、皆に、逃げ路を教えて、通路に走り出し、ドアをあける。中に入る。

やがて、ゴーマン、ヴァスケスも到着した。ヴァスケスが、ドアを溶接しようとしたとき、後ろの非常ドアがわずかずつ開き、黒い骨だらけの手が伸びてきたことに、誰も気がついていなかった。

DEAD END

## 64

ニュートを探そうと、ダクトの中、広い通路を歩き回る。自分の記憶だけが頼りの行動だから心細い。が、リプリーは信じるしかなかった。ニュートを助けるのだ……。

しかし、現実はそう、うまくいくものではなかった。

あちこち、うろついているうちに、完全に道に迷ってしまった。絶え間なく起こる爆発と炎のためだ。

目が熱さと汗でかすんできた。時間の余裕もない。

〝これで最後か〟

心の中で呟くと、もう、歩き回る意志力も体力もなくなっていた。一度、坐り込むと立ち上がる気力もなくなった。そんな疲れきった彼女には、黒い大きなエイリアンが近づいていること

とも見ることはできなかった。

## 65

決然と食卓を立ったリプリーは、船内の貨物フロアの隅で、唇をかんでいた。

何てことなの、査問委員会では私を気違い扱いするし、会社に甚大な損害を与えたと言って、地上勤務に格下げにされた。やつらを絶滅させるという目的だから、同行したというのに、あの忌わしいアンドロイドの類まで連れて来て……。おまけに、兵隊たちのあの態度。私をまるでノケ者扱いにして……。リプリーは苛立ち気味にタバコをくわえ、ライターで火をつけた。

「リプリー、こんな所にいたのか」

振り向くと、バークが立っている。

「連中にも悪気はないんだ。歴戦の強者ぞろいだから、結束が固いだけさ。それだけ、イザという時には頼りになる」

リプリーは気を取り直し、

「そうね。私、気が立ってたのね。ちょっと大人気なかったわ」

「行こう。そろそろゴーマン中尉が全員に作戦の説明を始める頃だ」

「先に行っててくれない。後からすぐ行くわ」

「そうかい。じゃ」

バークが去った後、一人残ったリプリーは貨物フロアを改めて見回した。
スラコ号はかなり旧式の宇宙船だと聞いていたが、リプリーには全てが目新しかった。
着陸艇(ドロップシップ)もリプリーの知っているそれとは、比べものにならない程の最新設備を備えているはずだ。そうか、あれから五七年も経っているのか、リプリーは溜息(たいそく)を吐いた。
ふと見ると、リプリーの正面に格納庫が大きな口を開けていた。中にはパワーローダーが数台見える。その手前、右横の床に船体の底につながる、貨物搬入用エアロックのハッチがある。
リプリーは煙草を消すと、全員が集合しているという、兵器フロアへと歩き出した。

※Bをチェックして……⇩78へ

## 66

降下体勢に入った。着陸艇(ドロップシップ)は激しく揺れ始める。大気の状態はかなり不安定なようだ。
しかし、ヴァスケスはただ黙ったまま、降下の重力に耐えて前方を見つめている。口元を引きしめたその表情が、いかにもスマートガンの名手、百戦練磨の女兵士という雰囲気だ。
そんな中でハドソンだけがやたら喋(しゃべ)りまくっている。
「よし、皆、心配するこたーねーぞ、俺がついているからな」
ヒックスは眼を閉じ、眠りこけているようだ。この程度の揺れなど、全く不安には感じてい

ないらしい。なおもハドソンは口の中でブツブツ言い続けていた。
今度はリプリーに話しかけてきた。
「お嬢さま、大丈夫ですか」
「ハドソン、少し、黙れ」
エーポンが怒鳴った。
彼女はハドソンに目礼をし、気をまぎらせようと、ゴーマンを見た。指揮官の額は汗で光っている。何やら落ち着きがない。
「これで何回目の降下ですか」
リプリーの声にゴーマンは、パッと目を開いた。
「三八回……シミュレーションで……」
「実戦では？」
次に、訊いたのはヴァスケスだ。
「えーと、三回……いや、二回……め……かな……今回を入れて」
ヴァスケスとドレイクがお互いの肘をぶつけ合い、笑顔を交わした。それは明らかに嘲笑であった。リプリーとバークも思わず顔を見合わせた。

⇩183へ

## 67

ハドソンは自分の腕を手当てしていた。幸いそれほど酸を浴びたわけではないらしい。
「全く、なんてこった。あんなやつら、見たことねーぜ。まるで何でもあり、だぜ」
ヒックスはゴーマンの脈をとっている。その腕を荒々しく引っぱり、ヴァスケスがゴーマンの胸倉を摑んだ。
「起きろ！　早く起きろ！　皆が死んだのはこいつのせいだ。腰抜け、殺してやる！」
「やめろ」
ヒックスが彼女を制した。ヴァスケスが手を離すとゴトンという音がしてゴーマンの頭が床に打ちつけらけた。
「エーポンとディートリックはまだ生きてる！」
ハドソンが叫んだ。
「もう、まゆにされているはずだわ」
リプリーが言った。
いまから行っても助け出すことは不可能だ。彼はその辺をこぶしで叩いた。誰もが言うべき言葉を失っていた。
「神よ。こんなことが……」

ハドソンが呟く。リブリーは、とうとう、ここまできてしまった、と思った。いまさら認識不足だった彼らを責めるわけにはいかない。エイリアンの恐ろしさを彼らはいま、身をもって体験したのだから。

⇩4へ

## 68

「どうせなら、全部覚えておきたいわ」

「OK。あんたは優秀な兵士になれるぜ」

とにかく時間はないのだ。短時間のうちに習得できることは限られている。だが、迫りくる恐怖と闘うためにも、あの娘を守るためにもリブリーにとっては、やらねばならない重要なことだった。

「手榴弾はここから装塡するんだ」

ヒックスが、銃身の下方をさし示す。

「俺のショットガンと同じ要領さ」

銃器というものは、一見武骨でひどく扱いにくい印象を与えるが、それを使う者が銃器に対して真剣にかつ誠実に接すれば、相手の方からごく自然に親しんでくるものだ。

リブリーが反復練習を十五分程続け、額に大粒の汗が浮かぶ頃になると、このゴツイ玩具は彼女の身体の一部と化していた。

「ヨーシ、これであんたも立派な射手というわけだ」
「合格かしら」
ヒックスは微笑みを浮かべ、リプリーの肩に手を置いた。
肩に食い込んだライフルのストラップを通して、彼のぬくもりが伝わってくる。リプリーはフーッと溜息を吐き、銃身を下ろした。そして改めて決心するのだった。私はあの娘に、ニュートに約束したのだ。絶対に死ぬわけにはいかない。決して死ぬわけには……。

**※Dをチェックして**

……⇩57へ

## 69 エピローグ

リプリー、ニュート、ヴァスケスの三人はやがて外に出ることができた。が、そこで見たものは、壮絶なシーンであった。

APCは、粘液状の膜に包まれ、元の姿はとどめてはいなかった。その中にも兵士の変わり果てた姿があった。逆さまになったまま、壁にはりついてまゆの中に埋められている兵士。上半身と下半身が切断され、さらに胸を裂かれたあとのある兵士たちもいる。

彼らは全滅したのであった。それによって彼女たちの逃げ道は完全に断たれたのである。三人にできることは、一つだった。あくまでも、この星、LV426アケロンに残ってエイリア

ンと戦うことだった。

幸い、彼女たちは奇跡的に助かったのである。リプリーの頭脳。ヴァスケスの海兵魂。そして、ニュートが持っているアケロンに関する情報。この三要素がうまくかみあって、生き延びることができたのであった。

一カ月後――。地球から偵察隊が来た。連絡の不通が続いたことに不審感を抱いての出動だった。彼女たちは、そこで救助されたのである……。

R・モーニングウッド・Jr著
「LV426、アケロンの謎」
第三章、より。

END

## 70

スラコ船内は騒然としていた。ゴーマンの指令によって、アケロンを核攻撃するための準備が進められている。そんな中、バークは、不満そうな面持ちでリプリーのところに来た。

「困ったことになったものだ」

「どうしたの？」

「あそこを破壊されたら会社は大損だ。このまま地球に帰ったら、俺はクビだ」

「どうして」

「アケロンにあるシステムをつくるためには莫大な投資がされたんだ」
泣きそうな顔になる。
「あなた、会社の利益と、人間の生命とどっちが大事なの。あのエイリアンを生かしておくと、どんなことになるか……」
そこまで言って、リプリーは思わずバークの胸部が胎動するのを見た。彼が深呼吸をしたわけではない。いきなり盛りあがると、左右にパックリと胸があき、そこから、真赤な血をほとばしらせながら化物が飛び出した。
そいつはくびれた顔を出し、リプリーに向かって威嚇した。
「バーク！」
彼の顔は苦痛に歪(ゆが)んでいた。胸部は血塗られ、床にそれがポタポタと垂れる。喘(あえ)ぎながらバークが力をふりしぼるように声を出した。
「ど、どうせ、帰っても、クビ……だ。だったら、こいつを持って帰った方が、俺は、ヒ、ヒ、ヒーローだ……」
「何てバカな！　誰か、誰か来て！」
リプリーのただならぬ叫び声に、二～三人の兵士たちが、かけつけた。バークの姿を見て、一瞬、何が起こっているのか理解に苦しむ顔をする。

「射って！　早く、殺すのよ！」
リプリーの声に一早く反応したのはヴァスケスだった。彼女は常にスマートガンを愛玩物のように身体から離さずにいるのだ。彼女のスマートガンの照準はピタリと、バークと、彼の裂けた胸から這いずり出ようとしているエイリアンに合わされた。
スマートガンが火を吹いた。バークの身体はのけぞり、エイリアンは頭を左右に振り続け、やがて、動かなくなった。
バークの死体を全員が取り囲んだ。
「何てバカなことをしたんだこいつは」
ゴーマンがポーッとしたまま呟いた。
「医療室にいた一匹だわ、多分」
リプリーの言葉に全員がハッと顔を見合わす。
「二匹いたぞ！」
ハドソンが血相を変えて走り出した。その肩をガチッとおさえる手があった。
「離せ、ビショップ」
「どこに行くんだ」
「決まってるだろ。医療室……そうか、ここはスラコだった」

ビショップは、ハドソンから手を離すと不安そうな顔している乗組員の誰に言うともなく呟いた。

「もう一匹は私が解剖して殺した。残りの一匹も殺しておくんだった」

何ごともなかったように彼は、操縦席に向かって去っていった。全員がビショップの後姿を言葉もなく見つめていた。彼らの心の中には、助かった、という安堵感と、ビショップに対する一種の畏怖の念が入り混じっていた。

⇩112へ

## 71

リプリーは、慎重だった。音は少女のものではなさそうな気がしたのだ。

音と反対の方向へ注意深く前進する。すると、またコトリ、という音が壁の陰から聞こえた。

リプリーは一瞬、身構える。今度はゆっくりと、音のした方へと近寄ってみた。チラッと、陰から金色の何かが見える。少女の髪の毛のようだ。

「出てらっしゃい、怖くないから」

金髪の少女はそこに潜んだまま、出てこようとはしない。かすかに震えているのが伝わってくる。リプリーは、壁の陰の方になおも進んだ。

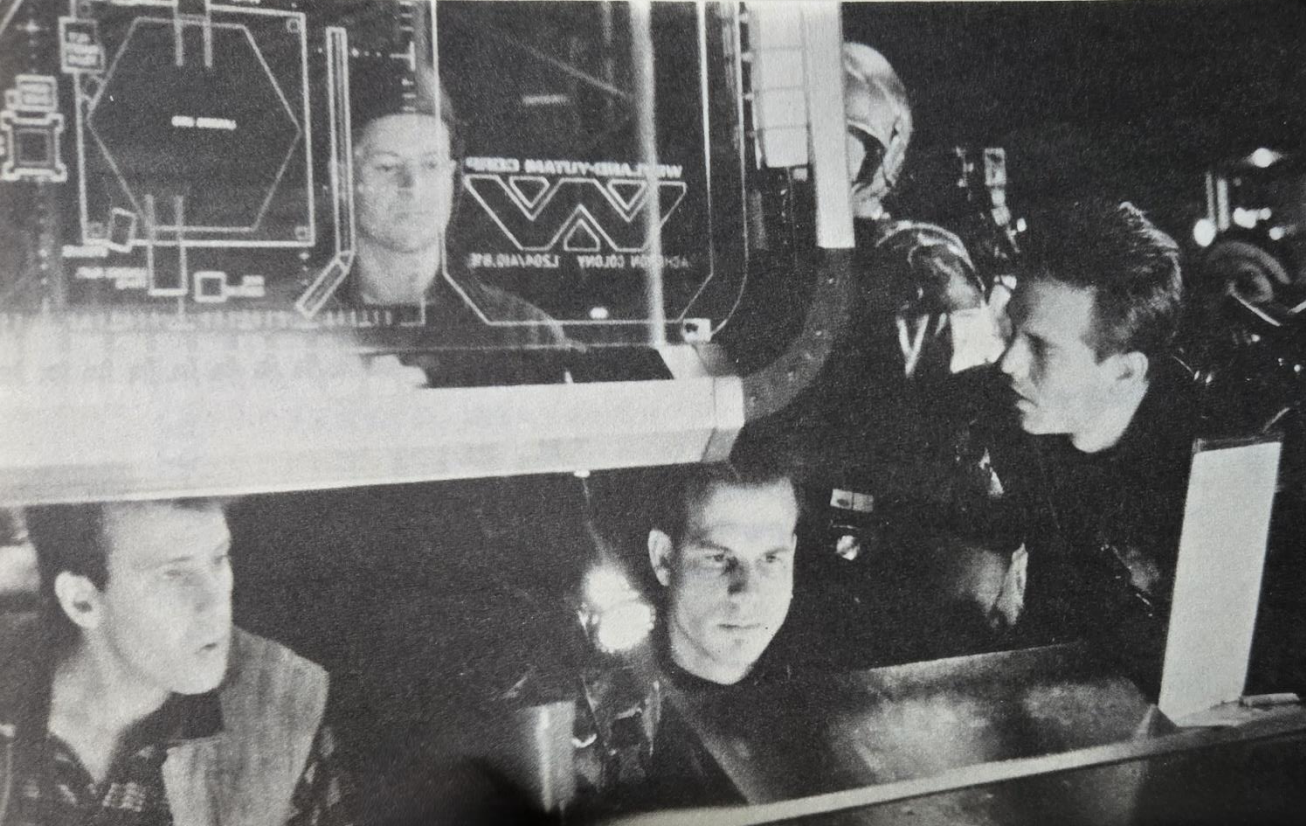
そのとき、少女が、さっと飛び出してきた。リプリーが来た方向とは逆の方向へ逃げようとしたらしい。リプリーが少女の方へと身を躍らす。そして足首を捉えた。

「逃げないで、大丈夫、助けにきたのよ」
足首を掴みながら、叫ぶ。
少女はリプリーの顔を不審そうに覗き込んだ。本当に助けに来てくれたのかどうか判断に迷っているようだ。
リプリーは、なおも声をかける。
「本当に助けに来たのよ。見てごらん、私は人間でしょ。ほら、よく見て」
リプリーは、自分の顔が少女によく見えるように身体を動かした。闇の中にボンヤリと二人の顔が浮かぶ。リプリーはできるだけ微笑みながら少女の顔をじっと見つめた。

⇩96へ

## 72

その頃隊員たちは、運用センターのコンピュータを前にして、ハドソンの手の動きを見つめていた。
ゴーマンが怪訝そうに、バークの肩を叩く。
「ハドソンは何をスキャンしているんだ？」
「PDTだ。住民全員の体内に埋め込まれている個人データの信号のことだ」
「それは知ってる。訊きたいのはどこのPDTかってことさ。この居住区には誰もいないはずだろう。いたらとっくに発見しているはずだ」



「だとしても再確認する必要はあるんだ」
バークが答えた。

⇨184へ

## 73

「何の動きもないか」
エーポンがハドソンに訊く。彼の動体センサーには何も表示されていない。
「何の動きもありません」
彼らは注意深く前に進む。そして、角を曲がったとたん、
「地獄か、ここは！」
誰かの呻きがあがった。それはまさに、この世のものとは思えない光景だった。住民たちが、分泌物のようなものの中に埋めこまれていたのだ。そう、まゆの中に息づくさなぎであった。ある者は首をねじ曲げ、他の者は身体がエビのように反りかえり、手や足も考えられないほどねじ曲げられているのだ。それだけではない。彼らの大半は、肉がそげ、枯れた骨と皮だけになっているのだ。白骨化したものもある。そして、彼らに共通していることは、全員、胸の部分に穴があいており、内臓が爆発したように破れていることだ。

⇨187へ

# 74

換気筒を降りて行くと、長い通路に出た。床下が水路になっている。リプリーはその上を歩きながら、ヒックスに言った。

「受信器を見て！」

リプリーがニュートに渡したロケーターのシグナルで位置を確認しようというのである。

「こっちだ」

ヒックスが先導する。数分歩くと受信器の音が高まってきた。二人の足音を聞いたのだろう、ニュートの叫び声が聞こえる。

「リプリー!?」

「ニュート、どこなの！」

「ここよ。その下にいるわ！」

数メートル先の格子状の床面から、可愛い指がのぞいている。

リプリーはヒックスを追い越し、ニュートの上でかがみこんで、覗いているニュートの指を握った。

「待っててね。すぐ助けてあげるわ」

リプリーは、ニュートを安心させようと握った手に力をこめる。

●ヒックスの溶接用カッターで床を焼き切る……234へ

●焼き切るには時間がない。別の通路を捜す……192へ

## 75

ヒックスは暗い穴の中を覗きながら、銃身をさし入れた。左右に振ってみる。後ろから、フロストがヒックスの身体を落ちないように支えている。

「いないぞ、奥の方に逃げたかな」

そう言いながら、ヒックスは、慎重に中に入る。照明をつけ、それを動かそうとしたとき、〝ガタン〟

奥の方から音がした。彼は咄嗟に明りを回した。明りの中で、さっと動いたのは、汚れて、ところどころ束になっている髪の毛だった。

「子どもだぞ！」

ヒックスが、仲間に聞こえるように叫ぶ。彼の気持ちに油断ができた。子どもと判って心の緊張が解けたのだろう。ふっと身体の力を抜いた瞬間、先程、聞こえてきた音よりももっと大きな音がした。

ドアの開閉でもしたような、重い金属音だった。

「待て！」

ヒックスが叫んで中へ入り、音のした方向へと身を進める。アケロンでたった一人の生き残りかもしれない。その子に、どうしてアケロンの町が、人っ子一人いなくなったのか、壁のヌルヌルしたものは何なのか、他に生存者はいないのか、いろいろと訊き出さねばならない。

「逃がしてはいけない」

そんな思いが、返ってアダになったのかもしれない。いきり立って追いかけるヒックスを尻目に、子どもは、信じられないようなすばしっこさで換気ダクトの中を逃げていく。

「子どもなの？」

ヒックスの後を従いてきたリプリーの声がした。彼女の後ろに二～三人の兵士がいるが、後ろは暗いのでリプリーの姿しか見えない。

「ダメじゃないか、こんな所に入っちゃ」

「私も、さっき、影のようなものが走ったとき、子どもだって思ったのよ」

「それにしたって、君は兵士じゃないんだ。女性でもあるし……」

「そんなことは関係ないわ」

「あっ、待て！」

ヒックスが止めようとするのも聞かずに、リプリーは、身をかがめながら、換気ダクトの中

を走り始めた。リプリーはヒックスと違って、ゴツイ、アーマーで身を固めているわけではない。狭い中を走るには彼より有利だった。

●放っておくわけにはいかない。リプリーの後を追いかける……⇨26へ

●一旦、外へ出て全員でリプリーたちを捜すことにする……⇨9へ

## 76

リプリーは、少女の肩に手を回して、やさしく語りかけた。

「地球に帰りましょう。ニュート」

ニュートは待っていたようにリプリーの身体に身を寄せ、コクリと頷(うなず)いた。

ヒックスはＡＰＣの内部を見回し、

「持ち出せるものは皆持っていく。ハドソン、ゴーマンを運ぶのを手伝え」

ヒックスはビショップを呼び出し、

「ビショップ。何か発見したか？」

「大したことは分からない」

「もういいだろう。戻ろう。荷物をまとめておけ」

フェロロの操縦する着陸艇(ドロップシップ)が浮上した。ＡＰＣ向かって船首を向ける。

「よし、出るぞ」

ヒックスの声にバーク以外の全員が頷く。

地上に降り立つと、強風が舞っていた。ヒックスが信号弾を投げる。着陸のための目印だ。遠くの空に着陸艇（ドロップシップ）の飛行して来るのが見える。

⇩220へ

## 77

リプリーは、数メートル先まで進み、ちょっと広い通路に出たところで止まった。周囲に目を配ってみるが、どこにもニュートの姿は見えない。

「ニュート！」

叫んでみても、自分の声がこだましながら抜けていくだけだった。もう一度、呼ぼうとして、息を飲み込んだとき、右手でコソリと何かが動く音がした。

「ニュート？」

パッとリプリーの顔に明るさがともる。が、次の瞬間には、逃げる体勢になっていた。ニュートとは似ても似つかない、化物がのそっと姿を見せたのだ。

「バケモノ！」

リプリーはそいつの顔面めがけて、ライフルの引きがねを絞った。射ちながら化物の牙（きば）に何かが引っかかっているのが目を引いた。

「ケーシー！」

リプリーの目は憎しみの光に溢れた。目の前のやつが、ニュートを殺し、ケーシーを牙にぶら下げたに違いない。

「よくも、よくも、よくも、ニュートを！　クタバレ！　バケモノ！」

ニュートの仇討ちだった。盲射ちに近かった。前の化物は、牙をむき、口からヨダレを垂らし、酸の血を吹き飛ばしながら、のたうち回る。

顔を苦痛のためか上下左右に振り回す。リプリーの乱射は容赦なかった。敵はこと切れる寸前であった。横倒しになり、鉤のような手の動きが止まる。後肢がピクピクと二〜三度、蠢いて、やがて全身の力が抜けた。それでも、リプリーは、射つのをやめなかった。

「リプリー！　リプリー！」

狂ったようにライフルを乱射するリプリーを、ヒックスが後ろから抱えた。

「ヒックス……」

リプリーはハッと我に返った。

「どうした、大丈夫か？」

「私は……」

視線をエイリアンの死骸の方へと移した。その視線の先を、ヒックスが辿った。

「……あれは……」

ヒックスが、頭だけの人形を見て、絶句する。後から、ゴーマン、ヴァスケスが追いついてきた。リプリーがヒックスの目をじっと見つめて言った。

⇩196へ

## 78

スラコ船内――。

「気をつけい！」

エーポンの声がとんだ。しかし、誰もまともに並ぼうとしない。どうやら、ゴーマンのことを自分たちの指揮官として敬おうという気持ちがないらしい。特にヴァスケスとドレイクは、バカにした視線を送る。

ゴーマンが、そんな兵士たちの顔を見ながら、自分だけまじめ顔で叫んだ。

「楽にしろ、今回の任務を説明する」

その声が終らぬうちに、声がとんだ。

「中尉殿！　質問があります」

「何だ、ヒックス」

「私はハドソンでさー。ヒックスはこっちです」

兵士の中から苦笑がこぼれる。

「う、そ、そうか、ハドソン、質問を許す」

「この作戦は、戦闘任務ですか、それとも害虫を退治するのでしょうか」
ハドソンの声だ。ゴーマンは、皆の顔を一通り見回し、
「分かっていることは、植民地、アケロンとの連絡がとれなくなったということだけだ。ビショップが、アケロンと通信できる距離に入って連絡をとったが通じない。通信衛生に異常はない。いまはそこまでしか分かっていない。しかし、一つだけ考えられるのは、異形の生命体が何らかの影響を与えているのではないか、ということだ」
「何だ、害虫退治か」
誰かがそう呟いた。兵士たちの中から忍び笑いがもれた。
「リプリー」
中尉が促した。
「皆さんには記録を渡してありますが第一に知らねばならないのは、その生命体のライフサイクルです。二つのタイプがあり、初めに彼らは卵のようなものがかえって人間の身体にとりつきます。そして、胚を体内に送り込んで自分は死んでしまいます。そして第二の形をとった生命体は人間の体内に数時間寄生し、人間の身体から出て脱皮するのです……」
「ヒューッ」
兵士の中からそれを聞いて声がとんだ。ヴァスケスだ。

TYPE

「でも、それは、どこにいるんですか」
「いつでも、どこでも」
「それなら私がひねりつぶしてやるよ」
ヴァスケスは背後の仲間に向け、拳を上げた。
全員が喝さいする。ふり返ったヴァスケスにリプリーが真剣な眼差しで言った。
「お願い、ひねりつぶして。全滅させて、一匹残らず」
そして全員を見回し、
「皆さんは、私の話をまるで笑い話のようにしか聞いていないようです。そして、今度の出動をいままでの警察行動と同じようにしか考えていないようです。しかし、大きな間違いです。私はその生物を見ました。それがどんなに恐ろしいのか体験しているのです。彼らと会ったら、あなたがたが、いまのように笑ってはいられない、と断言します」
兵士たちの表情はまちまちではあったが、真剣なものは一つもなかった。ある者は天井を見上げ、またある者は、リプリーからあからさまに視線をはずした。誰も信じていない、リプリーは、心の中で呟いていた。

⇩225へ

**79**

兵士たちは、隊列を乱さぬように前進する。彼らは銃を構えながら、デコボコした壁に

不気味なムードを感じていた。
「暑い。何でこんなに暑いんだ」
ハドソンがぼやき続ける。
「喉が乾いてカラカラだ」
今度はフロストが呟いた。
「湿度はあまり高くない」
吸盤をあちこちに取り付けたような周囲の壁はますます異様な姿を呈してくる。

⇩195へ

## 80

リプリーは、タバコを取り出し、火をつけた。ヒックスはせわしなくタバコをふかすリプリーの表情を窺いながら、ふと思い付いた様に彼女の肩を叩いた。
「俺の恋人を紹介するよ」
口元を微かにほころばせたヒックスの表情には自信に近い何かが感じられた。
「M41Aパルスライフルだ。口径は十ミリ。昔流に言うと44口径だな。頼りになる奴だ。使い方を覚えとくといい」
「教えて」

リプリーの表情に光が戻った。

リプリーは、手渡されたパルスライフルを構えてみた。ズッシリと重い。この重さが、彼女自身だけでなく、全員の生命を支えるのだ。

「ちょっと重いが、あんたなら大丈夫さ、いい体格してるしな。弾倉(マガジン)は二種類、五十連と百連だ。残弾数はここにデジタルで表示されるから、0になったら、マガジンストッパー、そうこのボタンを押すんだ。そうすれば空弾倉(マガジン)が飛び出す。わかるだろ？」

ヒックスが銃身右脇の小さな窓を示す。赤いデジタル文字が浮かんでいる。

「新しい弾倉を装塡(そうてん)する。カチッという音がするまで押し込むんだ。これが安全装置だ。普段はロックしておくんだ。それから、フルオートで射つよりも、セミオートの方が弾着が正確だ。弾丸の威力がすごいから、フルオートだとどうしても銃身がブレるんだ。無論、衝撃吸収装置は万全だが、セミオートの方が正確に射てる」

ヒックスの説明を聞きながら、リプリーは何度も、銃床を肩にあて照準を定めてみる。

反復していくうち、次第に銃が身体になじんでくるのが判る。

「そう、その調子だ。さすがに覚えがいいぞ」

「これは？」

リプリーは銃口の下にもう一つ管が口を開けてる箇所をさし示した。

「グレネードランチャーだ。三十ミリ弾丸型手榴弾の発射装置さ。でも、これの扱いまで覚える必要はないと思うがな」

●銃の射ち方を知ってればいい。グレネードランチャーのことは聞いても混乱するだけだ ……⇨213へ

●とりあえず、全て扱い方を知りたい。全部教えてくれるように頼む ……⇨68へ

## 81

ゴーマンとヴァスケスが自爆した衝撃波は先を進んでいたリプリーたちにまで届いた。その衝撃でニュートが換気装置の大きなファンの間に飛ばされた。

「リプリー！」

ファンに摑まり上にあがろうとするが、思うようにならない。

「ニュート」

リプリーが手を伸ばす。ようやくニュートのジャケットを摑んだ。リプリーの腕が急に軽くなった。

「リプリー！」

リプリーの手には、ニュートのジャケットだけが残っていた。慌ててリプリーとヒックスは換気筒を組み立てている柱に摑まり、下に降りていく。下からのニュートの呼び声がだんだん

と小さくなる。

「リプリー、助けてー！……」

●Fがチェックしてあれば……74へ

●Fがチェックしてなければ……228へ

## 82

リプリーはニュートを連れ、医療センターへ入って行った。医務室の偶のベッドに、ニュートを寝かせ、語りかける。

「さあ、眠りなさい。暖かくしてあげるわね」

リプリーは、ポータブルヒーターのスイッチを入れた。柔らかな赤い光が二人の頬を照らす。

「行かないで！」

少女は、リプリーの腕を掴んで訴えるように言った。

リプリーは壁のコーナーに設置された、ビデオカメラを指さしながら、優しくニュートに

「大丈夫よ、私は他の部屋にいるけど、ずっとあのカメラであなたを見ているわ」

リプリーは、決して彼女を見捨てたりしないと何度もニュートに約束した。ようやく少女も安心したのか、コックリと頷いて

「約束よ、私をちゃんと見ていて」

リプリーは、ニュートの髪を優しく撫で、その小さな額にキスをした。
「お休み、安心して眠りなさい」
リプリーは、ニュートの胸元まで毛布をかけてやり、そっとその場を離れた。

⇩118へ

## 83

エイリアンの血液を浴びたハドソンは、呻きながら座席に倒れこんだ。リプリーは無我夢中でAPCを疾走させた。火炎放射器の炎がAPCの外壁に引火していた。炎を引きずりながら、APCは走り抜ける。突然、操縦席上部のキャノピーグラスが砕け、鋭い爪がリプリーに襲いかかった。エイリアンの一匹がAPCに取り付いていたのだ。リプリーは咄嗟にブレーキを踏んだ。その反動で怪物は前方へ大きくハジキ飛ばされた。リプリーは再びAPCを急発進させた。APCの車輪が怪物を粉々に砕く。APCは両側の壁に激突し、シリを振りながらも突進した。大気改造ステーションの入口のハッチをブチ破り、ようやく外へ脱出した。だがなおもリプリーはスピードをゆるめない。
「リプリー、リプリー！　もう大丈夫だ」
ヒックスの声で、リプリーはハッと我に返った。
「これ以上無理すると故障の元だ」
そう言われて、ようやくリプリーはAPCを停車させた。思わず、額の汗を拭う。

操縦席から離れ、後部に行くと、混乱を極めていた。
ハドソンが酸を浴びた左手を押え苦しんでいる。ゴーマンはクラッシュの連続で頭を打ったのか、意識を失っている。
とにかく、ケガ人の手当が先決だ……。
リプリーは、ニュートを捜した。ニュートは操縦席の後ろのポッカリ空いたスペースに、チョコンと坐っていた。迷彩を施したヘルメットを被っている。大きすぎて、顔が半分以上隠れている。
「まあ、ニュート。大丈夫？」
ニュートは、ヘルメットを上げ、右手の親指を立ててみせた。
リプリーの口元が思わず、ほころんだ。

⇩67へ

## 84

しばらく後、リプリーは一人食堂で物思いに耽っていた。何故、あの連中はああなのだろう。人の話を真剣に聞こうともしない。それだけ自信があるからかしら。でも現実にやつらに出会えば、私の言うことがウソでないと判る。でも、その時じゃ、遅すぎる……。
貨物フロアの方から、機械音が聞こえてきた。着陸の準備は順調のようだ。威声のいい声が響いてくる。

〝このままでは、私は完全にヨソ者扱いだわ〟

●着陸準備を手伝いに行く……15へ

●誰か呼びに来るまでこのまま、ここにいる……44へ

## 85

いくつめかの角を曲がった瞬間、何かに肩を掴まれた。心臓が止まるかと思われた。ふっと後ろを振り向くと、肩を掴んでいるのは人間の手であった。

「バーク……」

「助けてくれ……身体の中に、やつが、やつが……あー、動いている……う、う、う、う」

リプリーはバークの顔を冷やかに見つめ、ポケットから手榴弾を出し作動ピンを抜いた。そして、バークの手に握らせた。

●Fがチェックしてあれば……11へ

●Fがチェックしてなければ……64へ

## 86

コンソールルームでは、ヒックス、ハドソン、ヴァスケスたちがビショップと連絡をとり合っていた。上方に並んだモニター画面の一つには、リプリーが必死に救けを求める姿が映し出されている。その時、一本の腕が伸び、リプリーの姿が画面から消え去った。その腕はチ

エックの柄で覆われていた。

●Bがチェックしてあれば……⇨59へ

●Bがチェックしてなければ……⇨31へ

## 87

APCは強風の中、大気改造ステーションに向かって走る。目的地まで約一キロ。リプリーとニュートは操縦席（コックピット）の後ろに坐っていた。APCを動かしているのはフロストだ。

「私、ゲームが一番だったの。迷路をぜーんぶ知っているんだもの」

ニュートが自分から口を開いた。どうやらリプリーを信頼し始めたらしい。

「迷路って……あ、換気システムのことね」

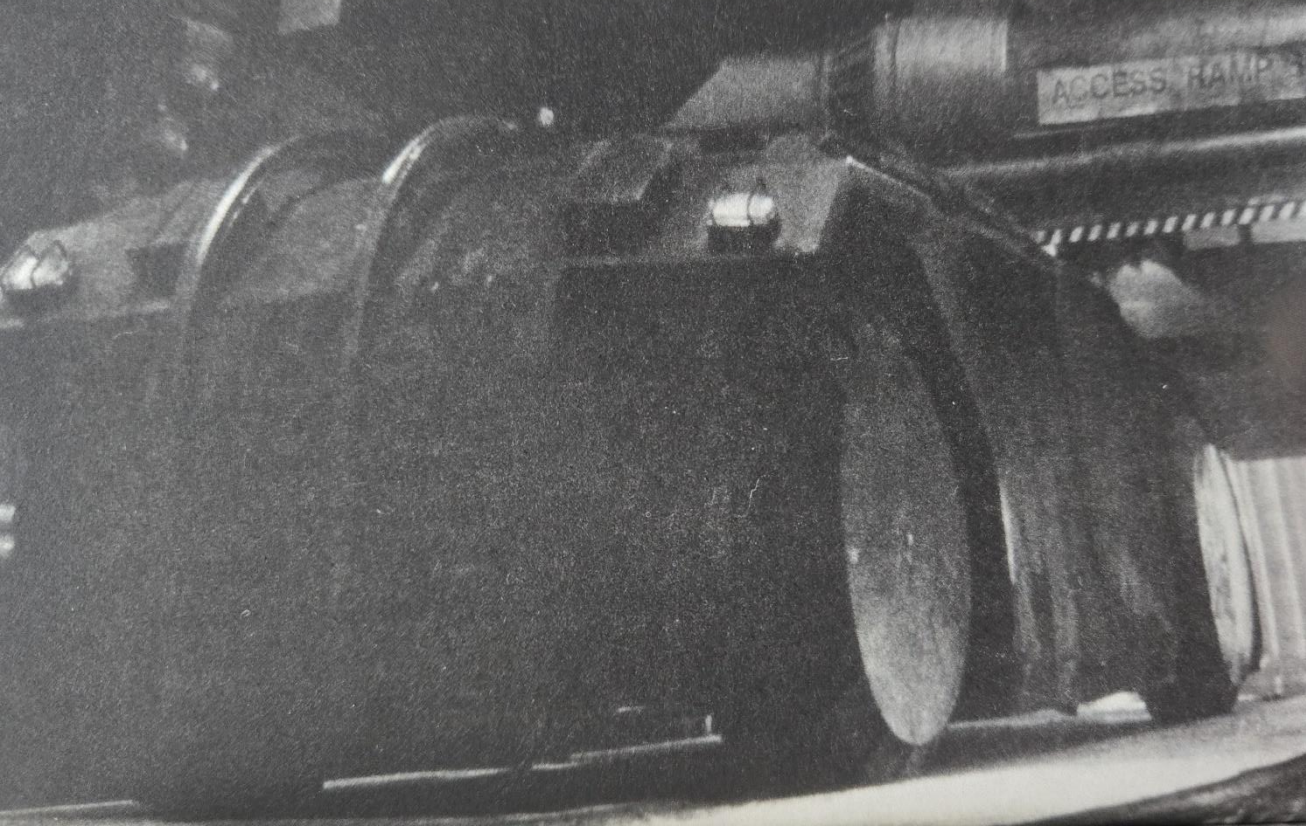
「そう。でも、換気ダクトだけじゃないのよ。いろんなトンネルとか、床の下とか、どこでも行けたの。一度行ったところは全部ちゃんと覚えているの」

「すごいわね。私も、あなたがエースだと思う」

ニコッとニュートが笑った。

二人が会話をしている間にAPCの風防ガラスに大気改造ステーションの建物が黒く大きく迫ってきた。

ステーション入口のハッチが開く。APCは地下へ続くフロアまで進入した。ゴーマンは、


ACCESS RAMP

建物の構造をディスプレイに呼び出し、思案していた。

●一班だけを地下潜入させ、もう一班は万一の場合に備え、上で待機させる ……⇨32へ

●潜入する人数は多い方が安全だ。二班とも潜入させ、APCは待機し、異常が起こり次第、行動を開始する ……⇨60へ

## 88

「わわわ、わ」

ゴーマンが大きな腕に首を締められ、白眼をむきながら巻き込まれる様を見て、バークが腰を抜かした。誰もそれを助けて引き起こそうとはしない。できるはずはない、全員、それどころではなかったのである。新手の大きな手が、タコのように、壁から天井から、波を打つように伸びてきたからであった。

ヴァスケスとドレイクのスマートガンが的確に狙った敵を粉砕する。他の兵士たちも手持ちの武器でタコのイボの化物を撃ち続ける。が、敵はいくら撃ってもいくら撃っても減りはしない。

「逃げろ！」

エーポンが叫ぶ。全員、じりじりと後退するが、デコボコの腕が彼らを包囲しており、動きが取れない。

「わー！」
バークがベストの端を掴まれ、天井へと持ち上げられた。続いて、ビショップが片足をすくわれ、もう一方の足は別の腕に捉えられた。別々の腕に掴まれたビショップの下半身は完全に左右に開かれ、胴体が真二つに割れた。顔面も割れた。転がった、片方ずつの目だけが、クリクリと動き続けていた。

DEAD END

## 89

いま彼らにできることは、やつらが来るのを待ち構えていることだけだった。リプリーは疲労していた。他の皆もそうだろう。
「いつの頃から眠ってないんだ？　二十四時間くらい経つんじゃないか」
ヒックスが、リプリーの傍らにやってきた。
「ヒックス……私、アケロンの住民や、他の人たちのような死に方はしたくない。もしそうなりそうになったら、射ち殺して」
「分かるな。そうなったら、俺が手伝ってやるさ。もっとも大気改造システムが爆発したらそんな必要もなくなるわけだ。どっちにも転びたくないのが本音だけどな」
「そうね」
リプリーは心を落ち着かせようと、軽く瞼を閉じた。

●Bがチェックしてあれば……⇨80へ
●Bがチェックしてなければ……⇨46へ

## 90

「ヴァスケス!!」
「リプリー!!」
「ニュート、大丈夫。味方よ」
ゴソゴソとニュートが穴の中から身を乗り出してきた。恥しそうにヴァスケスの顔を見上げる。リプリーよりゴツそうだが、どこか頼りがいがあるように見えた。
「さあ、行きましょう。ヴァスケス、この娘が、道案内をしてくれるわ」
「それは、ありがたいわね」
普段、滅多に笑顔を見せないヴァスケスだが、このときは心からの微笑をニュートに向けるのだった。⇨157へ

## 91

またモニタースクリーンが一つ消えた。ウィルツボウスキーだ。
「脱出するんだ!」
ヒックスの叫び声が、スピーカーから響く。

モニターを操作するゴーマンの手や指の先の動きが鈍くなってきた。リプリーが彼の顔を覗き込むと、額に脂汗を流し、口をパクパクさせている。とても指揮をするための判断力が残っているとは思えない。リプリーはゴーマンの肩を掴んで揺らしながら、

「あそこからいますぐ脱出するように命令するんですよ！」

「あ、う、あ……エーポン、か、か、か、火炎放射器で牽制しながらＡＰＣに、て、て、撤退させよ」

ゴーマンの声は雑音に消されていた。声が低く、しどろもどろのうえに、スマートガンの炸裂音、火炎放射器の炎の叫びのかげに隠れたために、聞き取りにくくなっていたのだ。

「火炎放射器が何ですって？」

エーポンが問いただす。

「もう一度言ってください！」

騒ぎの中、どうにかして、ゴーマンの命令を聞きとろうとするが、爆発音と雑音で耳に届かない。兵士たちは、敵と戦うことで精いっぱいだ。命令など聞こうとする者はいなかった。

エーポンだけは聞きとろうとするが、ゴーマンの代わりに聞こえてきたのは、目の前で異様に目を光らせているハドソンの叫びだった。

「これで俺も終りだ。もうすぐ除隊できるってのによ！」

179へ

## 92

リプリーはニュートを待たせておいて、後方に戻った。ゴーマンの傍らまで行き、ウロたえている彼をおしのけた。

「何やってるのよ。どきなさい」

「あ、あわ、あわ、わ」

何を言ってるのか判らない。相変わらず彼の頭は混乱したままらしい。

リプリーがパルスライフルの引きがねを絞る。

「さっ、早く、行きなさい！」

リプリーの声に、はっと気がついたのか、ゴーマンは、ずれた額の包帯を元に戻しながら走っていく。

⇩121へ

## 93

ニュートから聞いた話はゴーマンにとって大きなショックのようだった。

「リプリー、君はどう思う」

ゴーマンがリプリーに意見を求める。

「どう思うって？」

「これからのことさ」

「退却するんでしょう」
「それはまあ、そうだが……」
相変わらずの反応の鈍さにリプリーはイラつきを隠さずに答えた。
「とにかく、地球に報告すること。そして、私が思うには、エイリアンの巣窟となっている大気改造ステーションは爆破すること。それが一番、いいと思うわ」
黙って聞いていたゴーマンは、リプリーが喋り終ると、うん、なるほど……、などとひとり言を言いながら、コンピュータルームの方へと歩いていった。その後姿を見ながらリプリーは、全く、頼りない中尉さんだ、と苦笑するのだった。

⇩70へ

## 94

一方バークは、実験室の中で、足をガクガクさせていた。彼らが来たら今度こそ、ただではすまされないだろう。もっと奥へ逃げなければ……。その時、背後のドアがスーッと開き、鋭い爪がバークを捕えた。

⇩137へ

## 95

「よし、着陸するぞ。全員、配置につけ」
ゴーマンの声を受けて、エーポンが全員の尻を叩く。
「ホラ、ホラ。グズグズするなよ。ガキ共。マゴマゴしてると、尻を蹴っ飛ばすぞ」

隊員たちは、エーポンの叱責を受け流しながら、迅速かつ的確に行動する。
着陸艇から地表に照明ビームが発光され、暗かった周辺はいきなり真昼のような明るさになった。数秒後、着地のショックが身体に伝わった。アケロンの地表に降りたのだ。同時にAPCが艇から躍り出るように発進する。APCが前進し始めると同時に、着陸艇は再度、上昇した。上空から監視をするためであった。
APCは、一番手前に佇んでいる建物へと向かって進んだ。途中はゴミが風に舞っているだけだ。それだけを見ると実に殺伐とした思いしか伝わってこない。
細かい雨が降り続き、至る所に水溜まりができている。その水をAPCはハネとばしながら進む。
やがて中央制御棟の中央口に着いた。ドアが開き、スマートガンを構えたヴァスケス、ドレイクを先頭にして地上に降り立つ。彼らに続いて一人また一人、APCから飛び出し周囲に目を配る。と、いきなりガタンと音がした。全員に緊張の糸が張る。数秒後、ほっと、誰かが溜息をついた。音は、風の戯らによるものだった。放り投げられている金属片が風にあおられたのだ。
彼らのヘルメットの通信機に、ゴーマンの声が響いた。
「全員、戦闘体勢で前進せよ」

⇩123へ

## 96

捆(つか)んでいた少女の足首から緊張感が抜けた。

「本当に人間？」

少女が、ようやく口を開く。消え入りそうな声だが、リプリーには、よく聞こえた。

「そうよ。ほら、見て、目も鼻も、口も……」

「目も、鼻も……口も……」

「そうよ。見えるでしょう……」

リプリーは、少女の身体の上に身を乗りあげるようにしながら彼女の手をそっと握った。冷たい手だ。手を握り、彼女の身体をそっと抱く。少女にリプリーの肌のぬくもりが伝わっていく。

「大丈夫よ。安心しなさい……」

リプリーは、少女の身体を力いっぱい抱きしめた。少女の瞳から涙が溢(あふ)れてきたのが見えた。

「怖かったでしょうね……」

リプリーの目にも涙が溢れる。二人は、抱き合ったまま、ひとしきり、泣き続けていた。

⇩131へ

## 97

ディスプレイを見つめながらリプリーが言った。

「このサーヴィストンネルを利用して出入りしたみたいね」
「そうらしい」
ハドソンが指先で辿りながら頷く。
「ということは警戒システムを二基設置すること、それとトンネルの防火扉を密閉することね」
ヒックスが傍らのヘルメット姿のニュートを抱き上げ、ディスプレイの上に坐らせる。
「それだけじゃ、不足だろう。あいつら、他の経路を探すかもしれない」
ヒックスが言った。
「そう。だから換気ダクトのポイントも塞がなければ」
リプリーは、ディスプレイの上を指で辿りながら、チェックする。
「よし、完璧だ。早速とりかかろう」
ヒックスが行動を開始する。
「パーフェクト」
ヘルメットで、顔が半分ほど隠れてしまったニュートが声を上げた。ヒックスはそのヘルメットをコツンと叩いた。
⇩193へ

## 98

「リプリー、早く、早く、こっちよ!」

「待って。ニュート。あなたのように早く進むことはできないのよ」
リプリーが追いつく。
「ニュート、ここはどっち!?」
「左！　あ、違う右！」
「大丈夫、ニュート」
「大丈夫。こっちよ」
リプリーは振り返り、ヒックスたちが従いてきているのを確かめ、ニュートに続いた。
一方ヴァスケスは、しんがりからパルスライフルを射ち続けながら先を行くリプリーやニュートを追いかける。が、やがて弾丸が切れパルスライフルを捨てた。拳銃を射ちながら進むと、上からエイリアンが襲ってきた。ヴァスケスは仰向けになりそいつを足で押えつけ、弾丸を射ち込む。傷つけられた敵の酸のため、彼女の脚の肉が焦げ始めた。動けずにいる彼女を見て、ゴーマンが救出しようと傍らに寄ってきた。引きずって連れて行こうとする目の前に新手が襲ってくる。そいつを射ち殺すとゴーマンの拳銃の遊底は後退したままとなった。リプリーたちを追おうとするが、どうやら挟まれてしまったようだ。もう、逃げられない。二人の間に決意の視線が交される。手をつなぎあう。手榴弾を握って、ヴァスケスは、ゴーマンに抱えられながら、見上げた。

「あんた、いつでも、ドジだね」
手榴弾のキャップを捻り、作動ピンを押した。

⇩ 81へ

## 99

ビショップは窓際で外の様子を眺めていた。彼の無表情な視線は大気改造ステーションの基部から、吹き出す、火柱と蒸気の煙を捉えていた。
「何だ？　ありゃ」
ハドソンが窓ガラスに顔を押しつけるようにして、叫んだ。
「皆で何を眺めてるの」
リプリーが、仲間に加わった。
「異常発生時の熱抜き機構だ」
「どうして、あんなことになってるんだ。あいつらが何かしでかしたのか」
「私にも判らん。原因はどうであれ、問題は結果だ。このままでは、ここは爆発する。それは間違いない」
「どのくらい時間があるの」
リプリーが苛立たし気に訊いた。
「正確には言えないが、システム全体に至るまでに四時間足らずといったところか。爆発半径

は三十キロ、四十メガトン級の核爆発だ」
「随分、気楽に言ってくれるじゃないか。四十メガトンだぜ、四十メガトン。それもたった四時間ときたもんだ」
ハドソンは火花を散らしている大気改造ステーションを眺めながら、半ばヤケ気味に呟いた。
「また一つ厄介事がふえたというわけだ」
ヒックスが溜息をついた。
リプリーは、現在自分たちが抱えている難問を整理しようと、頭を巡らせた。
「あと四週間だぞ。あと四週間で俺は除隊になるんだ。ジーザス・クライスト。十年勤めて、年金でノンビリ暮らせるはずだったんだ。それが何の因果で、こんな星までやって来てあんな化物相手にヒドイ目に合って……チキショウ、ファック・オフ」
悪態を吐き続けるハドソンに、リプリーのひと言がストップをかけた。
「お黙んなさい。ギャア、ギャアわめき散らして、それでも男！」
その時ヴァスケスがニヤリと笑みを浮かべ、ハドソンに鋭い一瞥をくれた。

⇩133

**100**

着陸艇による空中からの探査はなおも続けられた。アケロンは厚い雲に覆われ、細かい雨が絶え間なく降り続いている。風もかなり強い。昼だというのにうす暗い地上には、

全く人気がない。入植者たちが使用していたと思われる、クレーン車や搬送車が無造作に放置されている。まるで、ゴーストタウンだ。開拓の希望に燃えて入植した六〇～七〇家族の移民たちは、一体どこへ行ってしまったのか。

モニターに映る、そんな情景をリプリーは見つめながら、言いようのない恐怖と悪夢が甦るのを抑えることができなかった。その時、ゴーマンの声がＡＰＣ内に轟いた。

⇩ 95へ

## 101

リプリーはヒックス以下、全員を召集した。リプリーの説明を聞いた兵士たちは激怒した。

「この金もうけ主義のクソッタレ野郎、俺たちの仲間はあの化物に殺られちまったんだぞ！」

ハドソンがバークの衿を締めあげながら、詰め寄る。誰もそれを止める者はいない。

「頭を吹っ飛ばしてやろうかね」

ヴァスケスがパルスライフルの銃口をバークのこめかみに突きつけた。

「まっまっ待ってくれ。ぼくはただ会社の命令で、異生物を生きて連れて帰るように言われただけなんだ」

「あの時と同じね」

リプリーに、ノストロモ号での忌わしい体験が甦る。五七年前と何も変わっちゃいないわ。

金もうけしか頭にない人種の考えることは――。
「殺っちまおうぜ」
「まあ、待て」
はやるハドソンを制して、ヒックスが一歩進み出た。
「リプリー、あんたはどうすればいいと思う？」
「私はこの場で殺すのには反対よ。地球へ連れて帰って証言させるのよ。会社や軍の上層でウノウとしている本当のワルどもを告発するのよ」
「俺も、それに賛成だ」
ヒックスはキッパリと言った。
「何でだよ。俺たちだって生きて帰れるかどうか、判らないのに……。こんな奴生かしとくことはねえぜ」
「今、指揮官はヒックスだよ」
ヴァスケスのひと言がハドソンの頭を冷やしてくれたようだ。
「よし、身動きできないよう、縛りあげろ」
ヒックスのひと言をキッカケに、ハドソンが抑えきれない怒りをこめて、バークの身体を金属性の粘着テープでグルグル巻きにした。

⇩114へ

## 102

その場でバークの提案に関してミーティングが行われた。バークが喋り続ける。

「中尉は、あくまで指揮権を持っているのだ。その権限をお前たちが取りあげることなど、ナンセンス極まりない。俺は、ゴーマン中尉に今後の指揮を取ってもらいたい。これは当然のことだ」

それを聞いて、ハドソンが、ワメいた。

「こんな小便たれ野郎にかよ。冗談じゃねーぜ。こんなやつに指揮を任せるんなら、やつらと心中する方がまだマシだぜ。もっとも心中なんかしたかねー。だからよ、バークさん、あんたのアイディアは、お払い箱ってわけだ」

リプリーが、バークの前に行って、指を一本立て、彼の心臓に突きさした。

「バーク、あんたの魂胆は判っているわよ。あの、フェイスハッガーを地球に連れて帰りたいんでしょう。そのためには、ゴーマンに指揮を任せた方がやりやすいと考えたんでしょ。あんたは、そういうズル賢い人なのよ！」

リプリーの言葉に、バークの顔が青ざめた。こめかみがワナワナと震える。

「何だって！　冗談じゃない。話合う必要なんかねーや。けっ。胸くその悪いやつだぜ」

ハドソンの言葉が、全てを決定したようだった。リプリーは、バークの魂胆にムカついてい

る自分を抑えることができなかった。

115へ

## 103

アケロンは風が強くなっていた。その風の中、大きく黒い塊が空を飛んでいる。ビショップが遠隔操作(リモート)で呼び出した着陸艇(ドロップシップ)だ。

「ビショップ！　聞こえるか」

ビショップのヘッドセットのスピーカーからヒックスの声が響いた。

「聞こえるぞ」

「そっちはどうだ」

「風が邪魔だが、艇は予定通り、こっちに向かっている。一六分で到着する」

「いま、ダクトの中を通って、そっちに向かってるんだ」

「了解」

キーボードを正確に叩(たた)きながらビショップが答えた。

98へ

## 104

一方では、リプリーとニュートが、

「隠れるのよ！」

リプリーがニュートの手を引いた。いま出てきたばかりの壁の奥へと二人は身を翻す。

「声をたてないで」
リプリーはニュートの唇に指を当てる。コクリと頷き、自分の指を唇へ当てた。
不審な音は、少しずつ近づいてくる。二人の身体に緊張感が走る。握る手が汗ばんできた。
二人は、音のする方へと視線を移す。
黒っぽい姿が目の前を横切ろうとする。それほど大きなものではなさそうだ。その黒い影が、二人の前に来たとき、リプリーが、声を出した。

⇩90へ

## 105

太陽が落ち始め、闇が増す度に不気味さが重くのしかかってくる。本来なら心休まる夜なのだろう。が、ここに残されたリプリーたちにくつろぎの夜はいつくるのか分からない。彼らを待っているのは悪夢の様な世界でしかないのだ。
「こんなのがあった」
ヴァスケスが見せたのはＡＰＣから持ち運んできた、パッキングケースだ。ヒックスはそれを見て唸る。武器、弾薬の類は全て燃えてしまっていたからだ。ヒックスはとりあえず回収できた兵器をチェックした。
「パルスライフル四丁。弾丸が各五〇発。Ｍ40手榴弾十五発。エネルギーが半分になった火炎放射器一基か……」

「それで、救援はいつ来るの？」
「今晩から数えて、十七日目だ……」
ヒックスが重々しく答えた。
「冗談じゃない！　十七時間だってもつかどうか。地球の救援隊が来る頃には、皆、まゆの中に埋められているんだ。……グス……グス……グ……ズ……」
ハドソンが興奮のせいか泣き始めた。

⇩136へ

## 106

APCの中では、ゴーマンがモニターのスイッチを切り換えながら事態を把握しようとしていた。が、映像は鮮明度を失っていてよく見えない。
「何も見えない、エーポン、報告しろ！」
絶叫のやりとりが交されるが、それは不毛の交信だった。お互いが何も理解できずにいるのだ。
「退却させて。ゴーマン、あそこから全員脱出させて！」
リプリーは必死に叫んだ。リプリーは、知っていた。これから起こる恐怖の事態を。あのときと同じことがいま、また起こる。彼らを助けねば。リプリーは心の中で抑えがたい震えを覚えていた。リプリーはインターカムを取り上げ、叫んだ。

「早く、そこから脱出して！」
「余計なことは言うな」
ゴーマンがリプリーからマイクをふんだくった。
「反応、多数！　全方向、全方向から何かが接近してくる！」
ハドソンの叫び声がスピーカーから響き渡った。
その声を捉え、ゴーマンがマイクに向かって叫んだ。

●**しばらく様子を見て、前進させる**……⇨150へ
●**そこに止まり、次の指令まで待機するよう、指示する**……⇨17へ

## 107

ビショップにとって必要な機材は、直ちに揃えられた。携帯用ターミナル、接続用ケーブル、電源ケーブル、予備の回路板等々が金属製のケースに収められた。
最も安全なルートとして選択されたのは、地下の点検通路であった。
ヴァスケスが円筒状の金属壁を焼き切り、人一人がようやく入れる程の穴を開けた。銃器の扱いだけでなく、小型溶接機の手並みも見事なものだ。
「どう？」
「何とか行けそうだ。ちょっと狭いけどな」

「方向は判ってるわね」
「コンピュータ通りなら、まっすぐ送信アンテナに続いている。約百八十メートル。四十分ぐらいだろう。機械の接続とアンテナ調整に一時間、着陸艇（ドロップシップ）の準備に三十分、飛行時間が五十分、というところだろう」
「どうしてそんなにかかるんだ？」
「パイロットが乗っている場合とは違うのさ」
ヒックスの問いにビショップは事務的に答える。
「遠隔操作（リモート）だからな。とにかく慎重にゆっくりやらないと、フェロロたちの二の舞いだ」
「しめて、三時間というわけね」
時計を見ながらリプリーが言った。
「急いで。早く行って」
「よし。それじゃ」
ビショップは、その穴に足から身体を滑りこませた。
気をつけて……、リプリーは心の中で呟（つぶや）きながら、必要な機材の入った金属ケースを、穴の中へそっと下ろした。
ヴァスケスが拳銃を渡そうとしたが、ビショップはそれを受け取らなかった。

「バイア・コンディオス」
ヴァスケスが小声でそういい、ビショップの入った穴にカバーをする。
ビショップの姿は、完全に見えなくなる。
カバーがされる寸前のビショップの眼は笑っていた。リプリーにはそう感じられた。
お願い、頑張って……、また心の中で呟いていた。

⇩119へ

## 108

ヴァスケスが敵を一匹やっつけ、少し前進すると、十字路に出た。どっちの方向へ行こうか迷っていると、コトリと音が聞こえた。彼女は、敵の襲撃にそなえ、身構えながら慎重に進んでいった。

⇩104へ

## 109

退却命令を聞いたその日の夜——。
「行くぞ」
「用意はできてる」
大気改造ステーション、地下C階の入口から入ってすぐのところからひそやかな会話が聞こえる。声の主はハドソン、ヴァスケスそれにドレイク。どうやらこの三人は、命令を無視して、調査に行こうということらしかった。

108〜110

彼らの動きは軍事行動ではない。いわば規則違反である。しかし、このまま何もせずに帰ることはできない。という気持ちは全員にあった。それゆえの規則違反なのだ。

三人はいま、ニュートから仕入れた情報を基に大気改造ステーション、南棟地下C階に来ていた。アケロンの住民が立てこもり、全滅したのがそこだと聞いたからだ。しかし、彼らは、目的地へ入り込んで、その不気味さに何とも言えぬ思いがしていた。

「リプリーやニュートの言う通りだぜ」

壁という壁にはアケロンの住民が埋められていた。ドロドロになって溶けてしまっている人間らしい骨格が、埋まっている。頭が逆さまにくっついたまま粘液の塊のようなものに閉じ込められた者も……。とにかく、惨憺たる様子だ。

「ムシ暑い……」

ハドソンが額の汗を拭く。銃を持つ手も汗でネバつく。

⇩132へ

## 110

リプリーは、影の入っていった穴の中へ身を半分落とす。

「待て！」

ヒックスがその肩を掴んだ。フェミニストを自認する彼としては、女性を危険な目にあわせるわけにはいかない。まして、リプリーは兵士ではないのだ。

「どうして？」
リプリーが不満そうにヒックスの手をどけた。
「君が先に入るのは危険だ。私が中を覗いてこよう」
ヒックスが、穴の中に半身を突っ込んだ。ドレイクは、スマートガンを構え、絶えず周囲に気を配っている。フロストは、もう一度、動体センサーを見つめ、叫んだ。
「動いたぞ！」
その声に、ピタリとヒックスの身体が止まった。後方に待機している兵士たちにも緊張が走る。周囲の状況がハッキリと分からないだけ彼らも不安なのだろう。ダラけながら雑談をしているときとは、顔つきが違う。
「さすが、兵士たち……」
リプリーは少しばかり彼らを見直していた。

⇩75へ

## 111

「ほーら、きれいになるわ。これで女の子らしくなったわよ」
すすけた少女の輪郭がはっきりしてくるといかにも育ちの良さそうな表情が見えてきた。
「さあ、この辺も拭きましょうね、レベッカ」
リプリーはニュートの鼻から頬にかけて拭き続ける。すると少女の口元から呟きが聞こえて

きた。
「ニュー……ニュート」
「えっ」
少女が初めて発した言葉だった。
「いま、何て言ったの？」
「ニュート。それが私の名前。皆がそう呼んでいたの。お兄ちゃん以外は」
「まあ、そうなの。私はリプリー。初めまして、ニュート。そちらの名前は？」
ニュートが握りしめて離さない首だけの人形に顔を近づけると、
「ケーシーよ。私のたった一人のお友だち」
「ハーイ、ケーシー。ヨロシク」
「あなたもみんなと同じですぐいなくなってしまうんでしょ。ケーシーはずーっと一緒にいてくれるのよ」
その言葉には感情というものがまるで欠落したままであった。一つの確信のようなものがあるだけのように見えた。
「まあ、ニュート……」
リプリーの心は凍りつきそうだった。何て悲惨な言葉なのだろうか。よほどの恐怖の中を生

き抜いてきたに違いない。

⇨口絵 6 へ

## 112

「カウントダウン、開始！」

核攻撃の用意ができたのだ。コンソールから、スラコの内部にビショップの声が響いた。アケロンのハドレイ市めがけ、四発、撃ち込むことになっている。

「一分前」

コンピュータ制御に切り換える。デジタル表示の大きなタイマーの数字が減っていく。

リプリーは、その表示を見ながら、熱いものがこみあげてくるのだった。長い間、宇宙を漂わされる原因となった、あの忌わしいエイリアンを、これでようやく絶滅に追い込むことができるのだ。

何度も襲われた恐怖、ロッカールームに隠れ、エイリアンが迫ってきたときの絶対絶命のピンチ。咄嗟のアイディアでエアロックを開き、宇宙船の外へと追い出したときの追いつめられ泣き出したくなるほどの恐怖。それらが全て、無駄ではなかったということになる。

人工睡眠カプセルへ向かいながら、リプリーは、そんな感慨に浸っていた。黙っているリプリーを見て、ニュートが、彼女の腕を引っぱった。

「どうしたの、ニュート」

「……」
「えっ？」
「怖い顔してる」
「あっ、ごめんなさい、ニュート」
「私、地球に帰れるのね」
ニュートが、大きな瞳で上目づかいに訊いた。まだ、自分が、本当に安全になったのか信じられないような目つきだ。
「そうよ。本当に帰ることができるのよ。もうすぐ爆発するわ。そうすれば、私たちは安全な所に行くことができるの」
カウントダウンは、ひとケタになっていた。
「五、四、三、二、一、ゼロ」
スラコの下部から四本の閃光がアケロン目指して帯を引いていく。軌道はハドレイ市。大気改造ステーション一直線だ。
リプリーは、窓際にニュートを連れていった。そして、抱きあげる。
「ホラ、ご覧なさい」
真暗な宇宙の闇の中、四本の弾道は狂いもせず、静かに進む。防風窓から覗いているため音

は聞こえないが、スローモーションで進む四本の核弾頭弾は、闇の中に消えていくのがはっきり見えた。

しばらくして、大きな閃光が上がった。その閃光と呼応するように周囲から炎があがる。その炎は距離が離れているために、ライターの火ほどにしか見えない。が、確実に大気改造ステーションが破壊されていく様を想像することができた。

破壊されているのはハドレイ市だけではない。化物の巣窟も同時に粉砕されて、やつらもバラバラになっていることだろう。

リプリーのイメージの中に、やつらが苦しみのたうち回ってバラバラになる姿が見えた。ニュートにも、化物たちの身体が吹き飛んで炎に焼き殺されている姿が見えた。

やがて、明りは小さくなって、また、闇の世界が二人の目を支配した。

「行きましょう、ニュート」

「今日から、ぐっすり眠れるのね」

二人の視線には、深い安堵と信頼の絆が絡みあっていた。

スラコは、任務を果たした兵士とリプリー、そして、ニュートというアイドルを乗せて、闇の中を地球へと滑る。

そして、スラコから一個のカプセルが放たれた。その中には、バークの苦痛に歪んだ顔があ

った……。

## 113

リプリーを追いかけようと決心したものの、どちらに行けばよいのかまるで判らない。周囲の様子を窺っていると、フッと生臭い臭いが鼻をついた。

「ウッ！」

思わず口元を手で覆う。風に乗って運ばれてきたらしい。胸くそが悪くなりそうな臭さだ。人間が腐ったものでもない。彼女はいままで会ったことのある動物や、何かが焦げたり、焼けたりする臭いを思い出そうとした。

が、先ほど鼻についた、吐き気をもよおすような臭いに当てはまる記憶はない。

考えていても仕方がないだろう。ヴァスケスは、また、一歩、前進する。と、そのとき、ヴァスケスの耳に、何かが動く音がした。自分の服がダクトに擦れる音かと思ったがそうではないらしい。

ズズッ、ズズッ！　誰かが思い荷物を引きずっているような音だ。臭いだけでも胸くそが悪くなりそうなのに、その音は、さらに不快感を与える。

〝敵か！〟

ヴァスケスは心の中で叫んだ。

END

また、風が吹く。その風はどこから入ってくるのか周囲を窺っても判断することはできない。風は前方から吹いているようだ。彼女がいるところは一本道。つまり、前方に異常物体がいるということになる。

動体センサーのスイッチを入れると、それほど大きな生命体ではなさそうだ。といって人間とはあきらかに反応が異なる。ヴァスケスは、銃身を前に構え、臨戦体勢を取り、腰をおとした。

⇩127へ

## 114

金属性の粘着テープでグルグル巻きにされたバークは、コンソールルームの隣にある物置に放り込まれた。

「しばらく、そこでおとなしくしてろ」

ハドソンはそう言い残すと、ドアをピシャリと閉めた。

床に転がされたバークは、いろいろ思いを巡らせた。考えに疲れた頃、彼はウトウトとしていた。

誰かが入って来る気配で目が覚める。ヴァスケスだった。手にナイフを握っている。

ヴァスケスはバークの傍らにしゃがみ込み、

「いいザマだねぇ」

114〜115

「たっ助けてくれ。金ならいくらでも出す」
「金、いいねぇ、大好きだよ」
「お願いだ。助けてくれ」
「おあいにくさま、あたしゃ、金は好きだけど、金で人を釣ろうっていう人間が一番嫌いなんだ」
ヴァスケスは表情も変えずに、ナイフをバークののど元にあて、素早く引いた。
「あの世へ行って、ドレイクたちに謝りな」
ヴァスケスは立ち上がると、ズボンのポケットから黒いバンダナを取り出し、おもむろにナイフを拭いた。

⇩125へ

## 115

気を取り直したリプリーはニュートの寝室へと向かった。
培養器が何本も立ち並ぶ部屋の向こうにニュートが眠っている。不気味な環境ではあるが、この星の中では今のところ最も安全な地域であることに異論はないはずだ。あの怪物たちは、こうやって培養器の中に閉じ込められているのだから……。
医務室の開閉ボタンに手を伸ばしかけたリプリーは、つい先程眠りに就いたはずのニュートの姿が然るべき場所にいないことに気づいた。

いない！　どうしたのだろう。まさか……。リプリーは右肩にかけたパルスライフルを素早く腰だめにし、身体の神経を目と耳に集中し、周囲をくまなく見回した。

すると、ニュートを寝かしつけたベッドの下からかすかな寝息が聞こえてくるではないか。

「オーッ、ニュート」

少女は、ベッドの下にその小さな身体を丸めて眠っていたのだ。

リプリーは、パルスライフルをベッドの上に置き、少女の横へ音を立てないように身を横たえた。ニュートが寝返りを打とうとするのを、優しく髪を撫でてやる。怖い夢でも見ているのだろうか、ニュートの瞼にはうっすらと涙が浮かんでいる。

リプリーはそれを指で拭ってやりながら、その小さな顔を、身体を包みこんでいた。

「何も心配することはないのよ、ニュート。ママはここにいるわ」

彼女は、ニュートの小さな身体を確認しながら、まどろみに陥っていった。 ⇩200へ

**116**

「こっちよ！」

ニュートは、持ち前のすばしっこさで、ダクトの中に身を躍らせる。大人たちもそれに続く。しんがりでヴァスケスが、目の前まで迫ってきたエイリアンに止めを刺している。血の酸を身体に浴びる寸前で射ち殺す腕前はさすがだ。

「入って！」
リプリーが、ヴァスケスに叫んだ。目でそれに答え、前の連中に続いた。
「こっちこっち！　早く」
リプリーの先を、ニュートが走る。なるほど、ここで、かくれんぼをして、そのエースだったというだけあり、迷いもせずに進む。が、大人たちにとって、いま抜けようとしているダクトは何しろ狭すぎる。
「ニュート、ちょっと待って！」
「早く早く」
リプリーの叫びにニュートが答える。
そのとき、後方で銃声がした。震えながら射っているのはゴーマンだ。リプリーが手をかざして様子を見ると、敵が三匹、彼のすぐ脇のダクトから手を伸ばして首の周りに襲いかかろうとしている。
「ニュート！　待ってて！」
ゴーマンが苦戦している様子を見て、リプリーが叫んだ。

●ゴーマンを、助けに行く……⇨92へ
●このままニュートに従いて行く……⇨154へ

# 117

その内容とは次のようなものであった。

アケロンにはいくつかの鉱石採掘場があった。が、そのうちの一つの採掘場で、数カ月前から異常が発生し始めた。採掘に行った連中が誰も帰ってこなくなったのだ。

警備隊は調査に出かけた。しかし、出かけていく度に警備隊も誰一人帰ってこない。そうこうしているうちに町中が、何かのまゆのようなもので包まれ始めた。そして、このまゆの餌食になったのはアケロンの住民たちだった。まゆの中に閉じ込められた住民たちは、卵からかえった赤い小さな化物にとりつかれた。とりつかれた住民は次には、腹の中に幼虫を産みつけられる……。

人間の中で育った化物どもは、やがて大きくなり、どんどんその数が増えていった。逃げ場を失った住民たちは大気改造ステーションの地下へと逃げ、バリケードをつくって立てこもったが、結局、全滅した、ということだった。

「まゆにされた人たちは皆、大気改造ステーションに集められた……。PDTの反応はその人たちなの……」

117〜118

そこまで聞いていたリプリーが呟いた。

私の思った通りだった。ノストロモ号のコンピュータが、この生物は、完全生物で、殺す方法はないと打ち出した。あのエイリアンに間違いない……。

ノストロモ号は、彼女が以前、乗っていた宇宙船の名前だった。その宇宙船に乗っていると き、エイリアンと凄まじい死闘を行ったのだ。そのときの恐怖が彼女の体に甦り、寒気が全身に走った。ニュートも、その話を続けているとき、恐怖の体験を思い出したのか、話し終ったときには身体の震えが止まらなくなっていた。手が小刻みに震え、ココアの入ったカップを持っていることができないほどであった。目には涙が溢れ、流れた跡が頬にできているのが痛ましい。

背筋を凍らせているのは、リプリーとニュートの二人だけではなかった。ニュートの告白を聞いていたゴーマンも同じ戦慄に襲われていた。いや、初めて聞くエイリアンの不気味さに、彼は、全く今後の戦闘意欲を失っていたのであった。

⇩138へ

## 118

リプリーが運用センターに戻ると、ヒックス、ハドソン、ビショップが顔を付き合わせていた。

リプリーは真剣な面持ちでビショップに尋ねた。
「エイリアンたちは、寄生した人たちを殺さないで大気改造ステーションの地下に運んでまゆに入れてヤドカリにしてるってわけね」
「そうだ」
「と、いうことは、人間一人に一匹。つまり百匹はいるってことになるわ」
それを聞いて、いままで大口を開けていたハドソンが不思議そうに呟いた。
「フェイスハッガーは、卵からかえる、とすれば、その卵はどっからくるんだ？」
「それをずっと考えてきた」
ビショップが無表情に答えた。
「断定はできないが、女王がいるんじゃないかと思う。例えばハチ。ハチは働きバチが普通の卵に特別な栄養を与える。それがロイヤルゼリーだ。それを与えてもらったものが女王バチとなれる。同じようなアナロジーがやつらにもあるのではないかと思う。とすると、女王エイリアンは、いままでのやつらより、数段、大きいということになる」
推理の域を出ないとはいえ、その説は、そこにいる連中にショックを与えずにはおかないだけの説得力があった。

197へ

## 119

ビショップに聞こえるのは自分が這っていくときに服が擦れる音。見えるのは導管の丸い壁とわずかな前方。ようやく人間一人が、這っていくことができるだけの空間だ。閉所恐怖症なら三秒たりとも平常心を保つことはできないだろう。が、幸いビショップは、合成人間。そのようなプログラミングはされていない。むしろ、彼にとっては今後の行動パターンをじっくりと考えることができる空間であった。

⇩ 89へ

## 120

「早く彼らに撤退するように命令してください」

リプリーは、思わず怒鳴っていた。

「お、お、お、一体、どうなってるんだ。エーポン！　エーポン！　答えろ！」

うろたえながらゴーマンがマイクを握りしめる。それでも、エーポンの応答はない。もう、ゴーマンの思考は全くストップしているようだ。フロストのスクリーンが消えても、成す術もなく、ただ呆然としているだけだ。クロウの生体反応も消滅した。他の兵士たちの生体モニターも混乱の様子を現していた。

やがて、炸裂弾の音がとび込んできた。

「だ、だ、だれだ。発砲は禁止したはずだぞ、バカメ。銃火器の使用は禁止したのに……」

ゴーマンは、ブツブツと呟いているだけだった。

⇩91へ

## 121

リプリーは、ゴーマンにニュートの所へ行くように叫び、向かってくる化物たちと戦う。

ヒックスが寄ってきて、援護をしてくれた。

ヴァスケスが、しんがりで、パルスライフルで、追いかけてくる敵たちを確実に仕留める。

さすがに射撃の腕は確かだ。

「リプリー、大丈夫か！」

ヒックスが援護しながら声をかけた。

「大丈夫よ。早く行きましょう。ニュートが待ってるわ」

彼は頷くと、しんがりのヴァスケスに、援護しながら従いてくるように伝えた。そしてリプリーの身体を押し、

「先に行ってニュートを守れ！」

「分かったわ」

リプリーが、そこから離れると、ゴーマンが、少し行ったところで、ボンヤリとヘタリ込んでいる。失禁しているようだ。

「ゴーマン、ニュートは？」

121〜123

「いない」
「何ですって！」
「俺が来たときには、いなくなっていたんだ」
「そんな！」
リプリーは呆然とへタリ込んでいるゴーマンを一度、ハリとばし、ニュートを探し始めた。

⇩77へ

## 122

リプリーは、爆風の中を歩き続けた。彼女が歩く傍らを炎が追いかける。小爆発がそれに続く。コーナーを曲がる度に、リプリーは火炎放射器を発射した。彼女は記憶を辿りながら歩く。が、見慣れているはずの通路は、前、来たときとはまるで異なっていた。それだけ、爆発がくり返され、火炎による損傷が大きいということになるのだろう。

⇩85へ

## 123

APCから降りた隊員たちは中央制御棟の入口へと進んだ。エーポンがドアの開閉装置をチェックしながら叫ぶ。
「密閉されている。ハドソン！」
呼ばれたハドソンが、ドアを調べながら回線の接続作業を行った。何度かチェックをしてい

ると、重々しい音をたてて開き始める。
隊員たちは臨戦体勢をとりながら慎重に進入していった。
スマートガンを構えながら慎重に進むヴァスケスを先頭に、前進する。
「エーポン、どんな様子だ」
ゴーマンの声がエーポンのヘルメットに取り付けられている通信機から響いた。
「異常なし。前進します」
前方に広い通路、かすかに青っぽい光が天井から放たれている。床にはあちこちに水溜(たま)りがあった。

⇩ロ絵 2 へ

## 124

リプリーは、咄嗟(とっさ)に判断を下した。あの梯子(ステップ)を昇ろう。
エレベーターを途中で止めて降りる。視線を上にあげると、隣のエレベーターの動きを示すランプが、一階、一階、また一階、と上昇する様を伝えている。あいつだ。リプリーはニュートをひょいと抱きあげて、梯子(ステップ)を昇り始めた。そこを昇りきれば、大気改造ステーションの上まで続いているはずだ。
「あと二分、全員退去せよ」
感情も何もない機械的なこの警告を聞いているのは、リプリーとニュートの二人だけだった。

炎の梯子をリプリーは昇り続けた。ニュートは、彼女の首にしがみついている。ようやく離着フロアに出ることができた。しかしそこでリプリーは、愕然となった。爆発の炎と強風が二人を迎えてくれてはいたが、肝心の迎えがいない。

「ビショップ！」

狂ったように空に向かって叫んだ。

ビショップが、着陸艇でそこに待機しているはずだった。が、その黒い機体はどこにもない。

ギーギーと後ろから音が聞こえた。エレベーターが上昇してくる音だ。危機をどうやって脱出するか。エレベーターで降りるわけにはいかない。ここから飛び降りるわけにもいかない。しかも、ここが爆発するまであと二分という警告が放たれている。今度こそ、逃げ道は完璧に断たれてしまったのだ。

⇩152へ

## 125

廊下に出たヴァスケスはコンソールルームへと向かった。ヒックスが顔を出し、

「ヴァスケス、どこへ行ってたんだ」

「ちょっとね、トイレ」

「相変わらず、いい度胸だな。さっ作戦会議を始めるぞ」

「O・K」
二人は、コンソールルームへ入って行った。

⇩42へ

## 126

「あなた、あの化物を持って帰るって、本気なの？」
リプリーは医務室の片隅でバークと対峙していた。
「培養管に入れとけば安全だろう」
「バカじゃない！　あいつらは殺さない限り安全なんかじゃないのよ。経験ずみでしょう！」
バークは彼女の言葉は取るに足らぬように思ってるらしい。鼻をかきながらおためごかしに、
「冷静になれよ。あいつらを持って帰ると、我々は英雄になれるって言ったろ」
リプリーの目つきは炎になっている。
「そんなに英雄になりたいの。大勢の人間を殺したっていうのに。そうよ、あなたがアケロンの住民を殺したのよ。私は知っている」
語尾が震えていた。バークは、振り向き、不安の表情を見せる。
「あなたが、彼らにエイリアンの調査をするように指示したのよ。12月6日付の書類でね。おかげで彼らは全員、死んだのよ。ニュートだけを残してね。しかもその報告をしていないでしょう。記録に全部書いてあったわ。私、それを読んだのよ」

「初めからこんなことになるとは誰も思っていないだろう」
「ウソよ。私のエイリアンに関するレポートはあなたも読んでいたでしょう。それなのにあなたは、住民に注意させることもしなかった！」
「あれは、形だけの調査さ」
リプリーの怒りが爆発した。
「ふざけないで。そのために、157人の住民が陵辱され、殺されたのよ！ 皆がこのことを知ったら、あなたを磔（はりつけ）にするでしょうね。もちろん十字架なんかじゃない。その後、首をちょん切って三尺高い所でさらし首にしてやる」
バークは、古い、言い回しをするものだとニガ笑いをしながら、
「君をかいかぶっていた。もっと利口だと思っていた。残念だよ。失望したよ」
「失望してもらって、光栄だわ」
リプリーはキッパリと言った。バークはなおも何か言おうとしたが、リプリーは彼の言葉を最後まで聞いてはいなかった。

**●今は彼に関わっている暇はない。これだけクギをさしておけば、バカなことはしないだろう** ⇨99へ

**●皆に全てバラし、どう扱うか相談する** ⇨101へ

## 127

黒い塊が前方に薄ボンヤリと浮かびあがった。その敵はそれほど大きくはない。仔牛くらいの大きさだ。歩く速度ものろい。歩く度に、何かを擦っているような音がする。

暗闇の中で、ヴァスケスは目をこらす。

黒い塊の上方に白いものが見えた。どうやら牙のようだ。暗闇に溶けているので、姿、形は、はっきりとは見えない。が、いままで、お目にかかったことのない生物であることは確かなようだ。

胸くそが悪くなる臭いはますますひどくなってきた。吐き気をこらえながら、目の前の敵が射程距離に入るまで、身を潜めていた。

**●確実に仕留めるために、至近距離まで相手を引きつける** ……⇨142へ

**●とりあえず威嚇してみる** ……⇨146へ

## 128

ディスプレイも、モニターも、全て消えてしまっている。

「どうしたんだ!?」

「あいつらのプレゼントよ」

「エイリアンが電源を切った？　そんな知的生物だとは思えないが……」

127〜129

そして、ハドソンが動体センサーのスイッチを入れた。ヴァスケスも続く。彼らの目にセンサーの光がボーッと映った。不気味な光は、耳に不快な音と変わった。

「いるぞ。この建物の中らしい。いや、ここにいる。すぐそこだ」

「落ち着けハドソン。ヴァスケス、同じか」

「間違いないわ。すごく近い」

「とうとう、やってきたか」

ヒックスは冷静になろうと努めた。

⇩224へ

## 129

「こっちよ！」

ニュートが、ダクトの中へ先に入ろうとした。

「待って、あなたが先に入っちゃ危険よ。私が様子を見るから待っててちょうだい」

リプリーが、ニュートの腕を取って止める。

リプリーはダクトの中を覗き込み、様子を窺った。安全を確かめると、

「ニュート、皆を呼んで。後ろから道を教えてちょうだい」

頷き、声をかける。皆が了解のサインを出すと、身軽に中に入った。

「行くわよ」

⇩229へ

## 130

ニュートがリプリーに心を開いたと同時だった。

「大気改造ステーションだ！」

ハドソンが叫んだ。その声につられてゴーマンがディスプレイを覗き込む。

「どんな状態なんだ」

「はっきりとは判りません。でも、PDTが信号を送ってきています」

配置図を見ると、大気改造ステーションの南。地下C階のところに、青い光が群をなし、それは息づいているように見える。

「パーティでもやっているのか」

ヒックスが呟いた。

「でも、どうしてそんなところに……。この運用センターこそ、最後の拠点だって彼らは決めたわけでしょ」

ディートリックが不安気に呟いた。それを聞いてゴーマンがわけ知り顔で言った。

「どうにか、ここから脱出して、もっと有利な場所に移動していったんだろう。大気改造システムは完全に活動している。とにかく、正体を突き止めよう」

その声を聞いて、エーポンが叫んだ。

「了解！　行くぞ」
その声で運用センターに慌ただしさが戻り、活気が甦った。
全員、ＡＰＣに乗り込んだ。

⇩87へ

## 131

いつまでも泣き続けるわけにはいかない。リプリーは少女の手を取った。
「さあ、行きましょう」
出発しようとしたものの、すぐ不安気な表情に変わった。どっちへ向かって行けばいいのか判らないのだ。
そんな気配に、少女が気がついたのだろう、リプリーの手を引く。
「あっちよ」
「えっ、判るの」
「私、この通路は、全部、どこに出るか知ってるわ」
「本当。よかったわ。迷っちゃってどうしようかと思っていたのよ」
「任せて」
少女は、身体を立て直し、進もうとした。
「待って、あまり早く行かないでね。私、この中、歩くの慣れてないのよね」

ニコッとリプリーが笑いかけた。
「ニュート」
「えっ？」
「私の名前、ニュートっていうの」
「そう、私、リプリー。よろしくね」
二人が、手を握りあった。そのとき、ガサゴソと誰かが近づいてくる音がした。⇩104へ

## 132

「何か動いている」
ハドソンが叫んだ。彼の動体センサーが鳴り出した。同時に全員のセンサーも、何かの生物が動いていることを報せる。
「何だ！　どこだ」
ドレイクが前後左右を見ながら叫ぶ。
カチッという音は、ヴァスケスがスマートガンを構えた音だ。ハドソンは握りしめていたパルスライフルの安全装置がはずれているか確認する。
「近いぞ」
ハドソンが呟く。ドレイクが訊く。

「どこだ」
「見えない！　あっ！　後ろだ！」
「いや、前だ！」
ヴァスケスは叫びざま、スマートガンの銃口を前方に向けて引きがねを絞った。火花と発砲音が周囲にこだました。それがきっかけになった。スマートガン、パルスライフル、そして火炎放射器の炎が、入り混じった。
「黒い何かを発見！　甲虫の化物だ！」
ハドソンがドレイクに伝える。
「俺もいま見たぞ！　あれはセミのミュータントだ！」
ドレイクが叫ぶ。
三人は背中合わせになりながら、モゾモゾと蠢き迫ってくる怪物を狙った。が敵はなかなか倒れない。
「腕が取れてるのに！」
「こっちは脚の付け根から半分、焼き切ったぞ！　それでも立ちなおって向かってくる！　何だこの化物は！」
三人は、化物たちの挟み撃ちにあい前進することも後退することもできずにいた。化物の身

体からまき散らされる酸のために、パイプなどの金属類がジュージューと音をたてながら腐蝕し、煙があがる。それが硝煙のように見えた。

⇩151へ

## 133

「あと四時間!? グズグズしてはいられないわ。何とか脱出する方法を見つけるのよ」

リプリーが沈みかけた雰囲気を打ち壊すように叫んだ。

「スラコに残されたもう一機の着陸艇(ドロップシップ)を呼び出すのよ、遠隔操作(リモート)であれを降ろせば」

「そんなことくらい、俺も考えてたさ」

ハドソンが、リプリーを遮るように言った。

「だけどな、それにゃあ、ビーム送信機(ターミナル)が必要なんだ。だけど、送信機(ターミナル)は……」

「さっきの火災で回路が切れてしまっている」

ビショップが言った。彼は、さらに続ける。

「ここからアンテナに続く回線は切断されているが、このハドレイ市に設置されているアンテナは使えるはずだ。電力は大して必要はない。ただ……」

「ここからの操作が不可能というわけね」

合成人間(シンセティック)は表情も変えずに頷(うなず)いた。

「と、いうことは……」

リプリーは厳しい表情で、全員を見回した。
「誰かが、誰かがあそこまで携帯用の送信機(ターミナル)を持って行って接続できれば、何とかなるというわけね」
「一体全体、あの化物がウヨウヨしている中を誰があそこまで行くっていうんだ。俺はご免だぜ。他の連中もそうに決まってらあ」
「誰もあなたに行けとは言ってないでしょ」
「あんたの眼はそう言ってるよ！」
「待て！　そう興奮するなって」
ヒックスが懸命に二人を制する。
「ウルセエッ！　ヒックス、止めるな。この女は、危険なことといえば、皆、俺たちに押しつけようとするんだぜ」
「ハドソン、冷静になりなさいよ」
「私が行く、私が」
ビショップのあまりに静かなその声は、一瞬誰の耳にも入らなかったに違いない。
「私が行くよ」
リプリーはビショップのあくまで変化のない表情を凝視した。

「何と言っても、私だけが着陸艇の遠隔操作の資格を持っているんだから。それに私は……そのつまり、合成人間だ。だから、外の天気も皆が考える程には邪魔にはならない。私の集中力は天候などには左右されないようにできている。そう、邪魔さえ入らなければ……」

「邪魔さえね」

リプリーの言葉に、ビショップは黙って微笑んだ。初めて、彼のそんな表情を見たのではないか、とリプリーは思った。

「O・K。奴に行ってもらうとして、まず必要な物をそろえなくちゃならん」

「後はルートだな。何しろ表にゃ化物どもがウヨウヨしているんだからな」

ヒックスの真剣な表情に呼応するように、ハドソンが続けた。さっきよりは大分落ち着きを取り戻したようだ。

「それは、あなたの役目よ、ハドソン」

リプリーがそう言うと、ハドソンはおどけたような仕草で彼女に敬礼をし、コンピュータの⇩107⇧コンソールパネルに向かった。

## 134

「上だ！　ヴァスケス」

ヒックスの一声で、ヴァスケスとハドソンは天井に向け、ライフルを乱射した。天井を

破って、エイリアンたちが落下してくる。溶接したドアも、エイリアンたちが体当りしているのだろう。ドスンドスンという音とともにヒビ割れが大きくなり始める。

そんな中、ハドソンは狙いも定めず、ライフルを射ちまくっている。

58へ

## 135

ニュートを抱きしめながら、リプリーは音の止まった27番エレベーターに目を移した。黒い巨大な塊が、そこから身を乗り出そうとして、乗降口の周囲を破壊しているところだった。身体が半分出る。残っているのは長いビルでも支えることができそうに巨大な足だけになった。バリバリと音を立てながら、ついに全身がエレベーターの外に出た。

二人は抱きしめているお互いの腕に力を入れた。これまでか……。とリプリーは思った。彼女は呟いた。

「ニュート、目をつぶっているのよ……」

そのときであった。下から、風が舞いあがり、炎と火と爆発音の中、黒い壁が上昇してきた。リプリーの目に光が甦る。ニュートもその気配に目を開く。もちろん、新しく壁がつくられたわけではない。その大きな壁は、着陸艇の姿であった。

「ビショップ！　ビショップ！」

リプリーには、その大きな壁が天使に見えた。

着陸艇は、フワリと大きな船体を止める。リプリーが位置を教えようと手を振る。
着陸艇からタラップが降りる。リプリーにはそのタラップが地球へ続く道のように見えた。
ビショップは着陸艇の操縦席から、リプリーとニュートが乗り込む様子に目をこらしていた。
離着フロアの周囲は火柱が舞いあがっている。強風の中、歯をくいしばりながら一歩一歩、リプリーがタラップを上がる。
たて続けに爆発が起きた。爆風で着陸艇が左右に揺れる。ビショップは、タラップを引き込み始めた。ニュートとリプリーが、船底に吸い込まれ、消えた。一瞬の間であった。また爆発が起き、艇が揺れる。その拍子に、離着脚が、導管の残骸に引っかかった。
ビショップが必死に艇をコントロールする。

47へ

## 136

リプリーは泣き声をあげているハドソンに向かって激しい口調で言った。
「見なさい！　この子は一人で生き抜いてきたのよ。武器もなしで。私たちは対策をたてることができるでしょう。重要なことは、十七日間生き延びることができればいいってこと。その間、やつらを近づけなければいいのよ」
涙を手の甲でぬぐいながらハドソンは目をあげる。
「ハドソン、私たちにはあなたが必要なのよ。さあ、コンピュータから運用センターの建物の

設計図、パイプや換気ダクトなどの配置図、とにかく、全て、この区画につながるあらゆる路の情報を全部出してちょうだい。そして、やつらが、ここに辿りつけないようにするのよ」

彼の顔に少しずつ生気が戻ってきた。

「よし、分かった。あの化物ども、一歩も動けないようにしてやる！」

189へ

## 137

ヴァスケスが溶接したドアも、いつまでももちはしない。ズン、ズンという音とともに、ドアがきしむ。あと、二～三回も、追突されると、破壊されるだろう。

「リプリー、リプリー」

ニュートが手を引く。

「リプリー、あっちへ行くの」

ニュートは、換気ダクトを指さしている。

「あれがどこに行けるか、私、全部知ってるの」

そうか、とリプリーは納得した。

「分かったわ。でも、あなたが先頭じゃだめ」

「どうして？　私、エースだったのよ」

「そうだったわね」

●ニュートが道を知っているなら先に行かせ、あとを従いて行く……⇨116へ
●リプリーが先に入り、中の様子を窺い、安全を確かめる……⇨129へ

## 138

ゴーマンは慌てて全員を中央制御室に集めた。

「何だい、何だい。いきなりよ、せっかく住民の居所が判ったってーのに、えー中尉殿」

例によって毒舌を吐くのはハドソンだ。他の皆も、ザワザワと勝手に喋っている。エーポンがそんな皆に向かって叫んだ。

「コラ！　静かにしねーか。中尉殿のお言葉だ！」

その言葉に、何となくニヤニヤしながらも、静かになる。

「重大発表を行う」

兵士たちの態度は、とても、重大発表を聞こうというムードではない。ある者は横っちょを向き、ある者は机の上に腰かけ、またある者は、鼻歌をうたっている。

「今日、いますぐにここから撤退する」

「えーっ！」

「何だ、そりゃ」

「どういうことだ」

兵士たちがザワめく。

「私が説明するわ」

兵士たちの後方にいたリプリーが叫んだ。その声に、彼らは振り返る。リプリーの隣で、ニュートが、下を向きながら立っていた。

兵士たちにとって、リプリーが説明するのはこれで二度目。何をまたいまさら、という気持ちが強い。しかし、リプリーは、ニュートの経験として喋った。勿論、PDTの反応の件も含めて。

彼らの表情にちょっとした変化が出てきたのであった。

**●ゴーマンの言う通り、すぐ撤退する** ……⇨93へ

**●ゴーマンはビビッているが、彼は特別臆病なのだ。後でそっとエイリアン退治に行く** ……⇨109へ

## 139

ニュートが走り出そうとすると、女王はその方向へ首を向ける。

リプリーは両手を挙げ、懸命に相手の注見を引きつける。

機を見て、

「今よ」

ニュートは素早く、床下に逃げ込んだ。それを確認すると、リプリーは、身体を反転させ、後ろへ走った。そこにはパワーローダーの格納庫があった。

女王は、リプリーを追うが、間一髪、リプリーは格納庫へ飛び込んだ。女王が、ハッチにぶつかった。目標を失った女王は床下へ逃げたニュートを追い回し始める。ニュートの隠れている床下に巨大な鉤の手を伸ばす。その時であった。女王の背後でシューッとハッチの開く音が響いた。

パワーローダーに乗ったリプリーであった。

「ちょっとオバサン！　私の娘にちょっかい出さないでよ！」

ズンズンと、重い足音を響かせ前進する。ローダー越しにエイリアンを睨みつける視線はいままでにないほど鋭い。

女王は巨大な腕を振りあげた。リプリーは操縦桿を的確に操る。ローダーの巨大な腕が、回転し、女王に殴りかかった。

⇩口絵 7 へ

**140**

奥の方に透明な管のようなものが七本見えた。薄いパープル色をした光を放っている。生体培養装置だ。七つの管全ての中に、ベージュ色した、指だけが発達した手のようなものが入っている。

「フェイスハッガーよ」
リプリーが言った。
バークは、そのうちの一本に顔を近づけた。いきなり中のものが動き、ガラスビンの内壁にぶつかった。バークは思わず後退した。
「あんたに一目ボレしたみたいだぜ」
ヒックスがニヤッと笑った。
「生きているのは二体だけのようだ」
ビショップが管の前に捨てられたようになっているファイルへ目を通しながら言った。突然、
「何かいる！」
フロストの動体センサーが大きな音をたてた。
「後ろだ」

⇩219へ

## 141 エピローグ

ニュートは生きていた。
リプリーとはぐれた彼女は、皆が来るのを待っていた。そのとき、いきなり後ろから化物が襲ってきた。逃げる瞬間にケーシーを投げつけたのだった。投げつけざまに、ニュートは、走

っていた。

走る目的地は、自分がリプリーたちに発見された隠れ家だった。そこに逃げ込めば安全だ、という確信があったからであった。

ニュートは、リプリーたちがまた来てくれるのではないかとひそかに願っていた。しかし、いつまで経ってもリプリーは来なかった。

「皆死んだんだわ……」

ニュートはまた一人になってしまった。今度はケーシーもいなかった。食料倉庫にもあいつらが入りこんでいるようだった。空腹のため、彼女の体力は衰え、やせ細っていくだけだった。衰弱した彼女の耳に、着陸艇（ドロップシップ）の降りるような音が聞こえてくる。また新しい救助隊が来たのかもしれない。が、彼女は横になり、枕を抱えながら心の中で呟（つぶや）いていた。

「また、来た。でも、皆、また、死んでしまうんだ。きっと……リプリーたちがそうだったように……」

彼女の意識も次第に薄れ始めていた……。

END

## 142

ヴァスケスは敵が至近距離まで来るのを待った。その方が仕留めやすいと思ったからだ。敵がジリジリと近づく。息を潜めて敵を待つ。目の前に来た。いまだ！ ヴァスケスは

心の中で叫び、引きがねを絞った。轟音が響き、弾丸が敵の身体を貫いた。瞬間、ヴァスケスは返り血を浴びた。思わず絶叫しそうになる。が、彼女は、こらえた。

身体が溶ける。肉の焦げるイヤな臭いが鼻をつく。それが自分の身体から発するものだということに、我ながら腹が立った。その怒りは敵にぶつけられる。ヴァスケスは、身体を酸で焼きながらも意識が遠くなるまで引きがねを絞り続けた。死んでも銃は、離さなかった。

DEAD END

## 143

リプリーは、爆風と炎の中を歩き続ける。

彼女は、曲がり角ごとに火炎放射器を放ち、信号弾を置きながら進んだ。信号弾の赤い煙が彼女の歩いた軌跡を印していく。彼女のもつロケーター用センサーの表示が、徐々にニュートとの距離が近まるのを告げている。あの時、ロケーターをニュートにあげておいてよかった。

⇩85へ

## 144

ハイパースリープ用カプセルの並んでいる部屋で、リプリーとニュートは、人工睡眠用の楽な服装に着替えていた。

「これで本当に、怖い夢を見ずに眠ることができるのね」

「そうよ。地球に帰るまで、好きなだけ楽しい夢を見ればいいわ」
「うん」
ニュートは、まだ話足りなさそうな表情をしていたが、リプリーに促されて、カプセルのカバーをあけた。
「さあ、お休みなさい。起きたら、地球よ」
「はい、ママ、お休みなさい」
「お休み……」
リプリーは、これで本当のやすらぎがくると思った。ニュートの寝顔を一時見つめ、自分もカプセルの中に身を横たえた。
その隣ではヒックスがすでに眠りについていた。
そして、その向こうには、上半身だけにされた合成人間（シンセティック）、ビショップの姿もあった。
スラコは深い闇の中、滑るように地球へと向かう軌道を描き始めた。

END

## 145

ハドソンに罵（ののし）られ、それまで黙っていたバークが、ようやく口を開いた。そして、いかにも憤慨したという口調で叫んだ。
「兵器をつくって売るのは、誰だってやってることだ。それがなぜ悪い。どうしてこんなこと

になるんだ。」
「バカヤロー！」
ハドソンが殴りつけた。バークの身体が二メートル近くも跳んだ。
「ボンクラ中尉の次は、あんたかよ。裏切り者！」
ヴァスケスが手を上げた時、部屋中の明りが消えた。

⇩128へ

## 146

音が急に止まった。敵がこちらの出方を窺っているのかもしれない。音は止まったが相変わらず、吐き気をもよおす臭いはそのままだ。
ヴァスケスは、この臭いに耐えられなくなった。吐き気を忘れる意味もあったろう、威嚇のつもりで彼女は、スマートガンの引きがねを絞る。暗闇の中に、火花が散った。
「グ！」
敵が呻いた。数発、命中したようだ。手応えがあった。しかし、その瞬間、前方から粘液状の塊が飛び、ヴァスケスの数センチほど前に散乱した。ジューッという音がして、ダクトの金属が腐蝕し始める。
ヴァスケスは、金属が溶けていくのを目の当りにして、一瞬、身体を硬直させた。その酸をまともに身体に浴びていたら、いま頃、身体が溶けていたことだろう。

また、ズズッという音が聞こえた。死体を引きずって歩くとこんな音がするのかもしれない。敵が一歩、近づいたということは、このままの距離で射つと、酸を引っかぶるということになる。

ヴァスケスは、二歩、下がって、思っきり銃を発射した。

目の前に黒い幕が引かれたと思った。しかし、こんなところに、暗幕があるはずはないし、また、そんなものを引く者もいないだろう。黒い幕と思ったのは、敵が苦痛のあまり立ちあがった姿だった。

立ちあがりながら、腕を前方に出し、その辺をガリガリと引っかき始めた。ヴァスケスは、少しずつ後退(あとずさ)りながら射ち続ける。ダクトの中に、轟(ごう)音が響き渡り、ドサッという大きな音がした。

その黒い塊はいつまでも、腹を波打ち続け、しぶとく呼吸を続けているのだった。

108へ

## 147

「あんた、何、考えてんの」

リプリーが、バークの顔を睨(にら)みつける。

誰もバークの提案など、聞こうとする態度は見せない。ヴァスケスの質問がとどめだった。

「ゴーマン、あんた、自分じゃ、どう思ってんのよ。言ってみなさいよ」
いきなり自分のことが話題にのぼって、ゴーマンは完全に思考が混乱し始めていた。
「い、い、い、いや……」
「いやなのね」
「あ、あ、そ、そういうことじゃ……」
ハドソンがジレて、尻を蹴とばす。
「バカヤロー！　はっきりしろ！」
よたよたと、その場に坐り込む。
「あ、あの、まだ完全に頭は、元に戻っていないから……あ、あ、あ……」
「辞退するのね」
ヴァスケスが、彼の目の前に立ちふさがって見下した。
「はい」
その会話を聞きながら、リプリーはフラストレーションが増大してくる自分の心をもて余し
115へ
ていた。

**148** リプリーはエアロックの作動レバーに手をかけ、〝OPEN〟に倒した。アウトドアハッチが開き始めた。空気が抜ける。強風がリプリーを襲った。身体全体が後ろに引きずられ髪の毛が抜けそうなほどだ。

ここで落ちるわけにはいかない。吹き飛ばされそうになりながら、リプリーは、梯子を昇る。右脚を一段あげようと梯子から離したその時、右足首が驚くほど強い力で掴まれた。

⇩口絵14へ

**149** 動体センサーの音がますます高まってきた。それも大軍らしい。

「変だ。動き回っているはずなのに、姿が見えないというのはどういうことだ」

ハドソンが不審気に呟いた。

通路からコンソールルームへ戻り、ヒックスとヴァスケスは、ドアを溶接した。センサーの音はますます緊迫感を伝えてくる。

⇩209へ

**150** 「こっちには何も映っていない。もう少しそこで様子を見て、前進せよ」

ゴーマンはそう指令を出して満足そうな顔をしている。リプリーは、〝この男、何も分か

っちゃいない〟と思った。事態を把握していない。このままでは彼らは全滅する。早く脱出させなくてはいけない。しかし、ゴーマンはそうは考えなかったようであった。

イライラしながらモニターに目をやると、クロウの映像に黒く、大きな腕のようなものが映し出された。腕の付け根には、巨大な影が潜んでいた。

⇩222へ

## 151

その頃、リプリーは、医療室でニュートを抱きながら眠っていた。少女の幼い匂いが、リプリーを想い出の世界へと迎え入れた。子どもと庭でブランコに乗ったときのこと。食べ物の好き嫌いをしかって、彼女がひと口も食べずに抵抗したときのこと。お弁当をつくってハイキングに行き、転んで怪我をしたときのこと。走馬燈のようにそれがクルクルと現れては消え、消えては現れた。

「ウーン」

ニュートが寝返りをうった。その身体に毛布をかけてやる。遠くで何か爆発音のようなもの音が聞こえたが、別にどうということもないだろう。明日はここを撤退するのだ。撤退すれば、ニュートからの情報があるのだ。エイリアンのいる位置、状況などが判る。そうすれば、再度、人数を増やし撃退することができるだろう。

エイリアンさえ倒せば私の任務は終るはずだ。そうなったらニュートとみずいらずで暮らす

ことができる。そうだ。養子にしよう……。

が、リプリーは知らなかった。否、知らずにいたのはリプリーだけではない。抜け駆けをした三人すら知らなかった。彼ら三人が潜り込んだ地点で弾丸が飛びかうことが極めて危険だということを。

彼らの使用する弾丸はただの弾丸ではないのだ。

核融合炉の隔壁すら簡単に貫通してしまうほどの威力を有する爆裂弾なのだ。

リプリーは、ニュートの寝顔を見つめ、微笑んで、また深い眠りについた。その眠りはあと数分で永遠の眠りになることにはもちろん気づくはずはなかった。

数分後――。

アケロンは爆発した。跡形もなく……。もちろん、ニュートの持っている頭部だけの人形もどこにあるかは誰も分からない……。

DEAD END

## 152

強風の中、エレベーターの上昇音を耳にしながらリプリーは自分に言いきかせる。

「ニュートを守る。絶対にニュートを守る。あんなやつに殺されはしない」

いつの間にかエレベーターの音が聞こえなくなっていた。その代わりに聞こえたのは、非常事態を報せる警告だけ。それは、残りの三〇秒を教えていた。

小さな爆発は続く。その度に離着フロアが地震のように揺れ動く。リプリーは、再度、空を見る。しかし、そこに、着陸艇（ドロップシップ）の影は見えない。リプリーは、覚悟を決めるときだ……と、唇をかみしめた。小爆発は連鎖的になり、タイムアウトはすぐそこまできているらしい。

爆発の揺れによろけながらリプリーはニュートの目を見つめた。目と目が絡みあう。二人の間に余計な言葉は必要なかった。ここまで頑張ることができたのだ。ニュートはリプリーの身体にいままで以上に強くしがみついた。リプリーの肌から汗の匂（にお）いが伝わってくる。汗の匂いは母の匂いだった。その匂いは絶望に陥りそうになる気持ちにやすらぎを与えてくれた。

エレベーターから出た女王が、その大きな腕を二人にグイと伸ばしてきた。

「目をつぶるのよ。ニュート」

「うん」

二人が交した最後の会話だった。もちろん二人の目に、着陸艇（ドロップシップ）が炎の中、下から浮きあがってきたのを見ることもできなかった。そしてビショップのセリフを聞くことも……。

「しまった！　遅かったか……」

DEAD　END

**153**

ニュートはリプリーに髪を撫（な）でられながら深い安堵感（あんどかん）とやすらぎの中にいた。いままでの緊張が一度に解き放たれたのだろう。涙が急激に流れ出す。

「大丈夫よ、ニュート。私たちはもう安全なのよ」
ニュートの涙が止まる頃に、前方にスラコが見えてきた。母船は、いままでの恐怖と戦慄の時間をすべて飲み込んでくれそうに大きく頼もしく見えた。着陸艇がスラコの船内に入っていく。外部エアロックのハッチが閉じられる。
リプリーは、座席ベルトをはずして、眠り続けているヒックスを心配気に覗き込んだ。背後にビショップが来て、
「鎮静剤で眠っているんだ」
「医療センターに運びましょう」
リプリーがヒックスの腕を抱えようとした。ビショップに下半身を持ってもらうつもりだった。が、ビショップは、首を振った。
「彼はぐっすり眠っている。そっとしとこう。担架で運んだほうがいい」
「そうね」
リプリーはビショップの目を見つめて頷いた。彼女は、ニュートの手を取り、ビショップと肩を並べて乗降タラップから外に出た。
「リプリー、君が離着フロアに上がってきたとき、驚かせて悪かった。あそこに停めておくには危険すぎたんだ。少し離れて浮いている方が安全だったから。風も弱いしね。そうしながら

モニターを見て君たちの行動を監視していたんだ」

申しわけなさそうに言うビショップにリプリーは、心から感謝の意を込めて手を握った。

「ありがとうビショップ。あなたはきちんとやってくれたわ」

「そう言ってくれると、うれしいよ」

二人の気持ちは完全に一致していた。そこには地獄を生き抜いたもの同士、そして助けあった者同士の心の交流があった。

と——。リプリーとビショップの間に一滴、上方から雫が垂れてきた。その雫は床を腐蝕し始める。視線が交差する。リプリーの目に驚愕と恐怖の色が走るのをビショップは見た。が、もはや遅かった。彼の後方から巨大な昆虫の尖った尻尾が音もなく伸び、その先端が彼の胸部に突き刺さった。その瞬間、上へと持ちあげられそうになり、ビショップは苦しみのあまりリプリーの左肩を掴む。彼女のTシャツが破れた。

彼は、悲鳴をあげる間もなく、突き刺さった尻尾に身体ごと宙に持ちあげられていた。合成人間の特長である、ミルク色の血液が大量に噴き出した。自分の身体の中心を突き抜けている尖った尻尾を掴んではみたが、逃げられるものではない。その時、リプリーは、反射的にニュートを自分の背後に隠していた。

⇩27へ

## 154

ゴーマンは半分、腰を抜かしたようにへタり込んでいる。リプリーが戻ろうとするとそこへ、ヴァスケスが追いついてきた。

「何やってんのよ。あんた、男でしょ」

ヴァスケスが、パルスライフルをゴーマンの首に巻きつこうとしている鉤の手に向けて、乱射した。辺りに血の酸が飛び散る。

「早く行くのよ！」

ヴァスケスに促されて、ゴーマンは、よろけながらリプリーの方に歩いていく。リプリーはチラッと一瞥しただけで、ニュートのいる方向へと戻った。

ゴーマンは我ながら情けなさそうな顔つきだ。後からヒックスが追いついてくる。四方から来る敵に乱射しながら、

「何やってんだ」

その隣をすり抜けていった。

ヴァスケスは、常にしんがりをガードしながらダクトの中を後向きに進まねばならなかった。

彼女は追ってくる敵を的確に倒していく。

「ニュート！　ニュート！」

リプリーが叫ぶ。
「どこに行ったの！」
ニュートがいない。後方に気を取られているうちにニュートが先に行ってしまったらしい。
「どうした」
ヒックスが背中合わせになり、首だけこちら向きになり訊いた。
「ニュートがいないのよ」
途方にくれたようにリプリーが答える。
「先で待ってるんじゃないのか」
「ちょっと行って探してみるわ」
「あまり先まで行くなよ」
頷いて、リプリーは周囲に気を配りながら、ニュートが行ったと思える方へと、足を運んでいった。
⇩77へ

**155**

どのくらいの時間が経ったろうか。階段の上で待機しているヒックスたちの耳に、ゴーマンとエーポンらの慌ただしくやり合う声が聞こえてきた。退屈のあまり、ウツラウツラしていたハドソンも目を覚ました。

「何だ!? 何が起こったんだ」
「シッ、静かに……。何だか理由は判らんが、地下の連中は銃の使用を禁止されたらしい」
「何だって!? そんな馬鹿なこと」
「どうやら、炸裂弾を使うと、このシステムの壁を破壊する危険があると言ってるぜ」
「ヒックス、行ってみようぜ。ここで、こうやっていてもラチはあかないぜ」
「そうだな」
二人の兵士は、命令を無視することを全く気にしていないという風に階段を下り始めた。

⇩171へ

## 156

ドレイクとヒックスが探知機の指示方向へ移動した。ステンレス・スチールの迷路に出る。その先は食品処理システムだ。振り向くと目の前をさっと黒い影が移動した。ドレイクがその影を追うようにスマートガンのトリガーを絞る。次の瞬間、ヒックスがスマートガンの銃身を掴み、銃口を上へ向けていた。
「リプリー、ちょっと」
ヒックスがアゴをこなす。
リプリーは腰を落とし、影が入ったパイプの奥を覗きこんだ。怯えた瞳が光っている。女の

子らしい。

「大夫丈よ、怖がらないで」

と、リプリーが身体を乗り入れようとするのをヒックスが制し、半身になって中に手を突っ込んだ。

「イテ！　こいつ、手をかんだぞ」

床下の方に逃げるような音がする。少女は床下を逃げ回り、傍らのダクトの中へ飛び込んだ。リプリーが中に入って追いかけようとした。

**●リプリーが自分で追いかける**……⇨7へ

**●いきなり、リプリーが追うのは危険だ。まず隊員が追いかける**……⇨110へ

## 157

ニュートの案内で三人は、大きな通路に出た。そこは、リプリーと、ヴァスケスがはぐれるきっかけになった通路につながっていた。

ヴァスケスが二人に言った。

「ちょっとどうなったか見てくるわ。待ってて」

ヴァスケスは、スマートガンを構えながら走っていく。そして、あっと叫んで立ち止まった。彼女が見たのは悲惨な姿だった。ゴーマンを始め、バーク、ヒックス、フロストなどが、倒れ

ていたのだ。その死に方は尋常な姿ではない。
ゴーマンは首が離れ、首なしの死体になっていた。ヒックスは、上半身と下半身の向きが逆になっている。バークは強い力で壁にでもぶつけられたのか、カエルがつぶされたように身体がヒシャゲていた。
あまりの壮絶さに思わずヴァスケスは後退りをする。そして、ニュートとリプリーのところへと走って帰った。
「どうだったの？」
リプリーが訊く。ヴァスケスは固い表情をしたまま視線をそらした。その反応でリプリーは全てを理解した。
「帰ろう、リプリー。ＡＰＣへ」
「そんなにひどいの」
ヴァスケスは何も言わずに頷く。
「分かったわ」
リプリーがニュートの顔を見つめながら、
「ニュート、案内して。外に出るのよ」
コクリと頷き、ニュートは二人の間に立って道案内を始めた。

69へ

## 158

リプリーは、なおもニュートに向かって叫んだ。

「逃げるのよ！」

言われてニュートは床下に入り込んだ。が、リプリーは武器を持っているわけではない。戦いたくても素手では勝ち目はない。周囲を見回し何か武器として使えそうなものはないかと探す。何もない。武器倉庫に行くような余裕があるわけではない。

自分がここで死んでしまえば、ニュートも同じ運命を辿ってしまうだろう。何とかしなければ……そう考えているうちに、女王エイリアンが目の前まで迫ってきた。こいつと面と向かっているだけでも、目まいがしてきそうだ。

やがてその目まいは現実のものとなった。エイリアンの腕で振り回されていたのだ。リプリーは振り回されながら、ニュートの今後のことを考えていた。

が、それも、考えていられなくなった。

DEAD END

## 159

「ありがとう。でも、あなたが指揮官なんだから、あなたが持っていたほうがいいわ」

「俺は、自分の位置はいつも判ってる。あんたがどこへ行ったか判らなくなると困るんだ」

「そうお、じゃ預かっておくわ」

リプリーはブレスレット型のそれを、右の手首に巻いてみた。すぐ、しっくりと手になじんだ。
「婚約指輪じゃないのが残念だが……」
「そうね」
リプリーの口元がほころんだ。
「じゃ、俺は仕事があるから」
ヒックスは、他の箇所の溶接作業やバリケード構築に余念のない仲間たちの方へと、歩き去った。
リプリーは腕のロケーターに目を落とした。
私の居場所が判らなくなった時、それこそが全員の最後なのだ。決してあの怪物たちのまゆ、になんかされない。その時は、自ら命を絶つわ……。ここの住民たちのような無惨な姿を誰にもさらしたくはない……。
リプリーはブレスレットをゆっくりと外し、傍らのロッカーのすき間へ押し込んだ。

⇩82へ

## 160

パワーローダーの左の一振りが、女王をはじき飛ばす。態勢を立て直したエイリアンは、巨大な四本の腕をふりかざした。右のスイングで女王を床に叩きつける。

「カモン！」

リプリーが叫ぶ。

怒り狂った女王エイリアンは、凄まじい勢いでパワーローダーに襲いかかった。巨大な錨のような爪が、リプリーの頬をかすめる。リプリーはパワーローダーのハッチオープンのリモートスイッチを押す。エアロックのハッチが開き始める。女王の腕をローダーで受け止めたリプリーに今度は鋭い牙が向けられる。リプリーの目前に粘液をしたたらせた牙が迫る。一瞬リプリーは顔を背ける。リプリーは咄嗟に溶接用レーザーのスイッチを押した。女王の身体に青白い火花が走った。次の瞬間、もつれ合った両者は、すぐ傍らで大きく口を開けていたエアロックの中へ落下していった。

ローダーと巨大なエイリアンはもつれ合ったまま十五メートル程落下して、アウトドアロックの上で止まった。幸いローダーが、女王の上にのしかかった形となり、化物の自由を奪っていた。

安全ベルトを外し、リプリーはローダーからいち早く脱出した。そして、ステップに足をかけ、途中にあるエアロック作動装置に手を伸ばす。アウトドアを開けて、エイリアンを船外へ放出するつもりだった。かつての経験からして、あいつらを倒すにはこの場合これしか方法はないのだ。

⇩148へ

**161**

「殺すのは反対だわ」

リプリーは、ハドソンを制した。

「連れて帰って、証言させるのよ。会社幹部と軍の上層部を告発してやるわ」

「でもよー、このままにしておきゃー、必ず、また面倒を起こすぜ」

ハドソンが口をとがらせた。ヒックスがキッパリと言った。

「O・K、連れて帰ろう。ハドソン、ヘタなまねをしないように、奴を拘禁しろ」

「分かったよ。手も足も出ねェーようにしてやるぜ。バークさん、あんたは、LV426のユダってやつだ」

⇨145へ

**162**

放置されたロケーターを取り上げ、リプリーは途方に暮れていた。

〝もう、ニュートを見つけだす方法はないのだろうか〟

その時、彼女の耳に、聞き覚えのある叫び声が飛び込んできた。

⇨235へ

**163**

リプリーは、護衛のエイリアンに向け、火炎放射器を放ち、威嚇した。左右の護衛はスーッと身を隠した。

再度、リブリーは、周囲を見回した。全身に緊張がみなぎる。

⇩21へ

## 164

「ハドソン！　今、殺られたのは？」

ヒックスが、混乱の中で化物に巻き込まれて見えなくなった影の主を尋ねた。

「エーポンだ！」

「何だって」

ヒックスは、周囲で蠢き、襲撃のチャンスを待っているような化物たちに弾丸を浴びせながら、全員に退却命令を出した。エーポンが死んで、ゴーマンが現場にいないとなれば、ヒックスに指揮権は渡る。

「戻れ、早く、戻るんだ」

敵はますます増えてくる。しかも、それが何だかよく判らない。ハドソンは、半狂乱になって叫びながら乱射する。

「バカヤロー！　死んじまえ！　この、ヨダレの鼻くそヤロー！」

炎は舞い上がり、その部屋は硝煙と化物がまき散らすヨダレと、酸の血と、兵士たちの汗で、鼻をつく臭いは、ヘドが出そうだ。

「とにかく、逃げるんだ！」

ヒックス、ハドソン、ヴァスケス、ドレイクの四人は、その部屋から命からがら逃げ出した。

⇩172へ

**165**

通信機から入ってくる混乱ぶりに、二人は緊張の表情になった。仲間が、危険な目にあっているのだ。放っておけるものではない。

二人は、走り始めた。しかし、通路は、ところどころ、酸に腐蝕されたような穴が開いていたり、粘着質の物体がくっついている場所があったりで、思うように走ることができない。

「位置は！」

ハドソンが一度止まって訊く。十字路に出たからだ。左右を覗く。

「左だ！」

ヒックスが叫んだ。

ゴーマンとエーポンのやり取りを思い出しながら前進する。

⇩174へ

**166**

「ドレイクを助けるのよ！」

スマートガン仲間が、目の前で苦しんでいるのを黙って見てはいられない。ヴァスケスが戻ろうとする。

「やめろ！　ムダだ」

ヒックスが身体を掴んだ。身体をよじりながらヴァスケスは抵抗するが、ヒックスは、離さない。ヴァスケスは、涙を溜めながら、ＡＰＣに乗り込んだ。

⇩231へ

## 167

「何でー！　イテーだろう！」

どうもハドソンはヒックスのことも、上官とは思っていないらしい。それでも命令通り混乱の中に飛び込んでいこうとするが、一度状態を把握するために、全景を確認した。異様な壁にはりつくようにして射ち続けているのは、ヴァスケスだ。中心にいて退却を叫んでいるのは、指揮官のエーポン。そこまでは判別できた。ところが他は炎と煙の中にまぎれているために誰がどの黒い影なのかよく判らない。

「これじゃ、いきなり中に入っても仕方がねーぜ」

「そうだな」

ヒックスも、突っ込み態勢をとってはいるものの、その場で周囲を見回している。

⇩170へ

## 168

「ドレイクを助けなければ！」
ヴァスケスが、スマートガンを抱え直して、ドレイクの方に走る。
「よし、行こう！」
ハドソンが一番先に飛び出した。次にヒックスが跳んでいく。が、敵は一匹だけではなかった。化物に包囲された彼らは、全滅した。その頃、階上のＡＰＣの回りにも、化物たちがおし寄せてきていた。

ＤＥＡＤ　ＥＮＤ

## 169

ヒックスのかけ声がハドソンにはずみをつけた。火炎と硝煙の中、ハドソンが突っ込む。
目の前にちょうどエーポンがいた。
「皆、いるか。隊列、乱すな！」
「何だこれ！　キャー！」
「ウワ！　後ろから来たぞ」
「大きい！　ギャー！　何物なんだ！」
全員、頭の中は混乱しているのだ。そのうちそんな会話をしていることもできなくなった。
エーポンが、叫ぶ。

「ディートリック、大丈夫か」
彼女の絶叫が響いたのだ。続いて、フロストが、化物の身体に巻き込まれた。次々と仲間たちが化物の餌食になっていく。
「退却！　退却しろ！」
エーポンの声が絶叫になり、やがて薄れてしまった。

⇩164へ

## 170

絶叫が聞こえてきた。エーポンの声だ。
「退却！　退却するんだ！」
「ワッ！　何だ！　これは。助けてくれ！」
「ギャー！　大きいぞ」
「皆、一人になるな！　列を乱すな！」
エーポンは、必死に隊を立て直そうとするが、昆虫の化物のようなものに急に出会ったための混乱が、隊列を乱す原因になった。
「キャー！」
ディートリックが絶叫して、身体が、化物に摑まれる。恐怖の顔になる。やがて、鉤のような腕が、彼女の胴体を砕いた。次に摑まったのはフロストだ。首に巻きついた黒い腕が、彼を

締めあげ、ズルズルと引き込んだ。
「ディートリック！」
エーポンが叫ぶ。しかし、その声は恐怖を誘う以外の何ものでもない。やがて、エーポン自身も、化物に足と胴体を掴まれ、絶叫とともに、その姿は闇に消え去ってしまった。

⇩164へ

## 171

注意を払いながら降りていくと、そこにはいままで見たこともないような世界があった。壁は、溶けたクリスタルガラスが一面にはりついたような状態である。
「何だ!? この壁は」
ハドソンが触ろうとする。
「わけの判らんものに触るな」
下に降りるほど、そのデコボコした壁は増えてきた。それに、熱気も加わり、身体が汗ばむ。
「何か異様なムードだぜ」
「こうこなくっちゃ、面白くないさ」
ヒックスがニヒルにウソぶく。
「下じゃ、何だか、大騒ぎしてるみたいだ」

ハドソンが、通信機に神経を集中する。

「何かヤバそうだ」

●このまま入るのはまずい。一度、APCに戻ろう……⇨173へ

●彼らを救出するため、前進する……⇨165へ

## 172

大気改造ステーション内部で、エーポン、他四人が化物の犠牲になった。命からがら、ヒックス、ヴァスケス、ハドソン、ドレイクの四人が地下から脱け出した。

外は暗い。暗闇の中に見えるAPCが地獄に現れた天使のようだった。走って、APCに乗り込もうとする。ヒックス、ハドソン、ヴァスケスと続き、ドレイクがしんがりを守りながら走る。と、そのドレイクが闇の中に潜んでいた化物に足首を取られた。

「ギャー!」

ドレイクが叫ぶ。持っているスマートガンを乱射した。化物に引きずり込まれながら射ったために、酸がドレイク自身に振りかかった。化物が断末魔の喘ぎを見せながら、再度ドレイクに覆いかぶさろうとした。

「ドレイク!」

スマートガンの射手仲間だ。ヴァスケスは思わず救出しようと身体を反転させた。

●仲間を見殺しにはできない。助けに行く……168へ
●もう助からない。自分たちの命も大事、そのままＡＰＣに乗り込む……166へ

## 173

「おい、やっぱり、このまま入ったんじゃ、ヤバイ。ＡＰＣに戻って救出した方がいいんじゃないか」

ハドソンが、ヒックスの肘を突っつく。二人の額は汗で光っている。その汗は、単に、熱気のせいだけではなさそうだ。

通信機から入ってくる音はもう何が何だか判らないほどの混乱を伝える。

「こりゃまずい！　やはり、ＡＰＣで救出に行った方がいいぞ」

ヒックスが叫ぶ。ハドソンは通信機の内容を把握しようとするが、叫び声だけで意味が判らない。

「やっぱりだめだ。判るのは、化物が出てきたってことだ」

「よし、ＡＰＣに戻ろう！」

ヒックスが、振り向いて叫んだ。

そのときだ。ヒックスは、ハドソンの後ろから、まっ黒な化物が腕を伸ばしているのが目に入った。

「ハドソン！　後ろだ！」
ハドソンが振り向き、絶叫した。ヒックスが、パルスライフルの引きがねを絞る。弾丸が化物に命中し、血が出た。返り血を浴びたハドソンの顔が溶け、目玉がつぶれた。助け起こそうとしたヒックスの上から、新手の化物が覆いかぶさってきた。

DEAD　END

## 174

ヒックスは、先の方で、先陣たちが、炎の中で混乱しているのが見えた。ヴァスケスはスマートガンを乱射している。確か使用禁止になったんじゃなかったか、と思ったが、彼女がゴーマンの命令など、ロクに聞かないことは知っているので、それほど重要なこととは思わない。敵の方が問題だった。その敵が、何ともいえぬ不気味な化物だからであった。甲虫の異種。ヘビとトカゲの雑種、とでも言おうか。口元から垂らしているヨダレが、グラしない。
「エーポン！」
ハドソンが叫ぶ。が、声は戻ってこない。彼らの戦いは壮絶だ。ハドソンは、一瞬、立ち止まってワメく。
「何だ。あの化物は！」
反撃するのも忘れて、呆然としている。ヒックスがそんなハドソンの尻を蹴とばし、叫んだ。
「コラ！　中に入るんだよ」

●すぐに乱射の中に飛び込み救助する……169へ
●再度、周囲を見回す……167へ

## 175

ニュートはまゆに埋まりながら涙にくれていた。目の前にある卵の頭部が蠢き始めた。恐怖と絶望感がニュートの全身を走った。卵はモコモコと蠢き、やがて、二つに割れた。そこから顔を出したのは、赤黒い化物の幼虫だった。初めは頭部。身体をくねりながら、卵から、ふ化し始める。取りつく目標はニュートに違いない。目の前で起きる異常な光景にニュートは、絶叫するしか対処の方がなかった。

「キャーッ！」

⇩口絵1へ

## 176

リプリーは、脱いだジャケットの上に、手榴弾を装着した弾帯をひろげた。手榴弾をグレネードランチャーに装塡する。一発。一発その動作は慎重かつ敏速だ。次に、弾帯をたすきがけにした。

そして、立ち上がるとパルスライフルにジョイントした火炎放射器に点火した。⇩217へ

## 177

「しようがねーな」

ヒックスは、放っておくことにした。

ゴーマンは、火炎放射器を重そうにかつぎながら、ヒックスの後を追いかけ、ニヤリと笑った。

「こいつでやつらもイチコロだ」

⇩190へ

## 178

ゴーマンがバタバタと後を追いかけ、ダクトの中に入る。

「おーい待ってくれ！」

先に進んでいく、連中に声をかけた。と、彼らがゴーマンの方に戻ってきた。

「どうした」

「エイリアンの大軍がいるのよ」

ヴァスケスが戻ってきてゴーマンの身体を押す。

「よし。あそこまで戻ろう」

後方に少し広い十字路がある。先陣が戻り十字路にそろったとき、ゴーマンが一歩、前に出た。火炎放射器の引きがねを絞ろうとした。

「あっ！　やめ……」

ヴァスケスが止めようとした。が、遅い。ゴーマンは、炎を吐き出させた。瞬間、ダクトの中に炎が舐めるように走った。あわてて方向を変えようと動かす。炎がダクトの壁にぶつかり、ゴーマンにはね返った。

「ウアー！」

叫び声をあげると同時に、首にぶら下がっている手榴弾が爆発し、すぐ後に待機している全員をも、炎と爆風が包み込んでしまった。

DEAD END

## 179

APCの中ではゴーマンがパニックに陥り、自制心を失っていた。彼の目の前で、モニターが消えた。エーポンだ。

「撤退しろと言っているのに。命令が通じてないらしい……」

その自失したゴーマンに向かってリプリーが叫ぶ。

「彼らは退路を絶たれたんです。何とかしてください！」

⇩61へ

## 180

リプリーは、なかなか到着しないエレベーターの動きに焦っていた。ニュートの手を引き、梯子を昇ろうとする目の前に女王の姿があるのも気がつかなかったのだ。ニュート

の手を引こうとしたとき、女王エイリアンの巨大な鉤が二人の身体を摑んだ。二人は声をあげる間もなく、ひねりつぶされていた。

DEAD END

## 181

「ものすごく、でかいぞ」

「姿が見えない、どこなんだ」

彼ら全員、目に見えぬ恐怖にパニック状態になりつつあった。

フロストの背後の壁がモソッと動いた。その気配に振り返ったフロストは、大きな鉤状の爪で一気に空中に持ち上げられた。

「アアアアア――」

「出たぞ、撃て」

ドレイクとヴァスケスのスマートガンが火を吐いた。一斉に壁目掛けて連射する。

壁の主たちの肉片が飛び散る。返り血を浴びた兵士が大声をあげる。

「ウワッ、鋼鉄製のアーマーが溶けるぞ。熱い、ウワーッ」

「火炎放射器を使え！」

エーポンの怒声がとぶ。

ウィルツボウスキーの火炎放射器が火を放った。生き物の焼ける臭いがフロアいっぱいに充

滴する。

炎と銃声の入り混じる中、兵隊たちは、出口へと殺到した。

「逃げろ、撤退だ」

その時、奥の一角で小爆発が起こり、しばらくして、次々と爆発が起こり始めた。

「急げ、爆発するぞ」

誰かの銃弾が大気改造システムの一部を破壊したのだ。

彼らの後方で中程度の爆発が数回続いたかと思うと、突然、強大な爆風と炎が建物全体を走り抜けた。

規模にして四十メガトン級の核爆発であった。

DEAD END

## 182

「了解。ドレイクが先頭だ。あとは二列で続いてこい」

兵士たちは広い傾斜した通路を下り始めた。天井はやたらとパイプが組みあわさり、それ自体が迷路のように見える。光はそれらのすき間から入ってくるわずかな明りだけだ。彼らは、探査灯の照度を上げた。

⇩230へ

## 183

「ファイナル・アプローチ」
フェロロの声だ。スクリーンには、アケロンの地表が見える。そして、ハドレイ市が見えてきた。それをきっかけに乗組員たちは、着陸に備えて装備チェックを始める。ゴーマンは、APC内のモニター・スクリーンを一つ一つ点検し始める。ゴーマンはいかにも手慣れた手つきで、モニター・スクリーンとリード・アウトをコントロールする。操縦席から声が聞こえた。
「雲がようやく切れました。視界は良好」
スクリーンに映るハドレイ市は、どこにも異常があるようには見えない。ひっそりと佇んでいる、どこにでもあるような宇宙都市だ。
「信号は、微弱でも安定しています」
「ハドレイ市はどんな様子だ」
「パンフレット通りですよ。保養地、歴史をつくりあげていく建造物、明りも見えます。電力は確保されているようです。非常事態なのかどうかは判断できません」
ゴーマンは次にスパンクマイヤーに印象を訊いた。
「風が強いようです。何かに襲われたとか、爆撃されたというような形跡はないようです。建物にも異常はありません」

ゴーマンは、モニター画面を一つ一つ入念に点検する。そこには、作戦用の他に海兵隊員一人一人について氏名が書かれ、それぞれ二台のモニターが並んでいる。上に並んでいるのは、兵士一人一人のヘルメットについているカメラからの映像。下の列は彼らの身体の状況が分かるようになっている。脳波、心電図、呼吸数、脈はく、視力などがスクリーンによって一目瞭然となっているのだ。

「異常はないようだ」

ゴーマンはスクリーンを見ながら言った。

エーポンが命令を与える。兵士たちは、動きを速めた。バックパックを背負う、火器が手渡される。ヴァスケスとドレイクはスマートガンを装着し終え、満足そうに頷き合った。

「オイ、誰かヒックスを起こせ」

エーポンが怒鳴り散らす。

作戦指揮所の正面スクリーンには外の景色が映っている。正面には円錐形の金属の山。そこから高温のガスが噴出している。そしてわずかに聞こえる音は、大気改造システムが活動している音だ。

「アケロンにあんな施設はどのくらいあるの？」

リプリーがバークに訊いた。

「三十くらいだろう。ここの大気を地球の標準大気に近い状態へもっていくんだ。全て無人化されている。まあ、それをうちの会社がやっているってわけだ」

着陸艇（ドロップシップ）は、活動を続ける巨大な塔へと接近した。スクリーンに市街地の屋根が見える。ゴーマンはそれらを見ながら、市街地の上をゆっくり旋回するように指示を与えた。

ゆっくりと上空を回る。スクリーンには何も異常は認められない。動くものも見えなければ、人影もない。いくつか明りが見えるだけだ。

「何も問題はなさそうだ」

バークが言った。

●安全なようだ。即、着陸して地上探査に移る……⇨95へ

●まだ、安心はできない。もう少し、上空からの探査を続ける……⇨100へ

## 184

一方では、

「あなたレベッカっていうんでしょ」

リプリーが、少女の指を一本一本、揉（も）みほぐしながら話しかけていた。

少女は、それでも心を開こうとはしない。

「ほらね。女の子というのは、いつもきれいにしておくものなのよ。こうやって拭いていくと、

あなたも、とっても可愛いわ」

少女の水々しい肌が浮きあがってくる。それまで、汚れの中に隠れていた瞳がくっきりとその姿を現してくる。

⇩24へ

## 185

リプリーの操縦するＡＰＣは轟音をあげて疾走する。左右の壁に激突するたびに火花が飛ぶ。前方を見ると、地下Ｃ階への通路がハッチで閉ざされている。

「しっかり、つかまって！」

リプリーは、そう叫ぶとハッチ目がけてＡＰＣを突進させた。

〝グワシャーン〟

ハッチを破壊してＡＰＣは止まった。

「バーク、ドアを開けて！」

バークがすかさず乗降口に走る。

ドアを開けると、硝煙と油の燃える臭いが飛び込んで来た。ヒックスがショットガンを射ちまくる。スマートガンを構えた、ヴァスケスとドレイクがその向こうから姿を現した。

あたりは炎と煙に包まれ、阿鼻叫喚の戦場と化していた。

「ハドソン、急げ！」

ビックスがＡＰＣに飛び込み、怒鳴った。

⇩211へ

**186** 梯子に足をかけようと手を伸ばしたときリプリーは、前方にエイリアンのそびえ立つほど巨大な姿を認めた。このまま、梯子を昇っては追いつかれてしまうだろう。リプリーは再度、エレベーターの前に戻る。エイリアンの姿がどんどん近づいてくる。

間一髪のところでエレベーターが到着した。慌てて乗り込む。エレベーターが動き出したとき、女王はすぐ目の前に来て牙をむいていた。リプリーは火災放射器で威嚇した。だが、炎はすぐ小さくなった。燃料切れだった。エレベーターはゆっくりと上昇し始めた。

⇩45へ

**187** 「ウワッ、こりゃひでえや」

ハドソンは吐気をこらえた。

「生きてるわよ、こっちは」

ディートリックが叫んだ。やはり、身体全体を半透明のガラス状の膜に覆われ、壁にはりついていた。女だった。助けなくちゃ……と、ディートリックが半透明の膜を引きはがそうと手をかけた。その時、中の女は弱々しく目を開き、小さな声で、懇願するように言った。

「お願い、殺して」

次の瞬間、女の顔は苦痛に歪(ゆが)み、その胸のあたりが異様に膨らみ始めた。
ディートリックの目に赤い膜が走った。女の胸から血しぶきがほとばしり、そこから鋭い牙(きば)をもったグロテスクな頭がのぞいているではないか。
ディートリックは思わず、飛びのいた。怪物は女の胸を食い破り、身体半分程、姿を現している。細い鉤(かぎ)の様な手がギクシャクと動く。
「火炎放射器！」
エーポンが絶叫する。エーポンは、牙をもつ頭に向かって放射した。他の二人もエーポンにならって炎を吹きつけた。左右に首を振りながら怪物は炎に灼(や)きつくされていく。彼らは、壁面全部を炎で焦がした。しかし、炭化せずに溶け始め、壁全体がドロドロになって流れ落ちた。足元にドロドロの水溜(た)まりができる。鼻がバカになりそうなほどの肉の灼ける臭(にお)いが周囲に充満していた。

⇩口絵 8 9へ

## 188

「あっ！」
着陸艇(ドロップシップ)の到着を待ち受けていた全員が己れの目を疑った。着陸艇(ドロップシップ)は、いきなり降下し始め、しかも左に傾いている。やがてそのまま降下し、土手に激突した。炎が吹きあがり、爆発をくり返す。破裂した金属片が、APCを直撃し、なおもバウンドし、大気改造ステーション

に突っ込んだ。あたり一面、あっという間に炎に包まれた。

⇩54へ

**189** リプリーは、ハドソンがコンピュータに向かって情報を呼び出している間、アケロンの記録ファイルに目を通していた。読んでいくうちに、顔色が蒼白になり、ファイルを持つ手が震え始めた。

「O・K、設計図を打ち出したぜ」

ハドソンのその声に、ハッと我に返った。

⇩97へ

**190** ヒックス、ゴーマンの二人が、ニュートとリプリーを追いかける。どうやら医療センターへは、バークがドアをロックして入ることができずにいるようだ。

「こっちよ！」

ニュートの先導で、彼女はダクトの中へと入っていった。ゴーマンも、火炎放射器を重そうに肩で息をしながら従いていく。

⇩178へ

**191** リプリーは持ってきた弾薬類をジャケットの上にひろげた。信号弾のパックを取り上げる。パックを開け、信号弾をバラにして、左右のポケットにねじこんだ。次に、弾帯（ガンベルト）か

ら、手榴弾を引き抜くと、パルスライフル付属のグレネードランチャーの弾倉に装填した。
そして、弾帯をたすきがけにした。ゆっくり、立ち上がるとその特別兵器を右肩にかけ、火炎放射器に点火した。準備はできた。

⇨217へ

## 192

リプリーは、周囲を見回した。
「ヒックス、早く、下へ行く通路を探し出すのよ。ニュート、すぐ行くから待ってて」
「OK！」
ヒックスも、リプリーの後から従いていく。
その時だった。
「リプリー！」
ヒックスがリプリーの腕をとった。彼女の傍らにエイリアンの尻尾が伸びてきたからだ。が、その行為もすでに遅かった。エイリアンの尻尾はリプリーの身体を突き刺し、ヒックスの身体には、巨大な腕が巻きついてきたのであった。

DEAD END

## 193

ヒックス、ハドソン、ヴァスケスの三人はテキパキと行動した。
運用センターに通じるドアは、全て溶接し、バリケードで塞いだ。

一連の作業を終え、ホッと一息したリプリーに、ヒックスがブレスレット状のものを手渡した。

ロケーターだ。アケロンの住民が身体に埋めていたPDTの兵隊用だ。

「これを持っていると、あんたの位置がいつでも確認できるよ」

「あなたもつけてるの？」

「一つしかないんだ」

●指揮管のヒックスがつけ方がいいと返す……159へ

●ありがとう、と言って素直に身につける……43へ

## 194

火炎放射器による炎によって灼きつくされたせいか、その周辺は燃えるまゆと死体のために一面、煙に包まれた。視界はほとんど効かない。そんな中、ハドソンの声が響いた。

「何か、いるぞ！」

彼の動体センサーがチカチカと急を報せているのだ。

「どこだ！」

エーポンの声がとぶ。

「皆がひしめいているので判断できません！」

「前と後ろからのようでさ！」

⇩106へ

## 195

APCの中では、リプリーがステーションの平面図が表示されているスクリーンを見つめていた。

「一次熱交換機の真下だわ」

「そうだな」

バークが答える。

「危険ね」

「それは言える」

「一体、二人で何の話をしてるんだ」

「中尉、弾丸はどんなのを使ってるんですか？」

「高速爆裂弾だが、それが何か……？」

リプリーはゴーマンと顔を見合わせ、思い切るように言った。

「ゴーマン、あなたの部下たちがあそこで発砲すると冷却システムが破裂するのよ」

ゴーマンは彼女の言葉の意味が分からない。

「それで？」
「それで……冷却水とフレオン・ガスが放出するのよ」
「……？　どういうことだ」
「核融合の閉じ込めシステムが作動しなくなるのよ」
ゴーマンはポカンとしている。
「分からないの！　核融合炉が爆発するのよ！」
「ゲッ！」
ようやく意味がのみ込めたゴーマンは、慌てふためき始めた。
「ム、ム、爆発する……それは困る。そ、そうだ、エーポン、全員のライフルの弾倉（マガジン）を回収しろ。発砲は禁止するんだ」

⇩215へ

## 196

「ヒックス、約束を守ってもらうときがとうとうきたようね」
一瞬、何のことか、と目で問いかける。が即座に頷（うなず）き返した。
ニュートとはぐれ、しかも彼女は死んだ。死んではいなくとも、もうまゆにされてしまっただろう。ニュートを失った今、この広い大気改造ステーションの通路を無事に逃げ切れるとは思えない。いよいよ、自ら生命を断つときがきた。

●こうなったら、できるだけエイリアンたちを道連れにしてやろう。手榴弾で自爆する ……⇨221へ

●いくら何でも粉々にはなりたくない。銃で自分たちの始末をつける ……⇨237へ

## 197

「ビショップ。調査が終ったら、フェイスハッガーの標本はすぐ処分して」

リプリーのその言葉に、ビショップはちょっと困ったような視線を送った。

「バークが、生かしたまま、会社の研究所まで持って帰れるようにと、指示してきた」

リプリーの顔色が変わった。いきなり通話機をとると、バークを呼び出した。 ⇨126へ

## 198

ヒックスが追いついてリプリーに呟いた。

「ニュートとはぐれないように進め」

そして、後方に向かって叫んだ。

「ヴァスケス！　しんがりを頼むぞ！」

「イエス・サー！」

後方から、ヴァスケスの力強い声が聞こえてきた。 ⇨103へ

**199** 隊員たちは命令通り行動した。が、動体センサーは何の反応も示さない。生物はいないようだが、奥へ進むにつれ、周囲は混乱の様相を呈してくる。ひっくり返った机、書類などが、投げ出されている。それだけではない。金属面や壁面が灼けただれているのだ。

⇩233へ

**200** リプリーはハッとして目覚めた。腕時計を見やる。大した時間ではなかった。彼女は、眠りから脱却しようと眼を細めたまま、周囲を窺った。

彼女の眼に大きなガラスビンが床に転がっているのが飛び込んできた。二つだ。

リプリーは一瞬のうちに、事態を察知した。

「ニュート。ニュート、起きて」

そう言いながら、リプリーは手を伸ばし、ベッドの上をまさぐった。

ない！　確かにベッドの上に置いたはずのパルスライフルが見つからないのだ。

バーク！　……。

リプリーの全身に冷たい汗が伝わり落ちる。次の瞬間、骨の鞭が彼女の頬を叩いた。反射的にリプリーはニュートを抱きベッドを跳ねあげた。ガサ、ガサという不気味な音が部屋中に響き渡った。

あいつだ！　ノストロモ号を恐怖に陥れたあいつが、この狭い部屋の中に二匹も……。

リプリーはドアに駆け寄り、開閉スイッチを懸命に押し続けた。だが、ドアはビクともしない。

やっぱり……、と思う間もなく、リプリーは全身に緊張感をみなぎらせた。あいつはどこから襲ってくるか判らない。まして、二匹もいるのだ。

ドアは押しても引いても微動だにしない。万事休すだ。リプリーは懸命にガラス窓を叩いた。その時、彼女の目に飛び込んできたのは、隣の部屋のデスクにこれ見よがしに置かれたパルスライフルだった。側にあった椅子を振り上げ、力一杯ぶつけた。だが、超硬化ガラスを破壊することは到底できなかった。

これだけの騒音が仲間には届かないのだろうか。リプリーは監視用のビデオカメラに向かって、懸命に〝救援乞う〟のポーズを送ったが、全く反応はなかった。

⇩86へ

## 201

全員、医療センターの方に向かおうとしているときに、ゴーマンがまだ後ろの方でモタモタしている。

「何をしてる！」

ヒックスが声をかけた。

「武器を持って行くんだ」

あたふたと、火炎放射器をかつごうとしている。ヒックスは、そんなゴーマンをニガニガし気に見つめていた。

●上司のやることだ。そのまま武器を持たせて行かせる ……⇨177へ

●この状況の中では身軽の方がいい。武器をおろさせる ……⇨227へ

## 202

着陸艇（ドロップシップ）の操縦席（コックピット）ではフェロロが離陸準備を始めていた。

「スパンクマイヤー出発するわよ」

フェロロの呼び出しに、スパンクマイヤーは着陸艇（ドロップシップ）のスロープを小走りに昇った。昇りきった所で何気なく、傍らのフロアに左手をついた。粘液状のものが彼の手に付着した。

「何だ？　こりゃ」

彼は粘つく手を飛行服のズボンでこすりながら、操縦席（コックピット）へと向かった。 ⇨76へ

## 203

そんな混乱の中、ヴァスケスとドレイクはまだ冷静な方だった。

「やるわ」

ヴァスケスが唇を引きしめる。その声と同時に二人は、スマートガンを構え、引きがねを絞った。強烈な銃声が響き、化物たちが砕け散る。

「だ、だ、だれだ。発砲は禁止したはずだ。銃器の使用は禁止したはずだ。バカメ！」
ゴーマンの声だ。ヴァスケスは、うるさそうにヘッドセットを投げ捨てた。彼女の視線はスマートガンの照準スクリーンから離れようとしない。手、脚、腰が一体となって兵器と同調する。腰をおとし、目標に向かって身体をひねる。その動作は流れるようだった。⇩91へ

## 204

背中を引きはがすような強風と女王の強大な力とで身体中の関節が軋み始める。歯をくいしばりながらリプリーは、耐えた。梯子にからませた左肘に全体重がかかる。もうダメだ、と思ったと同時だった。急に身が軽くなった。足首が抜けたわけではない。宇宙航海用のハイトップシューズが脱げたのだ。
女王エイリアンはリプリーの靴の片方を掴んだまま、果てしない闇の空間へと、クルクル回りながら放り出されていった。
リプリーは懸命に梯子を昇った。
大型の金属ケースが彼女をかすめて船外へ吹っ飛んでいく。
リプリーが全身の力をふりしぼって梯子を昇りきった時、まず目に飛び込んだのは、ビショップに必死で掴まっているニュートの姿であった。
リプリーは懸命に左手を伸ばし、格子状の床を掴んで身体を支え、同時に右手ですぐ目の前

にある作動スイッチのパネルを開け〝CLOSE〟のボタンを押した。身体を引っぱる風が次第に弱まっていく。ハッチは完全に閉じた。

「マミー、マミー」

ようやく立ち上がったリプリーの腕の中に、ニュートが飛び込んできた。

「もうどこへも行かないわ、どこへも……」

ニュートを抱きあげ、頬ずりするリプリーに、上半身だけになり、内臓を露出させたビショップが床から笑いかけた。

「人間にしてはよくやるね」

そう言って、ウインクした。

⇨144へ

## 205

二人は、エレベーターの方へと走る。

エレベーターの前に着く。スイッチを押すが、なかなか来ない。イライラしていると、傍らに梯子が見えた。リプリーは梯子に足をかけようと手すりに手を伸ばした。

●エレベーターはなかなか来ない。そのまま梯子を昇る……⇨180へ
●一度、周囲を見回す……⇨186へ

## 206

「おい、ビショップ、例のお手並み、見せてくれよ！」
ハドソンが、大きく目を見開き、悪戯っぽく声をかけた。
ビショップと呼ばれたその男は、またか、というように手を振った。
「やれよ」「見せてくれよ」兵士たちは口々に言いつのる。
「よし」
おもむろに立ちあがったビショップは、ナイフを取り出し、机の上に手を広げた。
「おっ、始まるぞ」
興味津々で、皆がビショップの手元を注目した。その時、ドレイクが、ハドソンの手を取りおさえ、机の上に持ちあげた。
「ワー、何をする。ワー、やめてくれ」
ハドソンの指の上にビショップの指が被さる。ギャーギャー、ワメき散らす、ハドソンをチラっと見たビショップは正確に、ナイフを指の間に突き刺し続けた。
そんな騒ぎを横目で睨みながらリプリーは食卓についた。そして心の中で呟く。あのエイリアンの怖さも知らず、呑気なものだ……。

⇩10へ

**207**

リプリーは、爆風の中を歩き続けた。彼女が歩く傍らを炎が追いかける。小爆発がそれに続く。通路は、前、来たときとはまるで様子が異なっていた。それだけ、爆発がくり返され、火炎による損傷が多いということになるのだろう。リプリーのロケーター用センサーの表示がニュートに近づいていることを如実に示している。急がなくては……。

⇨85へ

**208**

モニターを見ているゴーマンには、彼らに何が起こったのか判断がつきかねた。

「どうしたんだ。何があったんだ」

ひとり言を言いながら、ディートリックとフロストのモニターが消滅していくのを、手をこまねいて見ているだけである。リプリーは、そんなゴーマンに怒りすら覚えていた。

**●とにかくゴーマンに退却命令を出させる**……⇨120へ

**●ぐずぐずしてはいられない。すぐさまＡＰＣで救出に向かう**……⇨61へ

**209**

ハドソンが距離を皆に報せる。

「十七メートル」

彼らは銃を構え、火炎放射器に点火し、戦闘体勢に入った。
「十メートル。クソッ、やたら近ェーぞ」
生唾を飲む音が聞こえた。
「九メートル……八メートル……部屋の中に来てるぞ。クソ、どこにいるんだ。こんなバカなことってあるのか！」
彼のセンサーの画面では、とっくに敵は姿を見せているはずなのだ。
ハドソンの目つきは恐怖に包まれた。
「六メートル……五、五、五メートル。あっ！」
全員が同じことを思った。センサーを天井に向ける。音は、これ以上、出ないと思われるほど高まり、緊張感と比例して危機を報せ始めた。
ヒックスが机に上り、天井板を上げ、明りを照らした。
「グ……」
そこにいたエイリアンの大軍……。一匹ずつの身体のスキ間もないほどであった。ボヤけた明りの中に、それらが、ズ、ズ、ズ、ズ……、群れをなして、前進してくるのだ。⇩134へ

## 210

リプリーはエレベーターの中で苛立ちを静めるため、何度もパルスライフルを構え直したりした。

そして、階数表示パネルの数字が替わる度に、気持ちは高ぶる一方であった。

そろそろだと思った頃、火炎放射器に点火した。

⇩217へ

## 211

ドレイクの弾丸が切れた。スマートガンを捨て、火炎放射器で傍らにいるエイリアンに炎を浴びせる。

と、彼のすぐ横に別のエイリアンが現れ、手を伸ばそうとした。

「ドレイク！」

ヴァスケスがエイリアンめがけ、スマートガンを発射した。

「ウワー！」

ヴァスケスの弾丸で傷つけられたエイリアンの酸がドレイクを襲った。彼は視覚を奪われ、苦しみもがいた。

次の瞬間、ドレイクは、自ら放った、火炎放射器の炎の中にまき込まれてしまった。

「ドレイク！」
ヴァスケスが、ドレイクを助けに走ろうとする。
「ヴァスケス、止せ！」
ヒックスが懸命に彼女をＡＰＣに引きずり込んだ。
彼女は口惜しさに、口唇を噛みしめていた。

⇩231へ

## 212

ＡＰＣのスクリーンを見つめていたリプリーたちにエーポンから報告が入る。
「銃を撃った跡のようです」
スクリーンを見ると雨水が垂れているように見える。弾痕の穴から水が漏れているのだ。
「銃撃があったということは何か事件が起こったとしか思えないわ」
リプリーが周囲に訴えた。
が、ゴーマンにしてもバークにしても彼女の言葉には、まともに耳を貸そうとはしていないようだった。ゴーマンが命令を続ける。
「周囲を探索しろ！　エーポン、Ａ班は、コンソール棟へ。Ｂ班は二階を探索。動体センサーに反応があったらすぐ報告しろ！」

⇩199へ

## 213

「こいつを扱えるようになるには、時間がなさすぎる」
ヒックスは残念そうに呟いた。
「そうね、時間がないわね」
リプリーは腕時計に目を落とした。後、二時間ちょっと……。ビショップはもう通信塔に辿り着いた頃だ。
「ありがとう、ヒックス。お蔭で少し落ち着いたわ」
ヒックスは軽く会釈を返すと、再びハドソン、ヴァスケスが額を寄せ合っているテーブルの方へ歩んで行った。
寡黙な、それでいて頼りになるその優秀な下士官の背中を、リプリーはしばらく見つめていた。

**※Cをチェックして** ……⇩57へ

## 214

リプリーはニュートを抱きあげると来た道を引き返そうとした。振り返ると、いままで以上の大きな爆発が彼女の目を覆った。退路が閉ざされる。行く手をはばまれながら、逃げ道を探し続ける。

ひとしきり歩くと、いままでとはどこか異なった場所に出た。爆発の音も遠くでしか聞こえない、そこだけ独立したような異様な場所であった。一歩、踏み込んだリプリーは、思わず立ちつくしていた。

- **Eがチェックしてあれば** ……⇨ 41へ
- **Dがチェックしてあれば** ……⇨ 22へ
- **Cがチェックしてあれば** ……⇨ 29へ

## 215

今度は地下に進入している、兵士たちが慌(あわ)てる番だった。

- **仕方がないので、とにかく命令に従う** ……⇨ 48へ
- **弾倉(マガジン)を回収されたら戦えなくなる。全員が拒否して前進する** ……⇨ 56へ

## 216

「ねえ、ゴーマン、気にすることはないのよ。あなたたちはみんなあんな生き物に出会うのは初めてなんだから」

そこへバークが口をはさんだ。

「ちょっと皆に話があるんだ」

リプリーが、横目で睨む。ヴァスケスが振り返った。全員が、何を言いだすのかと、不審気にバークを見つめた。

「皆、聞いてくれ、ゴーマン中尉はこのように回復した。身体が治った以上、指揮は、彼にさせるのが本来の姿だと思うが、どうだろうか」

- **バークの提案を会議にかける** ……⇨102へ
- **頼りないゴーマンなどに任せることはできない。バークの提案を無視する** ……⇨147へ

## 217

大型のエレベーターはゆっくりとエイリアンの待つ地獄へと降りて行く。ようやく、地下B階に着く。ここからは、自分の足で目的の地下C階まで行かねばならない。ドアが開いた。熱気と油の焼ける臭いが顔にふりかかる。リプリーは一歩、踏み出した。

- **EとFがチェックしてあれば** ……⇨143へ
- **Fがチェックしてあれば** ……⇨207へ
- **Fがチェックしてなければ** ……⇨122へ

## 218

運用センターでビショップとの通信に懸命だったヒックスたちの間に、戦慄が走った。けたたましい火災警報が鳴り響いたからだ。

赤いランプが点滅する。

「火事だ！　医務室だ、みんな急げ」

ヒックスは叫ぶと走り出した。ヴァスケス、ハドソン、そしてゴーマンも続く。

ヒックスは走りながら、途中にあった消火器をひったくっていた。

⇩59へ

## 219

「エーポン！　応答せよ」ゴーマンがA班を呼び出す。

「ハイ！」

「そっちの班で、はぐれた者はいないか」

「おりません。全員、CPUで待機しております」

「生き物がいるってことだな。フロスト、慎重に進め。ヒックス、フロストと一緒に前進しろ」

フロストが動体センサーの反応を確かめながら、ゆっくりと前進を始める。別の場所を探索していたドレイクが合流する。リプリーもヒックスの後に続いた。

⇩156へ

医療室の中を抜け、通路へと出る。格子状のパネルが床面を構成している。⇩156へ

**220** フェロロが仲間たちの姿を肉眼で確認できる距離まで来たとき、彼女は背後にドアの開く気配を感じた。

「スパンクマイヤー？」

彼女が言い終るか終らないかであった。彼女の首と顔に、ガイ骨の手が発達したような黒い触手が伸びてきた。口をあけ、ヨダレを垂らしながら、牙をむく。フェロロは非常脱出スイッチに手を伸ばした。だが、それも一瞬遅かった。絶叫する間もなかった。⇩188へ

**221** わずかな時間の間に、エイリアンの数が増えたようだ。それも一匹ずつ迫ってくるわけではない。重なりあって迫ってくる姿は黒い津波のようだった。

「挟まれたようだね」

ヴァスケスが呟く。その声に全員が、敵の存在に気づいた。黒い津波は、彼らの前後で大きく揺れていた。

彼女の声がきっかけに一人一人が、手榴弾を取り出した。ゴーマンの手が震えている。ヴァスケスから、肩をこづかれ、手榴弾の作動装置を捻った。

「バカ、まだ、早いわよ」
ゴーマンはヴァスケスに言われてはっと気がついた。その瞬間、ゴーマンは叫び声をあげた。
「わーあーあーあー」
一人で、黒い津波の真ん中へと狂ったように突っ込んでいった。
「最後までドジな中尉だこと……」
ヴァスケスの呟きが、全員の苦笑を誘った。彼らに訪れた最後の笑いだった。
「じゃ……」
リプリーが全員の顔を見回す。一人一人と視線を合わせる。
「いくわよ」
その声が合図になった。

⇩238へ

## 222

「キャー!」
ディートリックの声が兵士たちの耳をつんざいた。化物に身体を持ち上げられたのだ。その瞬間、持っていた火炎放射器の引きがねが絞られ、発射した炎がフロストの身体を包んだのである。フロストは炎に包まれ落下していく。
フロストの持っていた雑のうが燃え上がる。

中には全員から回収した、弾薬と手榴弾が入っている。

「逃げろ！」

ヒックスが叫んだ。

次の瞬間、爆発が起こり、数人が吹き飛ばされた。

⇩208へ

## 223

APCから降りたリプリー、ゴーマン、バーク、ビショップの四人はヒックスたちと合流し、中央制御棟へと入っていった。

「医療センターを通る方が近道だ」

バークの言葉に頷きながら、通路を歩く。

APCのモニターで見る以上に通路は惨憺たるありさまだ。酸によって腐蝕した中を進み、一行は、医療センターに辿り着いた。

⇩140へ

## 224

「ヴァスケス、ハドソン、通路を警戒しろ！」

ヒックスは、すばやく指示をだした。

ヴァスケスとハドソンは、動体センサーの反応を確かめながら、通路へと進んでいく。油断なく、パルスライフルを腰だめにしている。

二人は、通路に出ると、左右に散開した。バリケードには、異常はない。だが、センサーの画面は、多数の生物が迫ってくるのを明確に示している。
「変だな。姿が見える距離なんだがな」
「私の動きに反応しているんじゃないの？」
ヴァスケスにそう言われ、ハドソンは、センサーをヴァスケスの方に向けた。
「いや、違うな。もっとたくさんの何かだ」

⇩149へ

## 225

「作戦は指導要項通り行う。解散！」
ゴーマンは言い終ると、エーポンを促した。
「さあ、さあ。ガキ共、さっさとしろ！　七時間で降下準備を終らせるんだ。グズグズするな。ハドソン、ドレイク、さあ」
エーポンの威勢のいい声がとぶ。
兵士たちは、口々に何か言いながらもそれぞれの任務を遂行すべく、フロアの各所に散って行く。

⇩84へ

**226** 人工睡眠カプセルから、目覚めた兵士たちの声が食卓につこうとするリプリーの耳に入ってくる。

「誰なの、あの新人は」

彼らは、リプリーの存在に不審を抱いているようだ。

「おかしな生物の姿を見たんだって」

そんな会話の中に嘲笑のような匂いがあるのを聞き流しながら、リプリーはテーブルにつこうとした。

全員、テーブルについたとき、テーブルの隅から大きな声が響いた。

⇩206へ

**227** 「何やってるんだ！」

ヒックスはゴーマンに近づいた。火炎放射器をふんだくり、刺すように言った。

「こういうときは身軽な方がいい。それに火炎放射器を狭い場所で使うのは危険だ」

⇩94へ

## 228

「ヒックス、ニュートを探すのよ」
「とにかく、一旦外へ出よう。ビショップの呼んだ着陸艇（ドロップシップ）がもう着く頃だ」
「ダメよ、ニュートが心配だわ。あなた一人で行って。私は一人ででもニュートを探すわ」
「冷静になるんだ、リプリー。ライフルの弾丸も残り少ない。例え、ニュートを探しに行っても、敵と出会ったら、戦える状態じゃないんだ。判るだろ、リプリー。彼女を守ってやることもできないんだぞ」
「判ったわ、ヒックス。着陸艇（ドロップシップ）で弾丸を補給し、それから探しに戻るのよ。約束よ」
「判ってるさ」
二人は換気筒の点検用梯子（ステップ）を昇り、上の通路へと出た。
「あっちだ」
通路を管制塔めがけ走り出した、その時だった。不意に傍らの暗闇から、怪物が姿を現した。ヒックスはすかさずリプリーを背後にかばい、怪物めがけてパルスライフルを射ち込んだ。至近距離だったのが災いした。
怪物から噴き出した血が、ヒックスのアーマーに飛び散った。白い煙をあげながら、またたく間にアーマーを浸しヒックスの身体を灼（や）く。

「早く、脱がせてくれ」

リプリーは懸命にヒックスをアーマーから解放してやった。床に転がったそれは、ブスブスとくすぶり続けていた。

リプリーは負傷したヒックスを抱え、表へ転がり出た。

管制塔では、ビショップが呼び寄せた着陸艇（ドロップシップ）がちょうど降下してくるところだった。

**●Dがチェックしてあれば** ……⇨6へ

**●Cがチェックしてあれば** ……⇨19へ

## 229

ダクトを進んでいくと、十字路に出た。ニュートが少しためらう。その時、後続が追いついた。

**●陣形を整えて、再度、前進する** ……⇨198へ

**●時間がない。そのまま、ニュートを先頭に入っていく** ……⇨116へ

## 230

APCのモニターには彼らから送られてくる映像が映っている。タンク類、導管、プラスチックの器材などが見える。

「そこがC階だ」

ゴーマンが揺れる映像を見ながら懸命にそれらが何であるかを判断しようとする。
「その正面にあるのは何だ」
「判りません。そっちで判断してください」
その声にゴーマンは、バークを振り返る。バークも首を振った。
「うちではこんなものつくったことはない。住んでた連中がつくったのかもしれない」
パイプ、導管、などが網状になっている部分に、何かくっついているのだ。それは緑と灰色がゴチャゴチャになっていて、ときおり色の濃い部分が混じっている。しかも、湿気をおびているようであり、そこはキラキラと光が反射するのだ。何か液状の接着剤で上塗りをしたようにも見えるし、人間の筋肉のもりあがりを一個ずつはりつけたようにも見える。
「やたら強度があるみたいだ」
筋肉の固まり集団は、C階全域に拡がっていた。それでも、大気改造システムは正常に働いているのだった。
「リプリー、君は判らないのか」
ゴーマンが訊く。
「判らないわ」
その返答に、ゴーマンはガッカリしたように、再度、マイクに向かって言った。

「前進しろ」

## 231

「リプリー！　発進させろ！」

ヒックスが、ドアをロックしようとしたとき、いきなり、二組の鉤のような爪がドアに引っかかってきた。化物がＡＰＣの中に入り込もうとしている。

「ドアをおさえろ！」

ヴァスケスとハドソンが懸命に両側からドアをおさえる。

エイリアンの骨と筋だけでできたような顔がドアのすき間から割って入った。ドロドロとした粘液を口から垂らしながら牙をむく。

「これでもくらえ！」

その口の中めがけてヒックスがショットガンをぶち込んだ。爆裂音とともに、頭部がふっ飛んだ。返り血を浴びたハドソンの左腕が、あっという間に酸に侵された。

⇩口絵 4 へ

⇩ 39 へ

## 232

その時、船内では、ニュートの絶叫が響き渡っていた。

「キャー！　リプリー、助けて！」

床下から抜け出たニュートが、エアロックに抜ける空気の流れに引きずられ、ズルズルと排

出口へ吸い込まれそうになっていた。
同様にビショップも、両断された上半身が強烈な風で排出口へと床を引きずられていた。
彼は咄嗟に格子状のパネルの間に左手を差し込み、ガッチリと掴んで自らを支えた。すぐその脇をニュートの小さな身体が滑っていく。
彼女の身体がビショップの頭上を通過しかけたその時、彼の右手がしっかりとニュートの右腕を掴んでいた。一瞬、重さでビショップの半身が滑りそうになる。彼は左手に力を込めた。

⇩204へ

## 233

モニターを見つめていたリプリーが、はっとしたようにマイクに向かって叫んだ。
「ヒックス！　止まって！」
彼の画面が捉えた床面の異常に目が止まったのだ。
「見えますか。溶けているようだが」
ヒックスの声が答えた。
「溶けたんじゃないわ。腐蝕したのよ」
リプリーの説明に、バークが唸った。
「あの、血液が酸だということか」

リプリーのエイリアンに関する報告書には彼らの生態が詳しく述べられてある。信じようとしないながらも、バークは彼女の報告書を読んでいたのだろう。リプリーはバークの言葉に頷きながら、ノストロモ号の恐怖が身体中に甦ってくるのだった。

⇩239へ

## 234

ニュートは、レーザーの火花を避けるために、場所を移動した。唇が紫色に変わっている。人形を両手で握りしめながら、救出されるのを待っている。

と、その時だった。ニュートの横の水が波打った。はっと思うと、そこからいきなり巨大な化物が姿を現した。

化物が姿を現すのと、ヒックスが切断されたパイプを蹴とばすのが同時だった。

が、そこにはニュートの姿は消えていた。エイリアンの姿も消えていた。波打つ水の上にニュートの握りしめていた人形がフワフワと浮いているだけだった。

「ニュート！」

リプリーの絶叫も、水の中に消えるだけだ。が、彼女は、決然とヒックスに告げる。

⇩口絵5へ

**235**

「ニュート！　ニュート！」

ニュートの声を聞きつけたリプリーは、その方向に走った。

一秒遅れたら間にあわなかったかもしれない。いま、化物が、ニュートめがけて、飛びつこうとしたとき、リプリーが駆けつけ、ライフルの引きがねを絞った。化物は、頭と首と思える部分を上下左右に振り回しながらのたうち回った。ニュートの後ろから出てきた化物をも射ち殺した。

まゆをはがし、ニュートを解放する。

「ニュート！」

「リプリー！」

二人は思いっきり抱きあった。そしてリプリーはニュートを抱きあげ、目を見つめながら、

「行くわよニュート。でも私は抱いていられないから、しっかりつかまっているのよ」

ニュートはコクリと、頷き、リプリーの首に回した腕に力をこめるのだった。 ⇩口絵10へ

**236**

カメラもだめ。ドアは開かない。音は外に聞こえない。絶体絶命である。しかし、彼女の腕の中には何とか助かる方法があるはずだ、という信念があった。冷静になるんだり

プリー。

ニュートとの約束を守るのだ……。絶対に助かる……、と思っているうちに、天井の自動消火装置が目に入った。

「怖いわ」

「大丈夫、もう少しよ。もう少し」

そう言いながら机の上に昇った。ライターを出し、火をつける。その火を天井に取りつけられてある自動消火装置に近づけたのだ。ある一定の温度になると警報器が鳴り、放水される。その音は確実に皆の耳に飛び込むはずだ。早く、早く、リプリーは心の中で叫び続けた。

「ピーピーピーピー」

音がけたたましく鳴り響き、水が一勢に天井から落ちた。それは滝のような勢いだった。

「やった！　これで皆が飛んでくるわ」

⇩218へ

## 237

わずかな時間の間に、エイリアンの数が増えたようだ。それも一匹ずつ迫ってくるわけではない。重なりあって迫ってくる姿は黒い津波のようだった。

「挟まれたようだね」

ヴァスケスが呟く。その声に全員が、敵の存在に気づいた。黒い津波は、彼らの前後で大き

く揺れていた。
彼らは一人一人、銃を取り出した。ゴーマンの顔が青ざめ、銃を持つ手が震えている。
「ゴーマン、射ってやろうか」
自分のこめかみに銃口を当てていたヴァスケスがゴーマンの胸に向ける。
「わ、あーあーあー」
ゴーマンは、叫びながら走り出した。そのまま化物たちの中へ突っ込んでいった。
「いくじなしのドジ中尉」
ヴァスケスの呟きを合図に、全員、銃口を自分のこめかみ、または心臓に向けて発射した。

⇩141へ

## 238

全員の自爆によって誘発された事態は、想像を超えていた。襲ってきた化物の群はおろか、建物をまでぶっとばしたのだ。
「キャー！」
かろうじて化物から逃げ、以前の隠れ家に身を潜ませていたニュートも、その爆発に巻き込まれてしまったのである。

DEAD END

## 239

彼らは建物内部を調べ続けるが、人っ子一人いない。共通しているのは、壁、パイプ、導管などが、酸に溶かされていることと、腐蝕されていることだ。とてもいままで人間が住んでいたところとは思えない。何か異常事態が起きたことは判るが、その異常が何であるかは判らない。

変型して歪(ゆが)んだり、溶けて穴があいていたりという壁面を見ながら、判断つかぬままに、エーポンはとにかく、ゴーマンに報告をした。

「ここは全く無人です。居住区としても死んでいます。原因は判りません」

この報告を聞いてゴーマンは、一応その地域は安全と判断した。

「これから私たちもそちらに向かう。エーポン、CPUを確保せよ。ヒックス、南側入口で我々を迎えろ」

リプリーは、ゴーマンの部下たちに対する指示を聞きながら、心の中で首を振っていた。

〝決して安全なんかではない！〟

APCはそれでも彼女の心とは裏腹に、兵士たちが入り込んだロックへと進む。⇩223へ

## 240

LV426へ向かった人々―スラコ乗組員―

ゴーマン中尉
エーポン曹長
ヒックス伍長
フェロロ操縦伍長
スパンクマイヤー上等兵
ヴァスケス上等兵
ドレイク一等兵
フロスト一等兵
ウィルツボウスキー一等兵
クロウ兵卒
ディートリック衛生伍長
ハドソン技術伍長
ビショップ副長
カーター・バーク

そして、エレン・リプリー

⇩2へ

# 解説

面白い映画というのは、総じてディテールがしっかりしている。言うまでもなく、映画はフィクションである。画面の中ではどんな事が起こっても不思議はないのだ。そして、そのフィクションを支えるのは、ちょっとしたディテールである。それは、例えば、銃火器の扱い方であったり、主人公の好みの音楽であったり、そういう部分への気の使い方がリアリティを生み出し、特にアクション映画に於いてはダイナミズムを創造するのである。

「ターミネーター」という映画を観た時、〝やられたなあ〟という賞讃と口惜しさがないまぜになったような気分に包まれたのも、そういう点に感心させられたからだ。

初めて聞くジェームス・キャメロンなる監督は如何なる人物であろうかと調べてみると、おや、まあ、あのロジャー・コーマンのもとで特殊効果を担当していたとは……。さすがである。しばらくして、そのジェームス・キャメロンが「エイリアン」の第2作を撮るという話を耳にした。リドリー・スコットが監督した前作は、SFホラーの傑作として、すでに揺るぎない地位を得ている。私自身も大好きな作品である。

前作の評価が高ければ、高い程、2作目を作る者の苦労は大変なものだ。シュワルツェネッガーという稀にみる大根役者を、アイデアとアクションに徹することで見世物に仕立てあげた

キャメロンが「エイリアン」をどういう風に料理するか。きっと前作とは一味違った面白い作品になるだろうと期待していたのだが……。

やってくれました！　キャメロン。前作の呪縛から解放された、全く異質の作品を撮りあげてくれた。

理屈は抜きの、まさに「ターミネーター」的アクション映画である。このシツコサがたまらない。「これは西部劇だ！」と思わず膝を叩いてしまった。普通、ヒット作の続篇というのは、前作以上に金をかけるものだ。しかし、キャメロンは金を選ばず、あくまでもアイデアで勝負した。ここに、この作品の成功がある。

前作同様、シガーニィ・ウィーヴァーは実に魅力的である。あの快作、「グロリア」を想起してしまったのは、私だけではないだろう。リプリーの前では「コブラ」も「ゴリラ」もまとめて粉砕されてしまうに違いない。

このようにスピード感あふれる、アクション映画を文章に置き換えると、実につまらないものになり下ってしまう。事実、この映画の小説版を読んでみたが、アクションの迫力がイマイチ伝わってこないのだ。謂わゆるタルいのである。本書の製作スタッフが所詮、映像の持つ情報量と迫力には叶わない、と痛感したであろうことは、想像に難くない。

だからといって、手も足もでないままではいられない。ならば、考え得る限りの〝if〟を設

定し、話にヴァリエーションを持たせることである。〝もしも、ゴーマン中尉が有能な指揮官であれば……〟〝もしも、リプリーが利己的で状況把握力に乏しい人物であったら……etc。（ドリフターズのコント〝もしも〟シリーズは実にオカシイ。）それと、もう一点、出来るだけ、観客が見落しがちなディテールを利用して、仕掛けを作る。彼らは、この二点にのみ留意し、「エイリアンズ」を、こういう形式に作りあげたようだ。

本書では、ワンシーン、ワンシーンがカット順に忠実に再現されている。その上、ナンバーの飛び方がカットバック方式となっており、これは三人称の表現形式の特徴を生かしている。異色の採録シナリオが出来あがったと言える。

では、ここで質問。ラストの対決シーン、リプリーはパワーローダーのどちらの腕で最初の攻撃を仕掛けたか？　映画を観た方でも、覚えている人は少ないだろう。答は本書の該当シーンにある。ちなみに、リプリーがアウトドアハッチを開け、強風の中懸命にハシゴを上ろうとした時、どちらの足を女王エイリアンに摑まれていたか？　この答も、ちゃんと本書の中にあるのだ。

従来の映画の小説版とは、またゲームブックとは、少しばかり異なった楽しみ方が出来ることだろう。

山本雅之

アドベンチャーノベルス

# エイリアン2

## ALIENS™

発　行　1987年1月1日初版
定　価　780円

JICC出版局・佐々木隆
発行人――――蓮見　清一
発行所――――JICC出版局
〒102　東京都千代田区麹町5-5-5
〔振替〕――東京7-170829(株)ジック
〔電話〕――営業部 03（234）4621
編集部 03（234）3688

印刷所――――慶昌堂印刷(株)
編　集――――タスクフォース
写真提供――Twentieth Century Fox Film Corporation.
ブックデザイン――THREE CORD
〔禁・無断転載〕

Adventure Novels
"ALIENS"™

Based on Activision's computer game of the movie "ALIENS"

™designate a trademark of Twentieth Century Fox Film Corporation.
©1986 by Twentieth Century Fox Film Corporation.
乱丁、落丁本はご面倒ですが、小社営業部宛御送付下さい。
送料小社負担にてお取替いたします。

■お願い
本書についての電話によるお問い合わせは、ご遠慮下さい。

ISBN4-88063-246-5

**絶賛発売中！ 新書判／定価各680円**

## 夢幻の心臓 II
## PRINCE OF DARKNESS

光の神よりエルダー・アインに召された夢幻の心臓の戦士が、暗黒の皇子を倒すべく、人間界・エルフ界・魔神界を旅する。ひろがるファンタジックワールド、ストーリーに乗って展開されるロールプレイング感覚を楽しめる。

## ウィル
## WILL

事件の幕を開けた正体不明のミサイルは、世界五大都市へ核ミサイルをプレゼントする予告だった。タイム・リミットは48時間——。阻止計画を完遂するため、敵地の真只中で、作戦行動を展開するアドベンチャー。

## カーマイン
## CARMAINE

作戦のコードネーム『カーマイン』、作戦内容極秘……。命令を受けアーマード・ファイティング・ウォーカーで特殊研究施設カーデイナルに乗り込んだ俺を待ち受けるものは!?人間型歩行兵器ドールと戦う、SFハードアクション・アドベンチャー。

JICC出版局 〒102 東京都千代田区麹町5-5-5 TEL.03-234-4621

ADVENTURE NOVELS

# アドベンチャーノベルス・シリー

## アステカ
## ASTEKA

1930年代初頭、新聞記者のはしくれとしてメキシコを訪れた私は、思いもかけない大事件に出あった。ピラミッド、灼けつく太陽、殺人そして女…。陰謀うずまくメキシコのジャングルで私が見たものは？そして遺跡の謎とは？

## ザ・スクリーマー
## THE SCREAMER

199X年、三度目の大戦が終わった。焦土と化した東京に舞い戻った俺は、モンスター狩りを生業とすることになった。力のみが支配する世紀末。BIAS(バイアス)にはびこるモンスターたちを相手に、俺の戦いは始まった。

## 帝王の涙
## TEARS OF EMPEROR

「俺の名はモズ・シバット。宇宙マフィアのボス・グリンブの手に落ち、伝説の最終兵器『帝王の涙』を探す旅に出るハメとなってしまった」
『帝王の涙』の争奪をめぐるモズと個性豊かなキャラクターたちとのスラップスティックコメディ。

ADVENTURE NOVELS
アドベンチャーノベルス・シリーズ

# ウルティマI

ダークサイドを支配する
邪神モンデインを倒し
世界の秘密を
解いていく旅が始まる。

# ウルティマII

タイムスリップに
巻き込まれた俺は、
時空を越え、
ミナクス打倒に向かった。

# ウルティマIII

闇の呪文〝エクソダス〟に
立ち向かう四人の勇者!
世界を終末へと導く
「大地の蛇」とは……?

破天荒な主人公の成長、多種多彩なキャラクターとの出会い、広大なマップの至る所で繰り広げられる多様なイベント…… ロールプレイング感覚満載で、ユニークな、あのウルティマの世界が、今、ここに広がる。

Adventure Novels "Ultima I・II・III"
Character and Story Base Licenser
© Lord British/Origin Sistems inc.

新書判
定価各680円

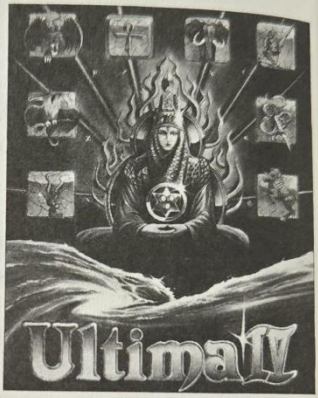
ADVENTURE NOVELS アドベンチャーノベルス・シリーズ

# ウルティマIV

©1986 Twentieth Century Fox Film Corporation

## 絶賛発売中

「ゴータよ、おまえは戦士として放浪する運命じゃ。」不思議な迫力を持つ老婆の言葉に導かれ、無頼漢ゴータは、8つの徳を手に入れる旅に出た……。




定価 680円

# ゴーストハンターズ

©1986 Twentieth Century Fox Film Corporation

## 12月20日発

チャイナタウンの地下街に呪縛された2258歳の幽霊。彼に恋人を連れさられた男が、友人と協力して妖怪退治に乗り出していく…。カンフーアクション&モンスターの奇想天外な迷宮アドベンチャー！

定価 780円

# ロールプレイング
## ゲーム必勝本II

本郷アキラ著　A5判／定価1600円

ザナドゥ・シナリオII、覇邪の封印ほか最新人気ソフトを完全収録。豊富な画面写真と詳しいマップで解説したパソコンゲームガイドの決定版！これで君もシナリオIIが解ける!!

# ザナドゥファイル
## XANADU FILE

日本ファルコム㈱宮本恒之著　B5判　定価1500円

「ザナドゥ」に登場するモンスター、アイテム、魔法を500点以上のイラスト・写真で完全紹介。各レベルの完璧な必勝法など、「ザナドゥ」を楽しむための情報満載。『ボードゲーム版ザナドゥ』付き！

# ゲームブック・ザナドゥ
## GAMEBOOK XANADU

日本ファルコム㈱宮本恒之著　B5判　定価880円

「ザナドゥ」がゲームブックになって登場！　アイテムカード&モンスターで楽しめる3Dゲームブック!?

JICC出版局

JICC

“アドベンチャーノベルズ”
シリーズ

アステカ（既刊）
ザ・スクリーマー（既刊）
帝王の涙（既刊）
夢幻の心臓 Ⅱ（既刊）
ウイル（既刊）
カーマイン（既刊）
＊
ウルティマ Ⅰ（既刊）
ウルティマ Ⅱ（既刊）
ウルティマ Ⅲ（既刊）
ウルティマ Ⅳ（既刊）
＊
エイリアン 2（本書）

©1986 Twentieth Century Fox Film Corporation

ゴーストハンターズ（近刊）

©1986 Twentieth Century Fox Film Corporation

Fifty-seven years have passed after thet awful experience. Ripley, the only survivor of Nostromo, now confronts the creature again. However, the creature multiplied to the number unbelievable.
"This time, the War"
Ripley and her fellowships try to escape from the outland, planet Acheron, almost destroyed by the creatures. Can it be done?
Bizarre Settings! Breathless Speed! Enthralling Actions! Thet really knocks us down!

# ALIENS

JICC出版局
ISBN4-88063-246-5 C0276 ¥780E
定価780円